

GUIDE TO TRAVELLERS.

(Tokaido, Tosando, Kinai and Sanjodo)

By

S. NOSAKI.

Revised edition

Hakubunkwan, Tokyo.

補 增

陽山内畿山東海東

内案遊漫

著文左崎野



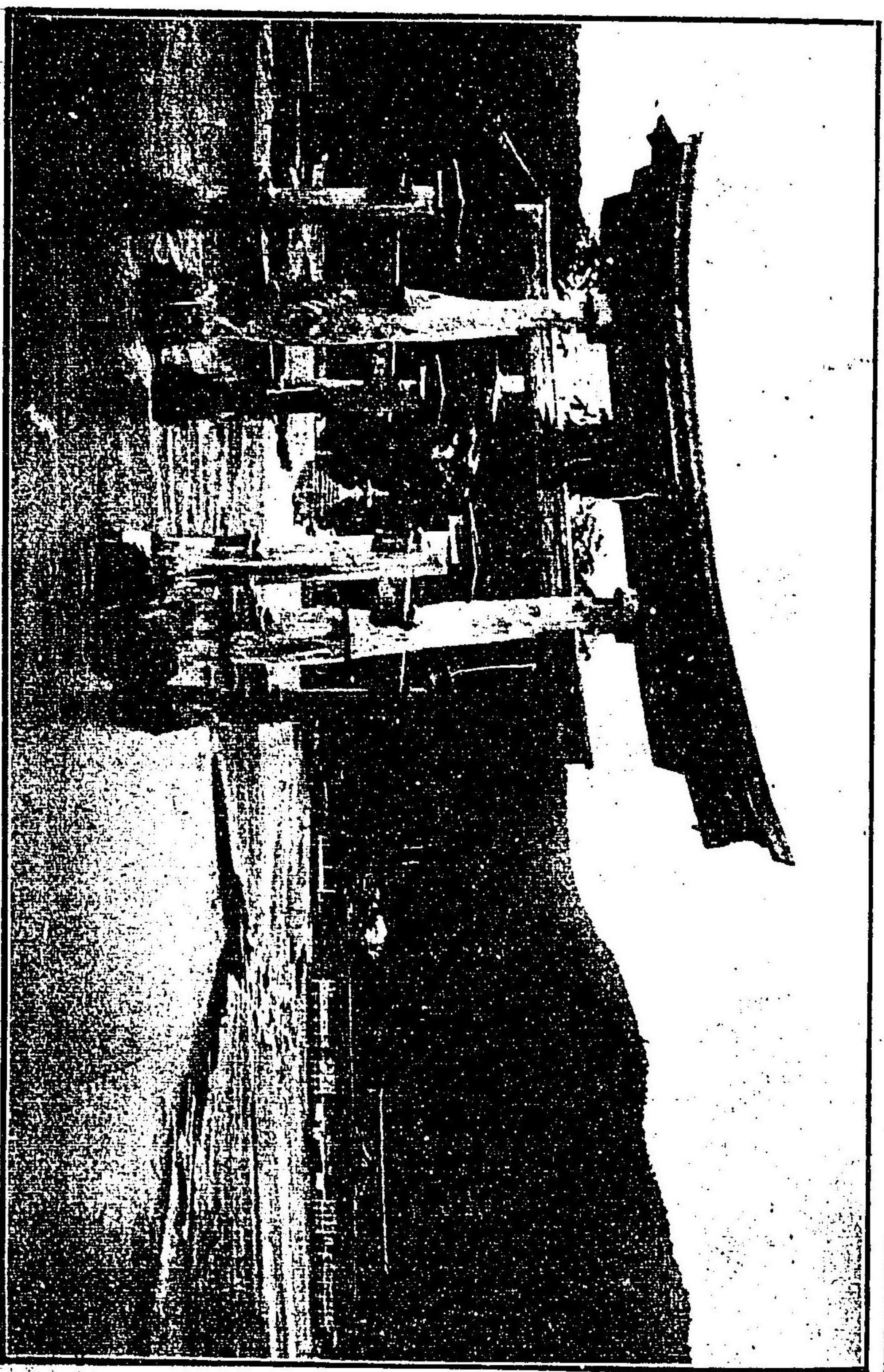
版藏館文博京東

TEMPLE OF TSUKUSHIMA
The temple is situated on a hillside overlooking the sea. It is a fine example of the architecture of the island. The main hall is a simple wooden structure with a thatched roof. The surrounding area is well-kept and the view is very beautiful.

小川一真
真影刻銅版及印刷

小川一真

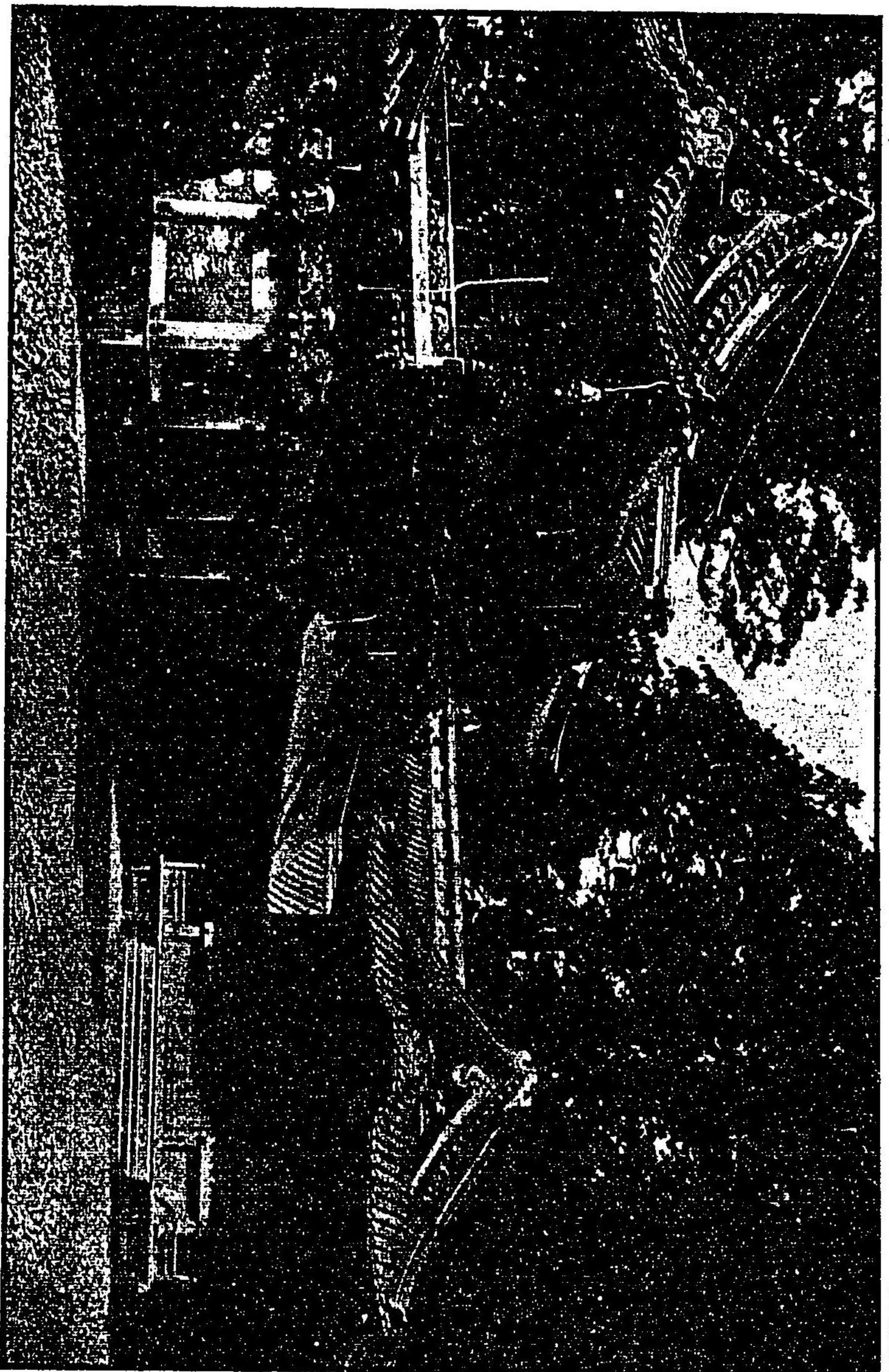
真影刻銅版及印刷



TEMPLE OF TSUKUSHIMA.

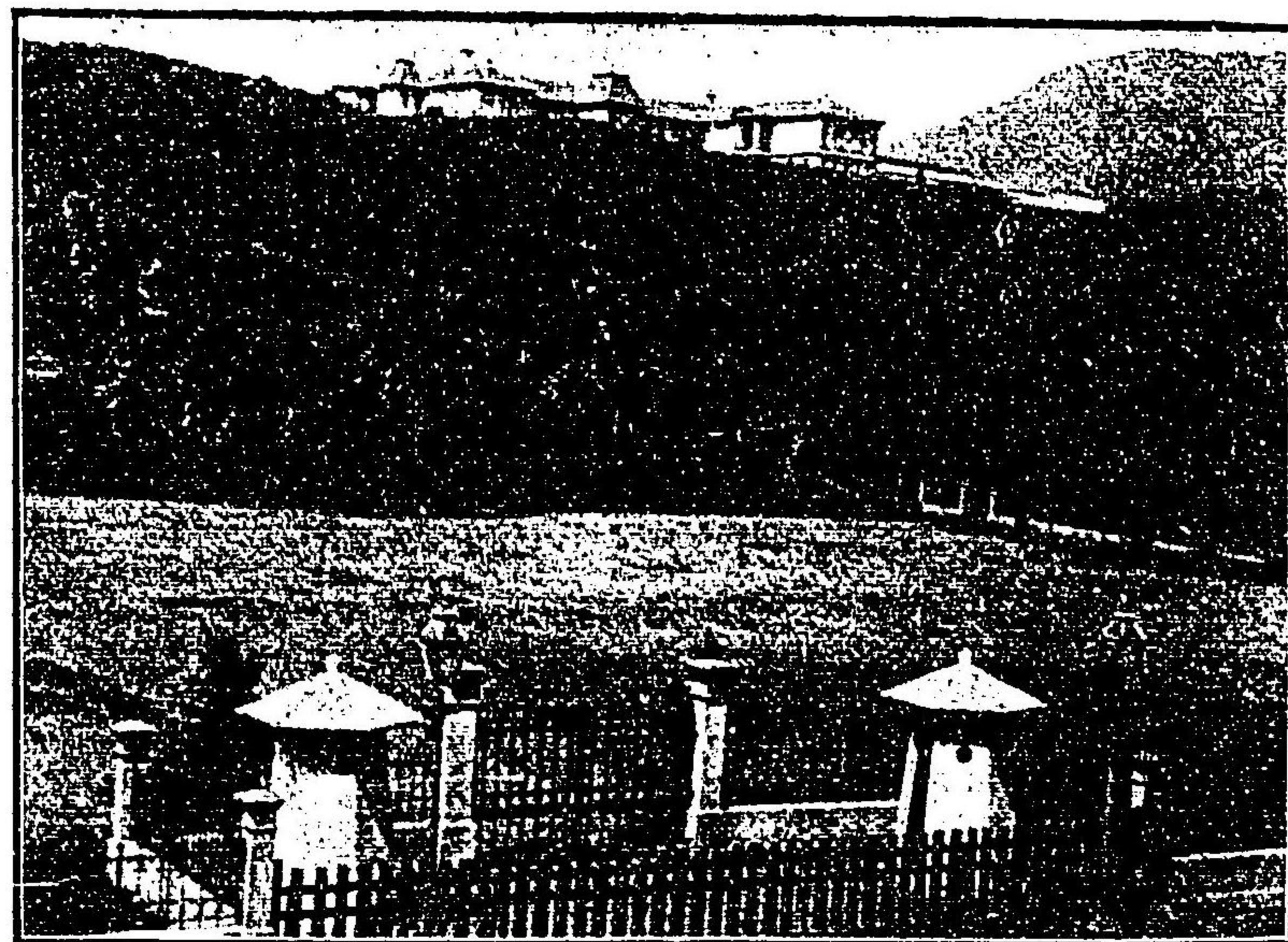
社 神 島 殿

小川一真真影刻銅版及印刷



THE YOMEI GATE, NIKKŌ.

日 光 燭 明 門



THE SUMMER PALACE, HAKONE. 箱根離宮



YENOSHIMA, SAGAMI. 相州江の島



Godardō, MATSUSHIMA.

松島五大堂



KYURIKWAN, ATAMI. 館氣喻海熱



A VIEW OF OKITSU. 津 興



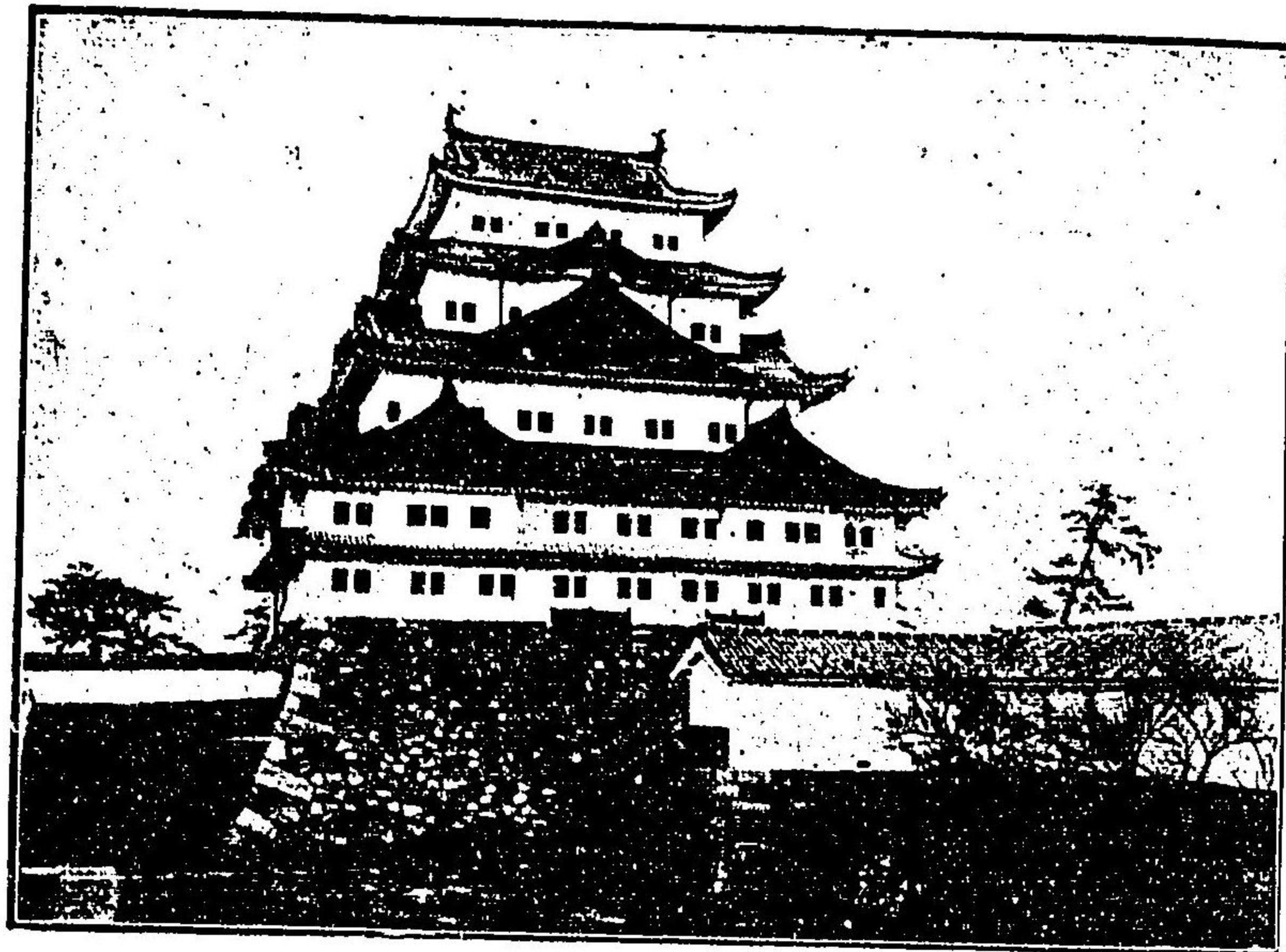
MINOBUSAN, KAI.

山延身州甲

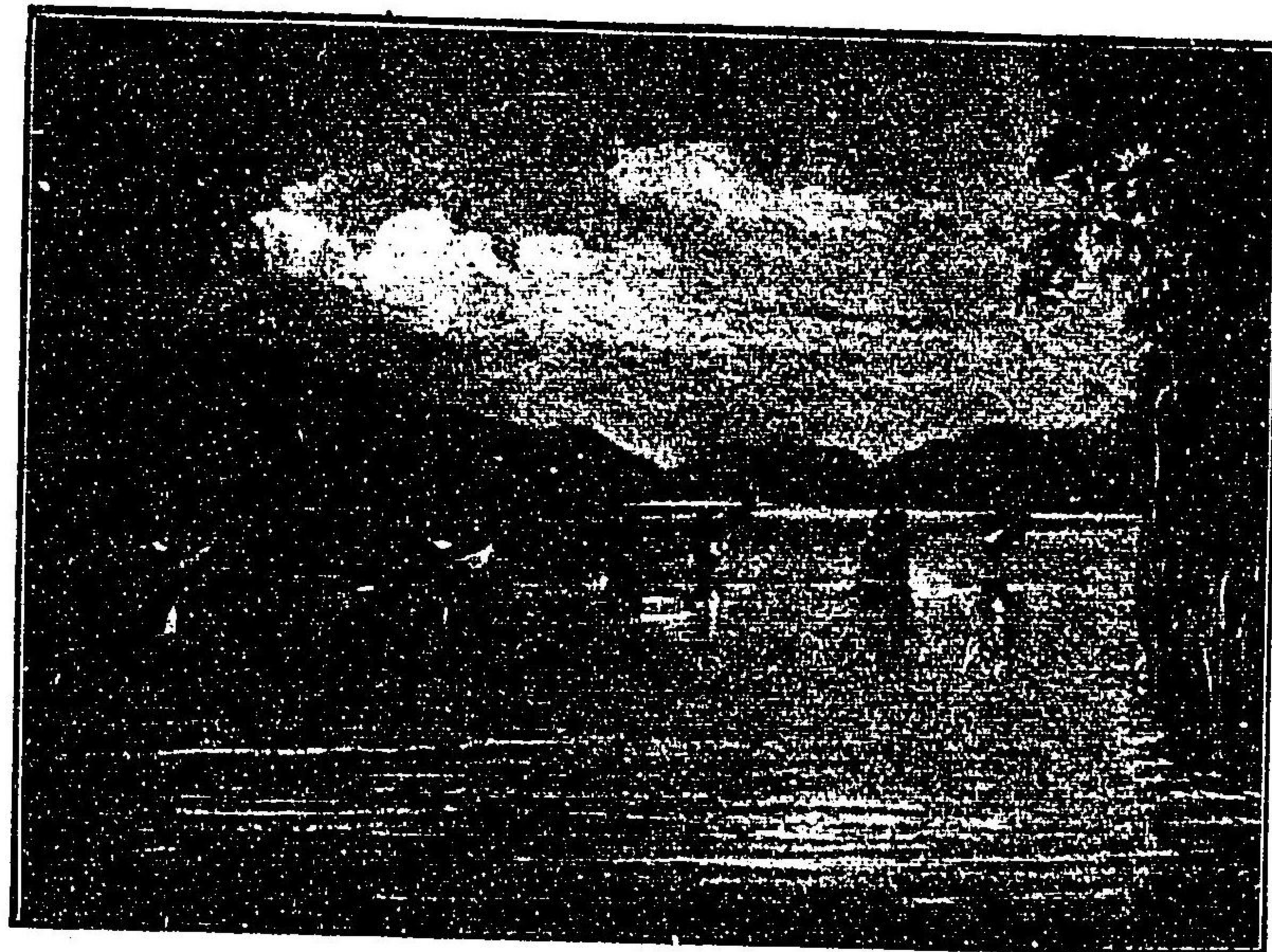


SHŌSENKYŌ, KAI.

橋仙昇嶽御州甲



THE NAGOYA CASTLE. 城屋古名

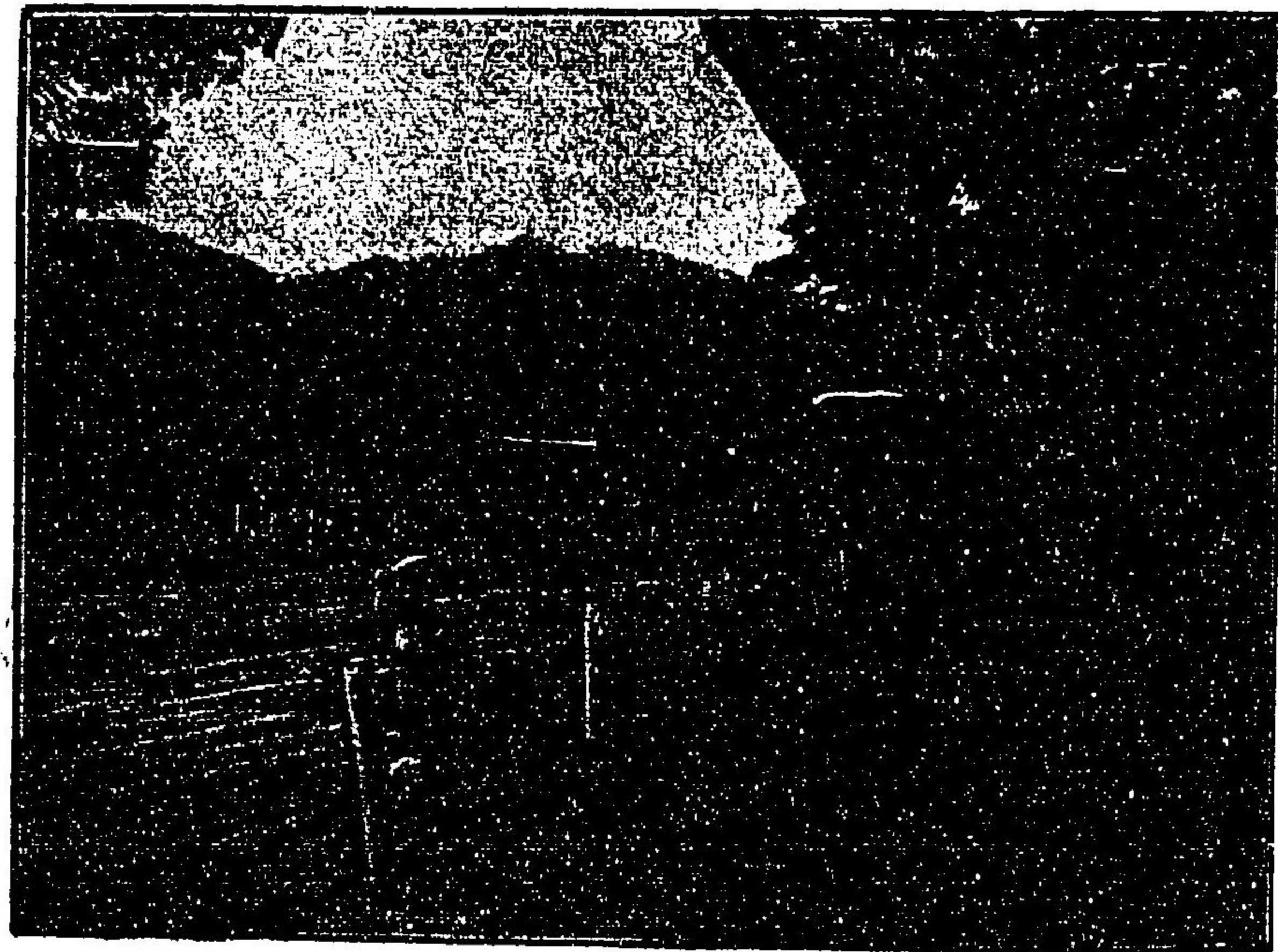


CORMORANT FISHING ON THE RIVER NAGARA. 飼鵜川柄長



ISHIYAMADERA, ŌMI.

寺山石州江



ARASHIYAMA, KYŌTO.

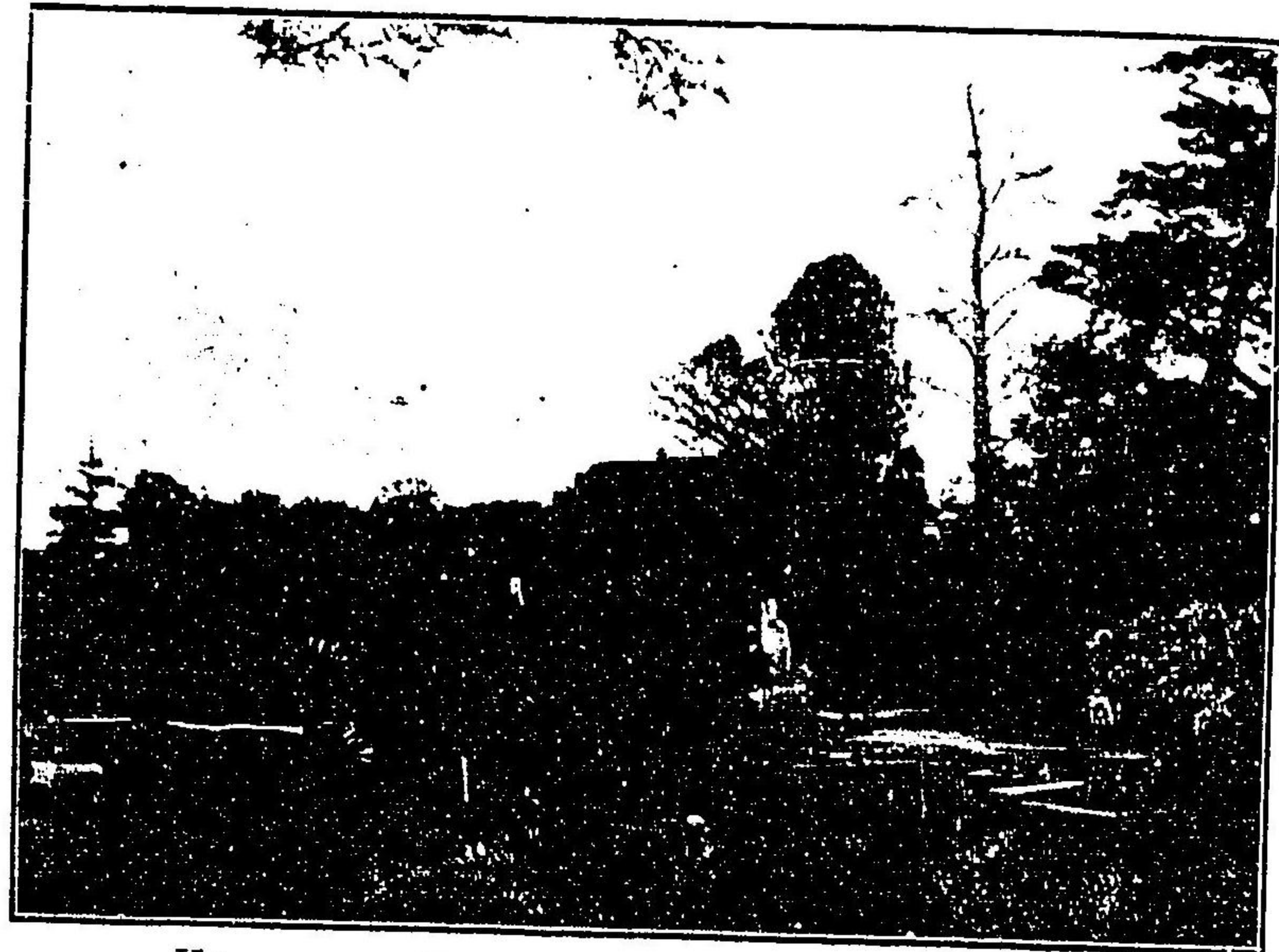
山嵐西洛



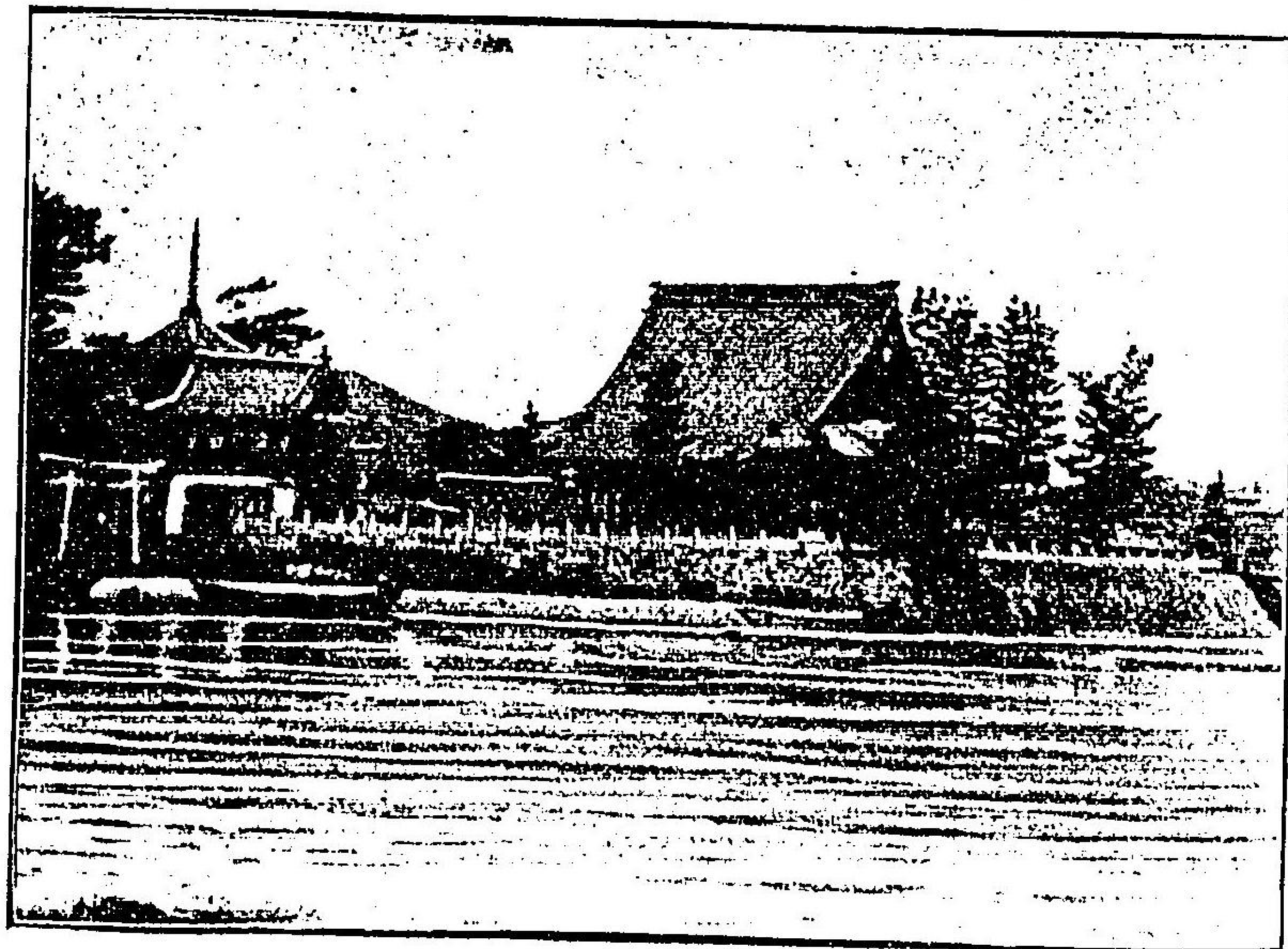
THE NUNOBIKI FALL, NEAR KOBE. 瀧の引布戸神



A VIEW OF MAIKO, HARIMA, 濱子舞



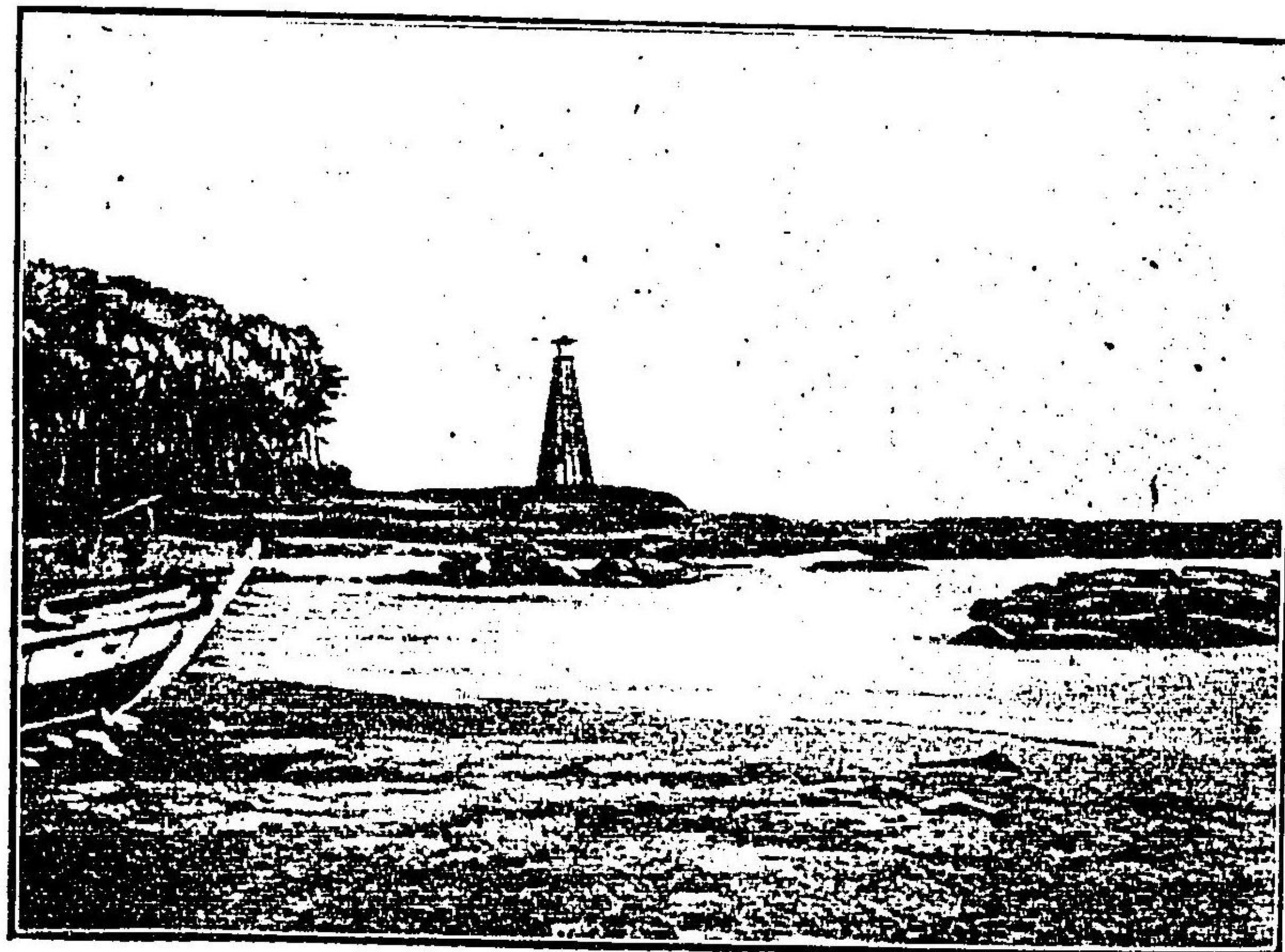
KōRAKUYEN, OKAYAMA. 岡山後樂園



SAIDAIJI, BIJEN. 備前西大寺



NOTATEISHI AT SHIOBARA, SHIMOZUKE. 石立野原鹽州野



OARAI, NEAR MITO. 岬洗大州常



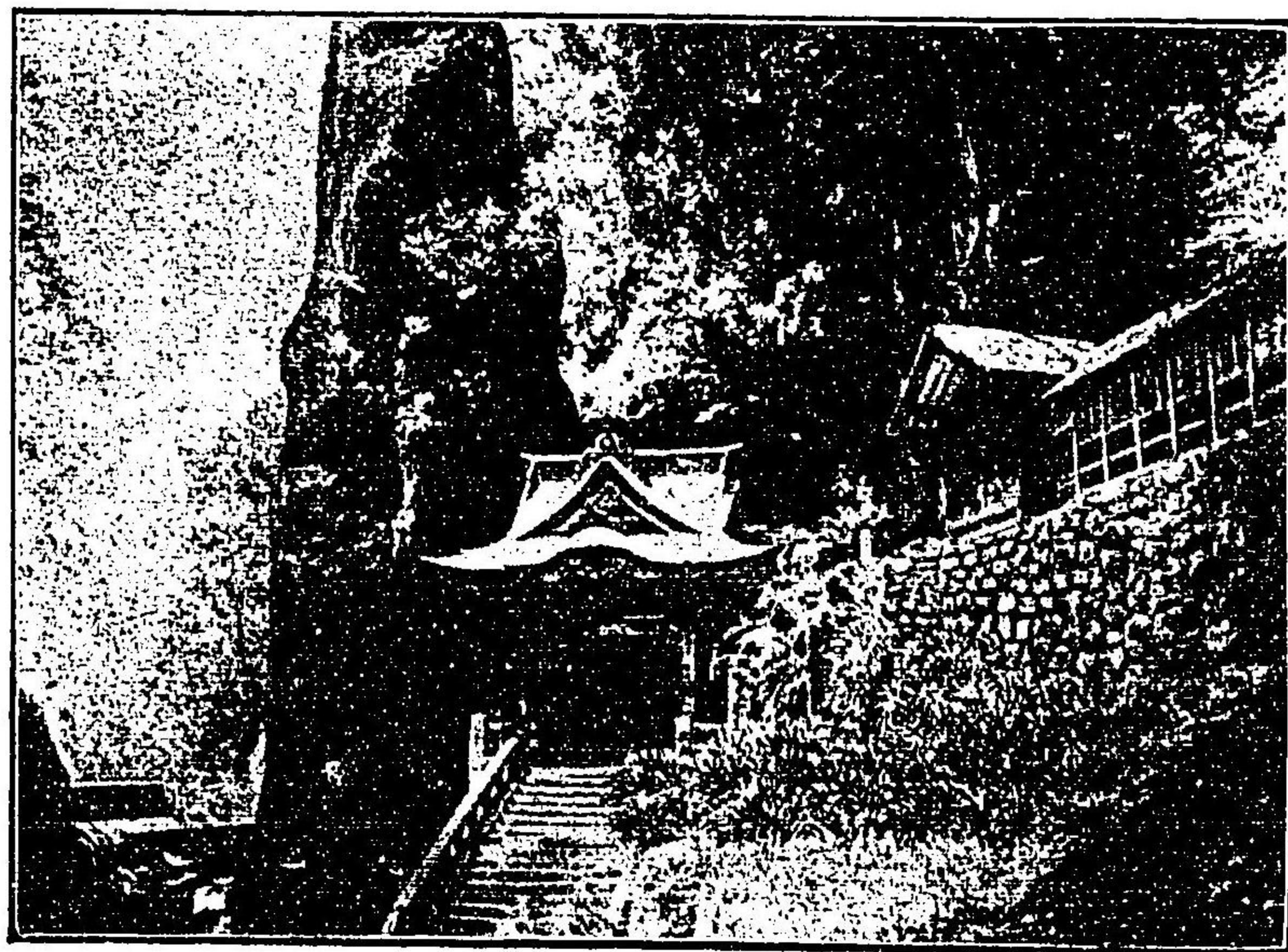
TOTSUNABASHI, IIZAKA, IWASHIRO. 橋網十泉温飯



THE LAKE NANKO, IWASHIRO. 湖 南



A VIEW OF IKAO, KŌTSUKE. 保香伊州上



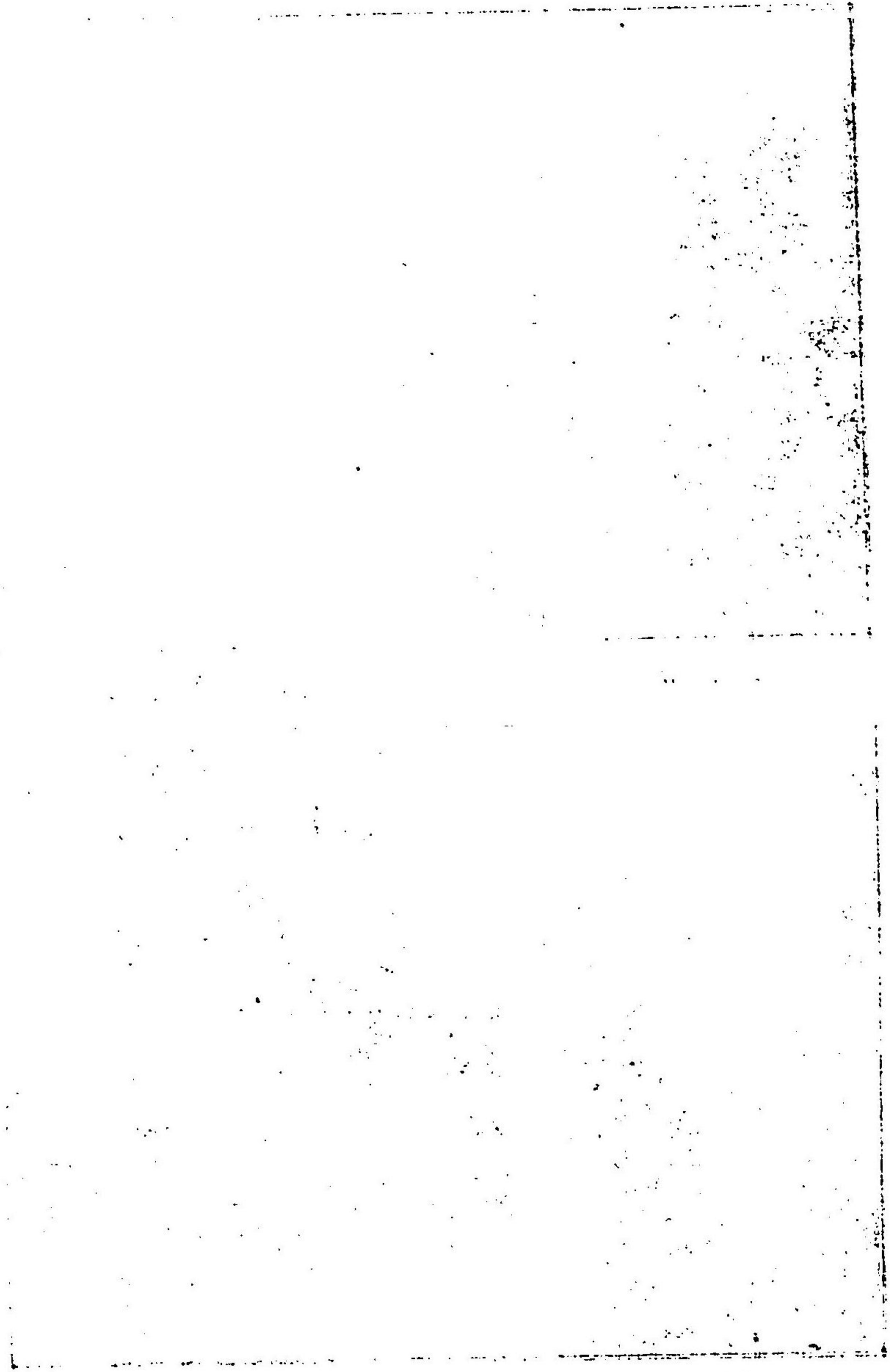
THE HARUNA TEMPLE, KŌTSUKE. 神明名榛

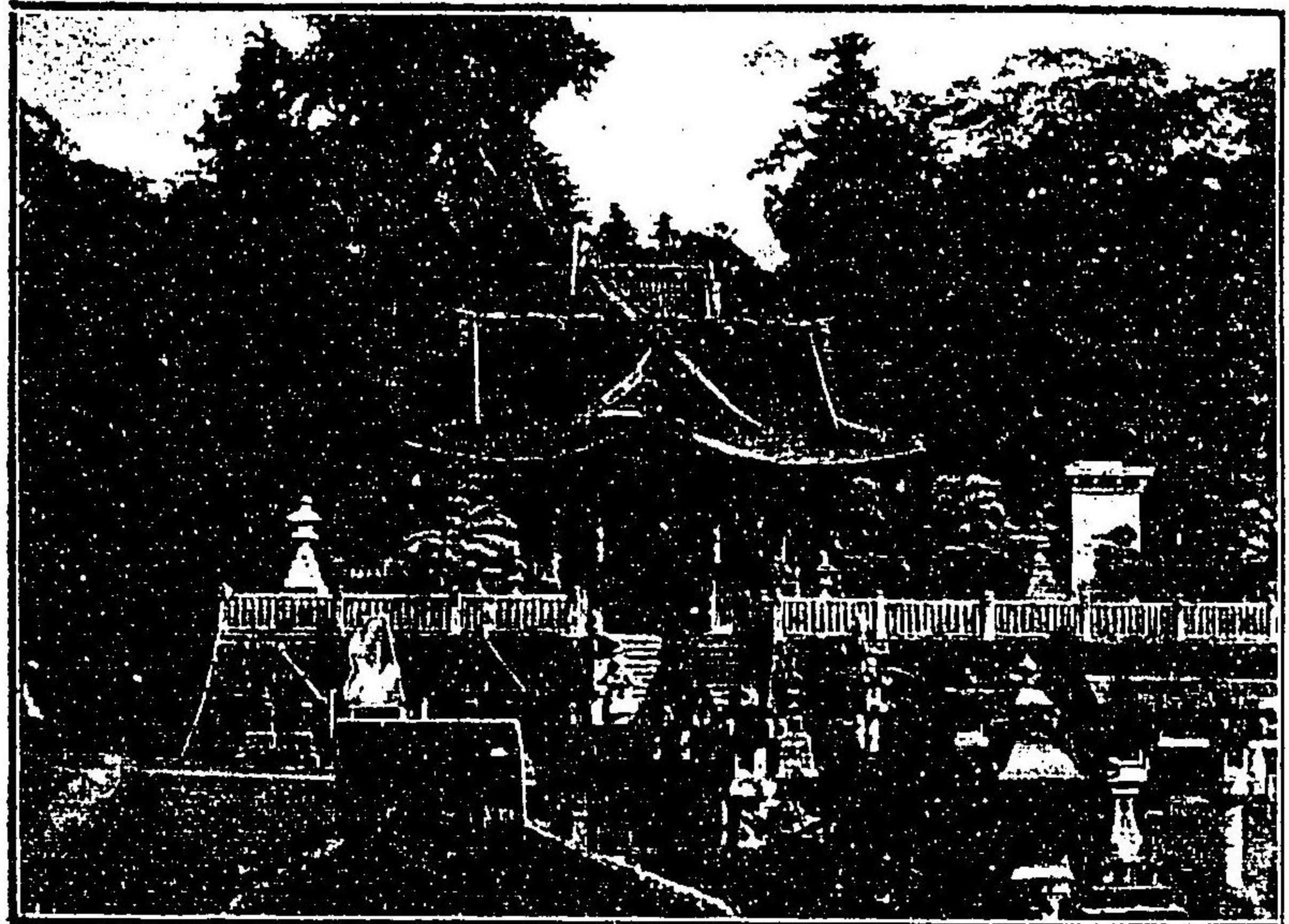


A VIEW OF MT. OBASUTE, SHINANO. 山捨媛州信



ZENKŌZI, SHINANO. 寺光善同

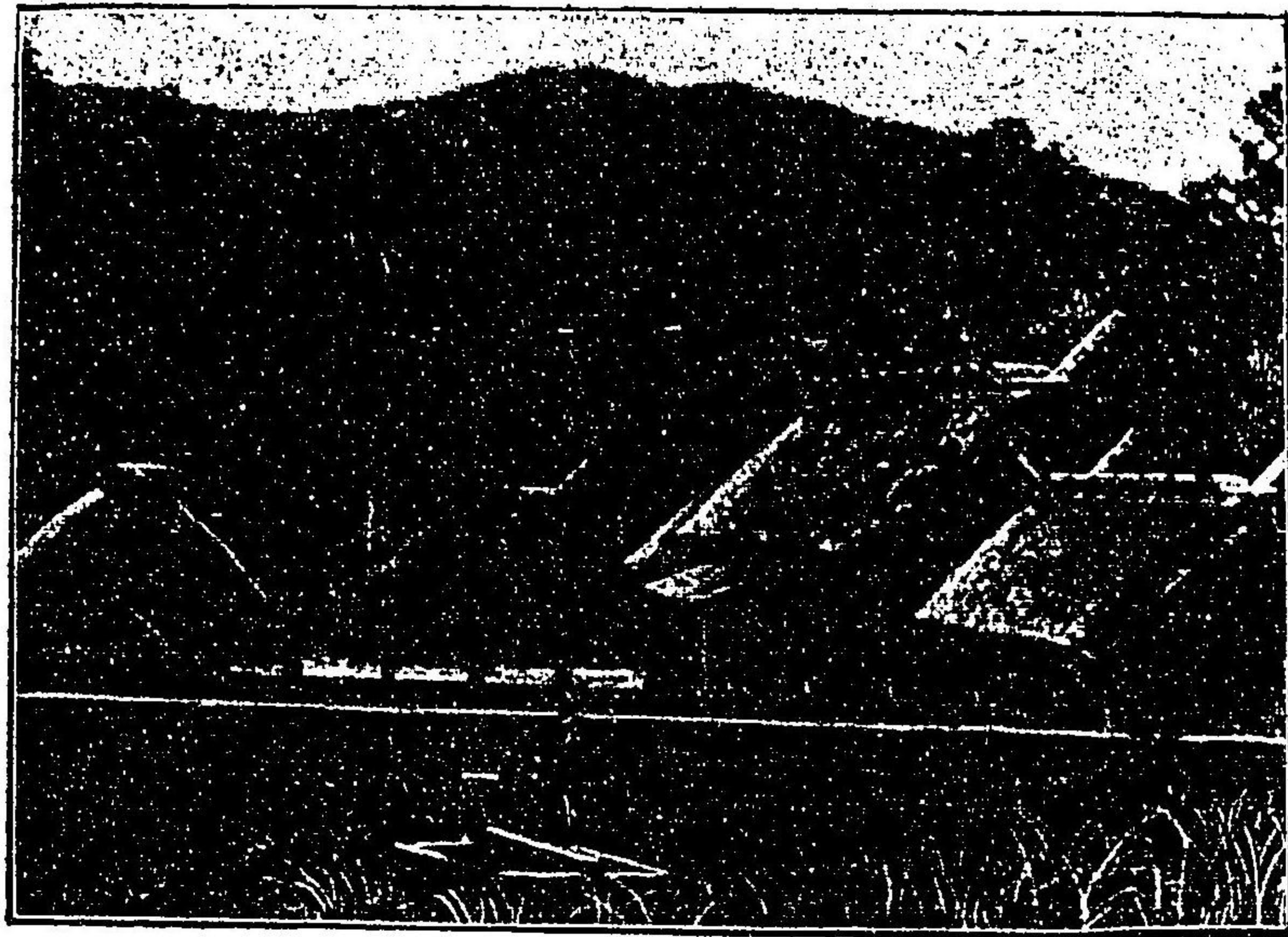




TEMPLE OF FUDO, NARITA, SHIMOOSA. 勸不田成總下



- TANJŌJI, KOMINATO, AWA. 寺生誕湊小州房



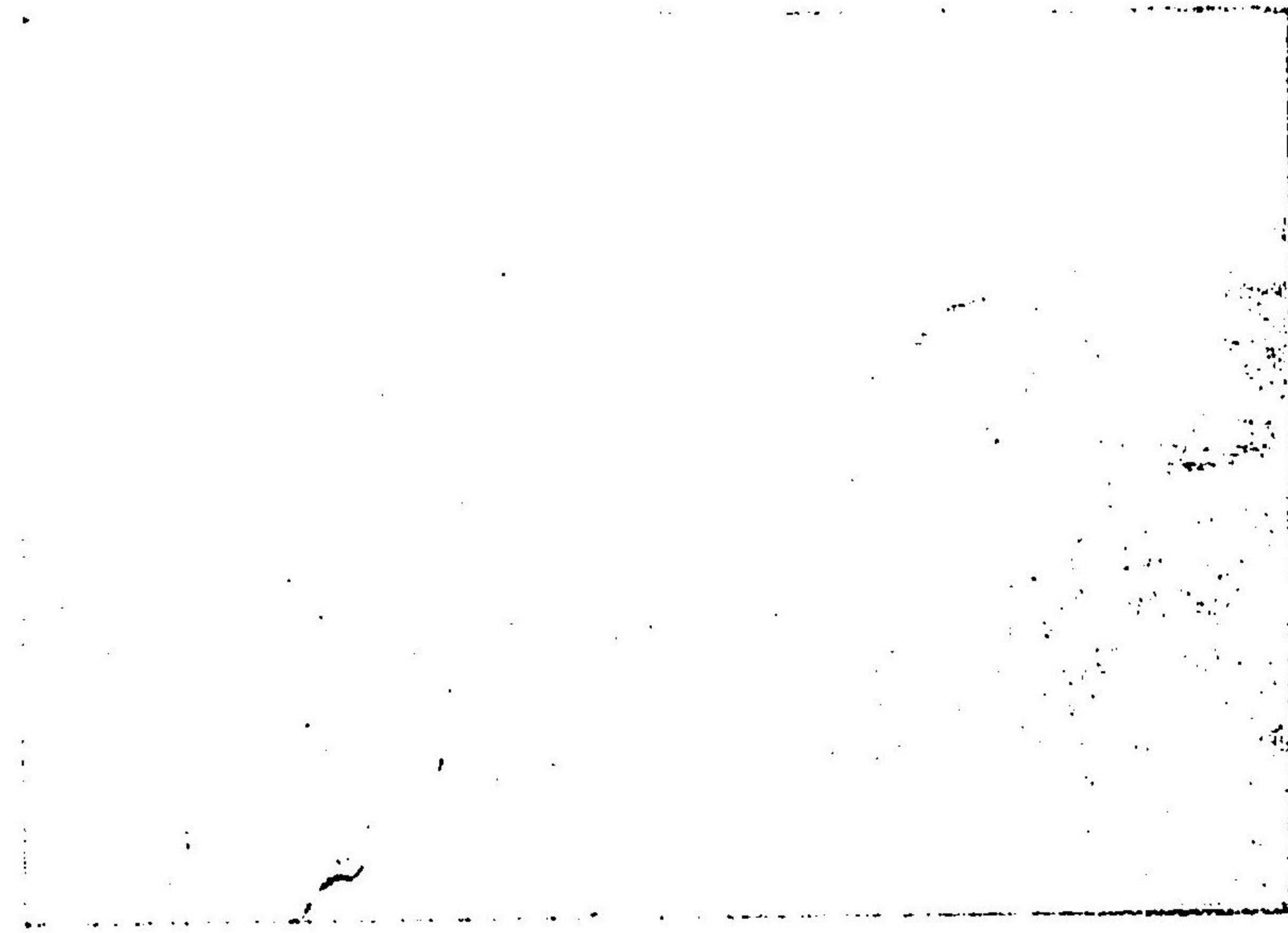
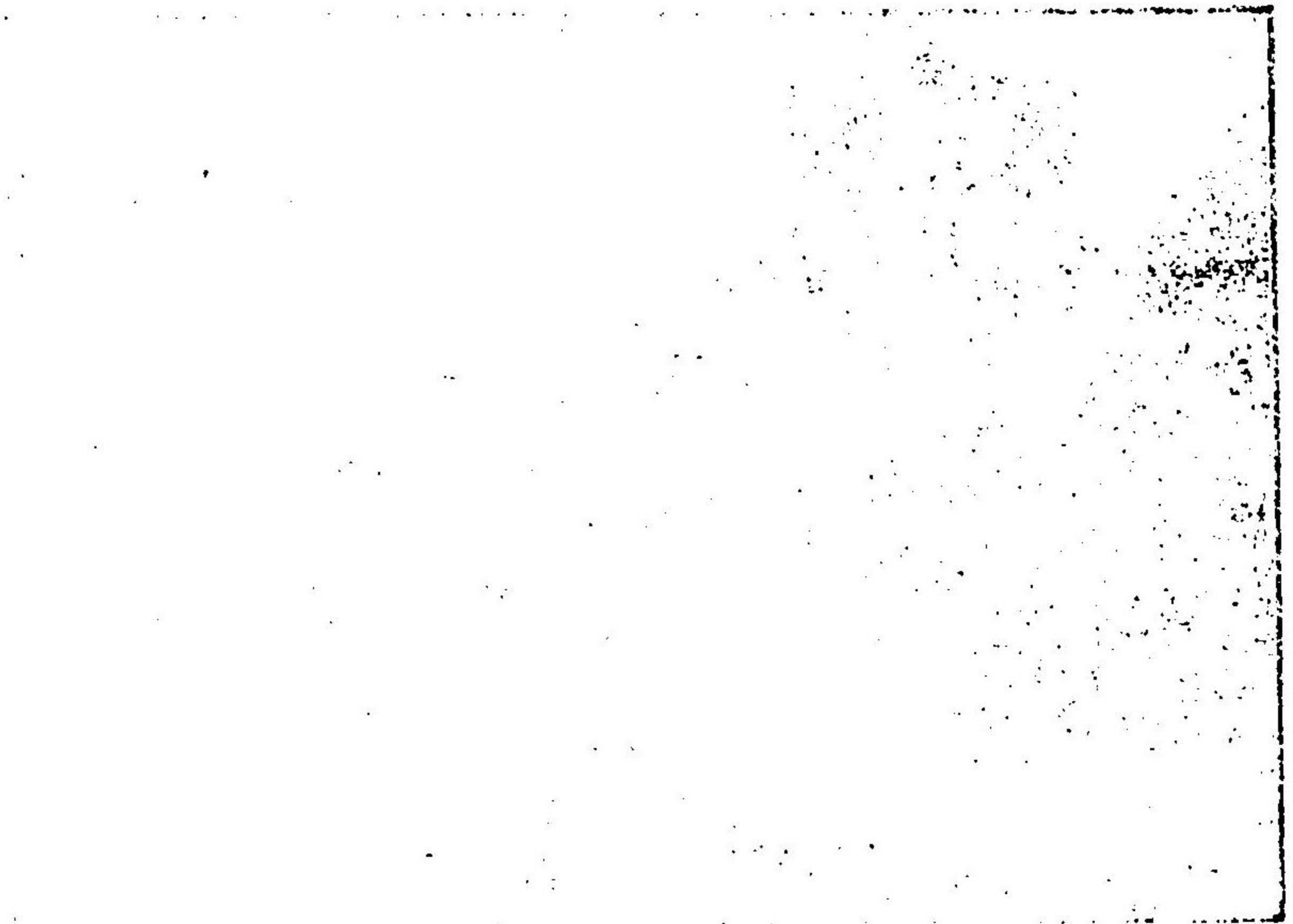
NAIGU, ISE.

宮内勢伊



FUTAMINOURA, ISE.

浦見二同



農商務省前分析課長 工學士 高峯 謙吉 衛生試驗證明
 東京愛生病院 工學士 長村 重治 衛生試驗證明
 農商務省技師 工學士 大久保 誠生 衛生試驗證明
 帝國大學教授 醫學博士 下村 勉 衛生試驗證明
 帝國醫科大學藥局試驗員 醫學士 古屋 恒次郎 衛生試驗證明
 帝國醫科大學藥局教授 醫學博士 佐藤 三吉 衛生試驗證明
 此の他各大家の賞状あるも略す



本品十分ノ一

花王石鹼は皮膚の増し且衛生上大に特効ある化粧品なれば貴婦紳士の浴室鏡窓に欠くべからざるの佳品なり

他各病院の御用を蒙り特に内外需用諸君の高評を博したるは偶然にあらず是れ全く良石鹼にして衛生上特効あるの所以也

●賣捌所は全國到處に有り最寄にて御求を乞ふ

効能

●色白く美麗はたさなり
 ●にきび●そばかす●はたけ●あせは●たむし●ひ●しもやけ●はたのあれ

●總て皮膚病に妙なり

定價 壹圓 金拾貳錢
 桐箱 參個 入卅五錢



注意

本品は内外需要諸君の信用を得日に月に販路の隆盛なるが故近來奸商等付御愛顧諸君は御注意を乞ふ

注意

品を類似の効能を附し一時の私利を得んと欲する者續々有之に

製造發賣本舗

東京馬喰町三丁目
 電話九百二十二番

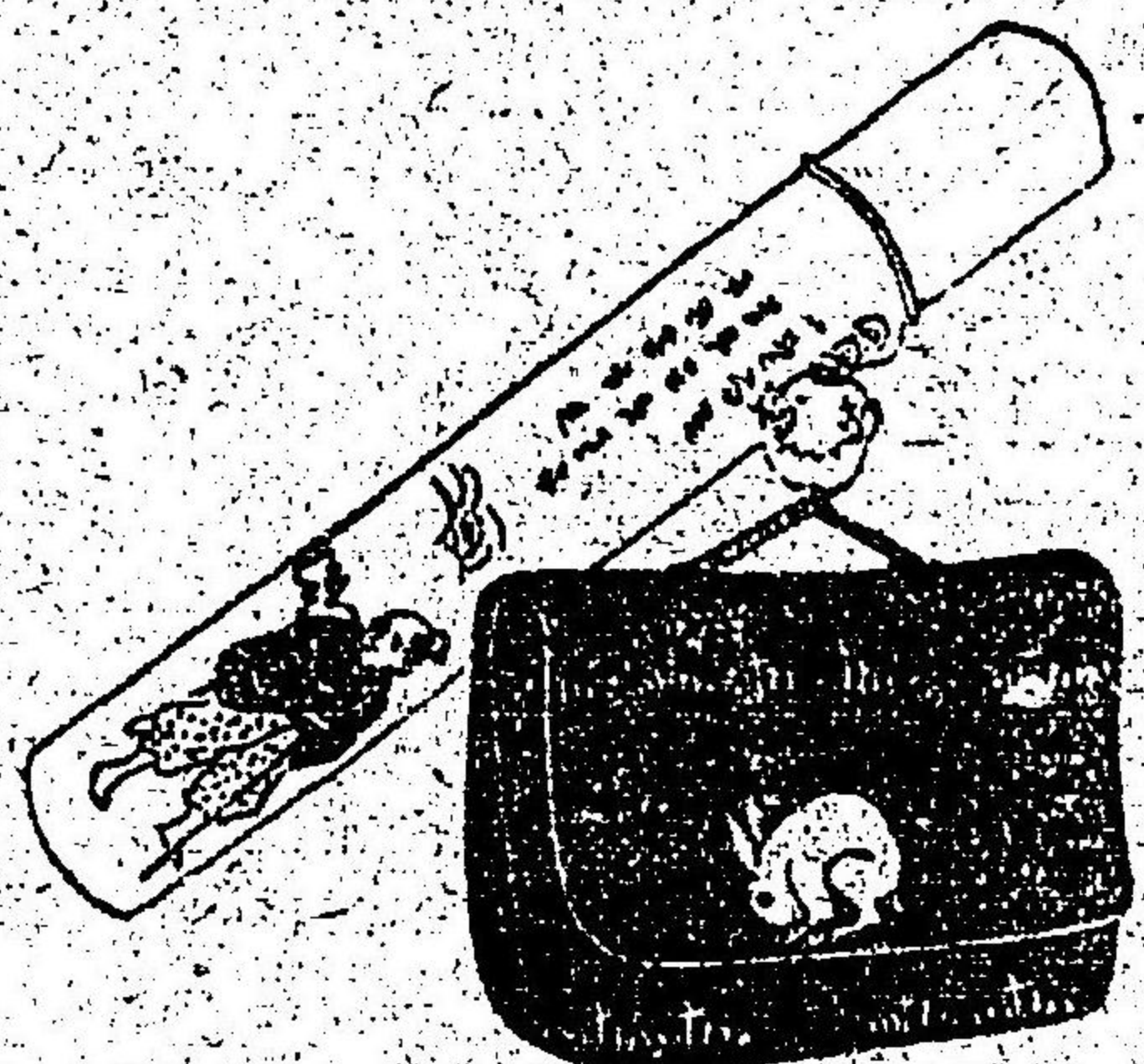
長瀬富郎

敬白

◆(許特賣專)◆



(製銀洋) 迄圓貳拾拾圓壹金
(製銀眞) 迄錢拾八圓壹拾錢五拾九金●



●壹組(煙草入、前金具、煙管、煙管筒、緒)

其他御好
に應じて
御製仕候
尙ほ時計
附屬品、
指輪、婚
人帶留、
巻簾入、
貨幣入、
御名刺
入、信玄
袋等は一
層吟味調
進仕候府
下は御一
報被下候
は、持參
仕候

袋物及香水吹
貴金屬裝飾品

東京京橋區南傳馬町三丁目十六番地

丸屋商店 金子直吉

三

用御省内宮、

ルービスビール

惠比壽ビール

ルービスビール

惠比壽ビール

京 東

村 黒 目 郡 原 荏

造釀社會式株酒麥本日

二

東海偉觀 佐野瀑園案内

四

佐野瀑園は佐野停車場を距る十二町(注意腕車賃八錢)東京より佐野瀑園の幽邃にの地た有栖川兩宮殿下(御漫遊の筋山水の秀麗と亭樹の清涼を御賞美あらせられは)の地た有栖川兩宮殿下(眞是偉觀)(樂意在泉石)の二額を御下賜ありしを以ても知るを得 **佐野瀑園**は遊賞避暑に適せる耳ならず脚氣腸病の神地療養地として **佐野瀑園**五龍館の各室と器具との清潔なるは他に比類無し特に浴室の善良なるは風に定評を蒙れり然るを今般更に洋風浴室を増し來客諸君の便宜を圖れり浴室内噴水の如きは上下左右より噴出し水浴は特 **佐野瀑園**は周圍の山林二千町歩を以て遊獵地とし雄兎山鳥等群を **佐野瀑園**に妙なり **佐野瀑園**成し遊客の捕獲に供す園外八景あり吟賞行樂興亦深し **佐野瀑園**の和洋料理は新鮮と低廉とを旨とし加ふるに百事周到を主とす

西洋食住		日本食住	
一金貳圓五十錢以上	通常旅客一名一泊	並等	一金四十錢以上
但貳圓以上一割引	(三食)	中等	一金七十五錢以上
一金三十五錢以上	朝 食	上等	一金壹圓五十錢
カヘー、パン、附	晚 食	並等	一金貳十錢
金七十五錢以上	室料ノミ申受ク	中等	一金三十錢
金七十五錢以上	ル場合	上等	一金五十錢
金壹圓以上			

駿河國富士廻麓 **サノホテル** **五龍館主敬白**
佐野瀑園

◎足利は織物の産地にして戸數三千六百人口一萬七千ありて名所旅蹟多し

◎**足利旅舎** 本店 足利町二丁目 遷喬館 **初谷多十郎**

◎支店には諸新聞雑誌所及廣告掲示場あり御利用せらるべし

◎近頃車夫に金を與へ客を透引する惡弊あり御注意被成下へし

◎**商友舎**は我國に於る汽車廣告之元祖にして又日光山電柱利用廣告之先者なり

◎**兩毛鐵道客車内** 一手取扱所

◎**日光山電柱廣告** 商友舎は下野國足利町停車場前にあり御報次第細則を呈す

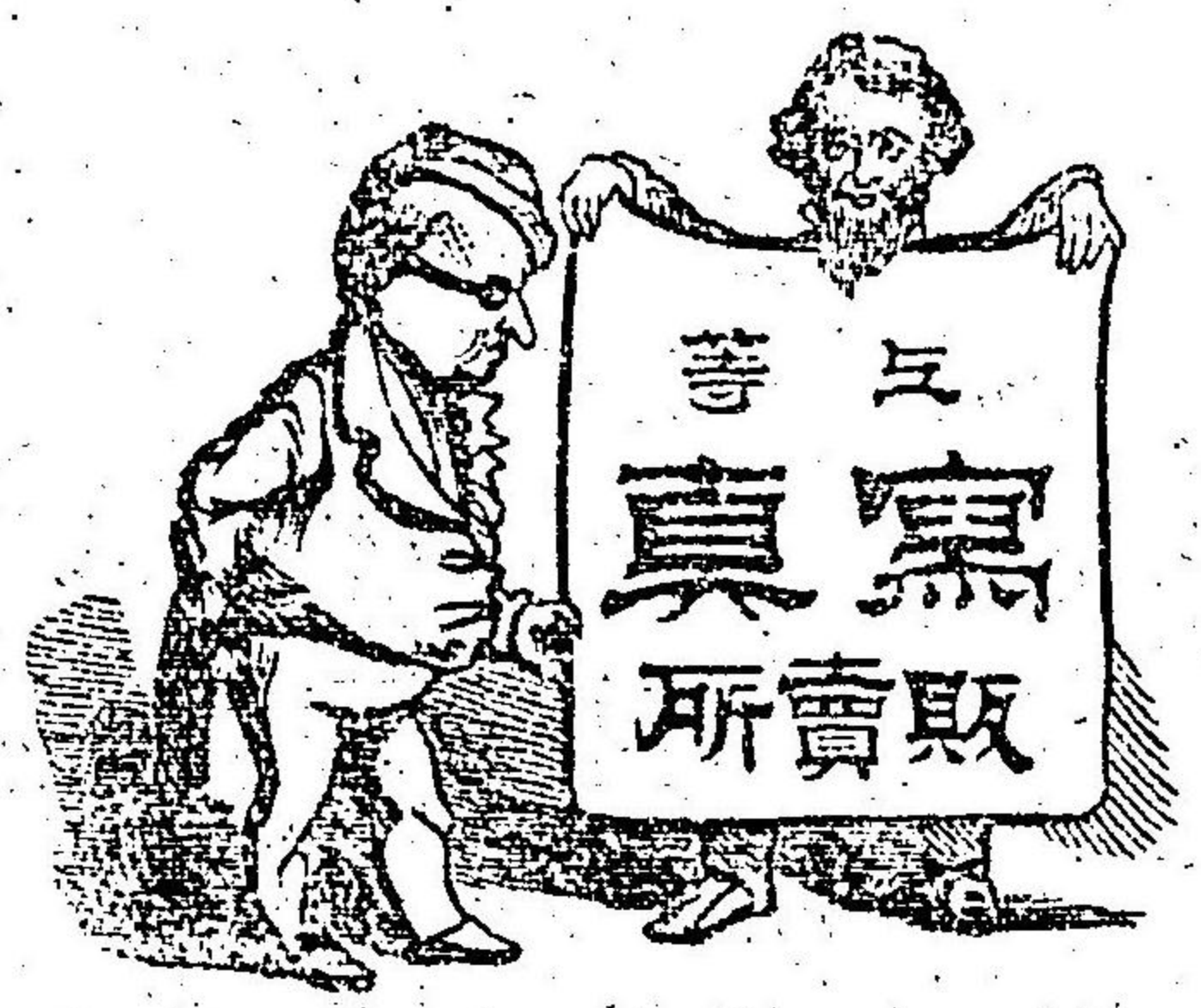


這回野崎君の著なる漫遊案内なる美本發行するに付博文館より廣告せよとの進めに聊か感ずる所あり **我製藥壯眼水** の世人に知らせを爲し利益を普くせんと告げ申す **岩浪** 告 **めぐすり**

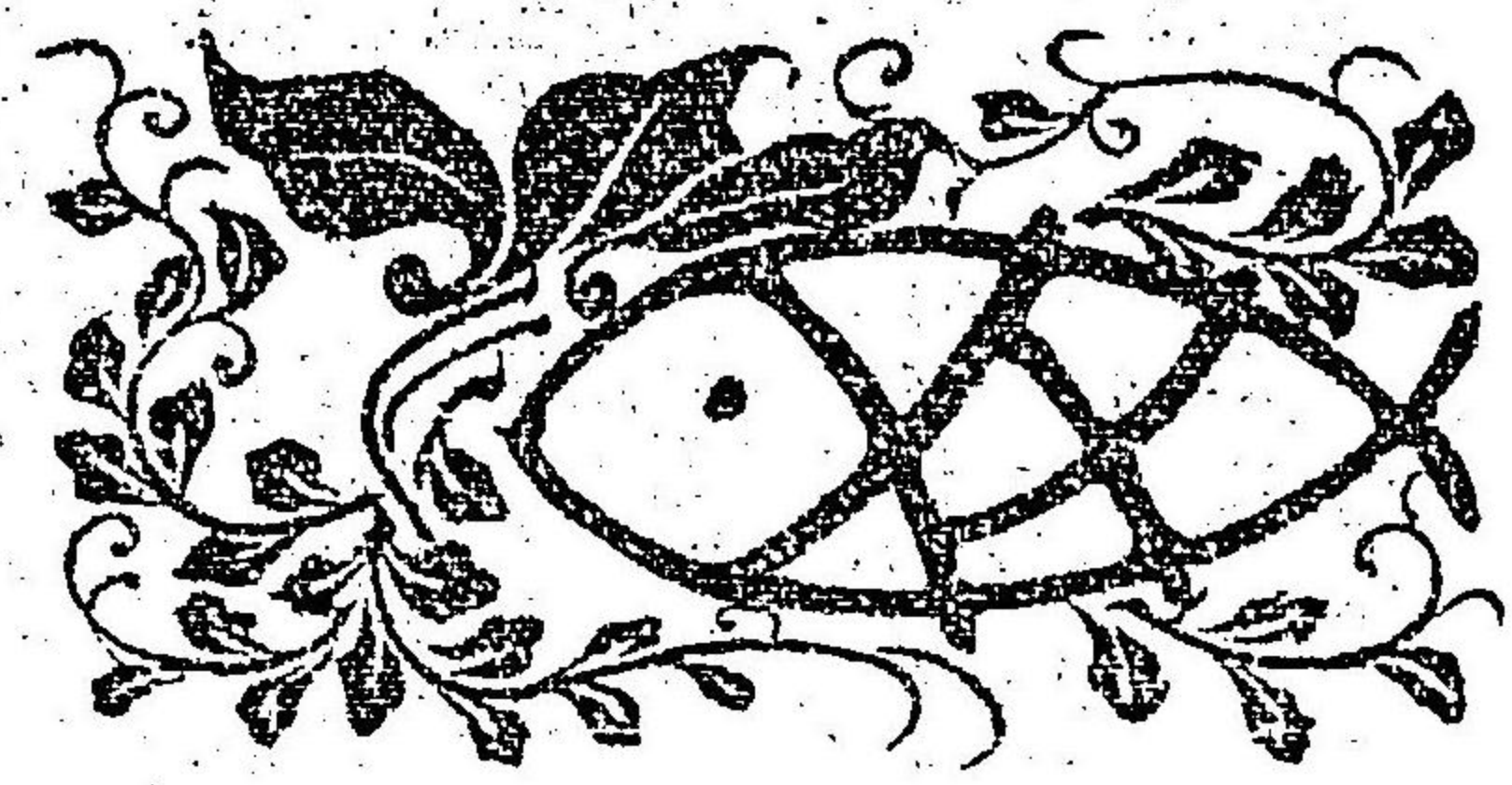
五

名東 名曰 名各
所京 所本 所國

貴紳軍壯俳各新藝娼景其各 | 貴紳軍壯俳各新藝娼景其各
顯人士士優座言技技色他種 | 顯人士士優座言技技色他種
映并器幻 | 映并器幻
品盡に械燈 | 品盡に械燈



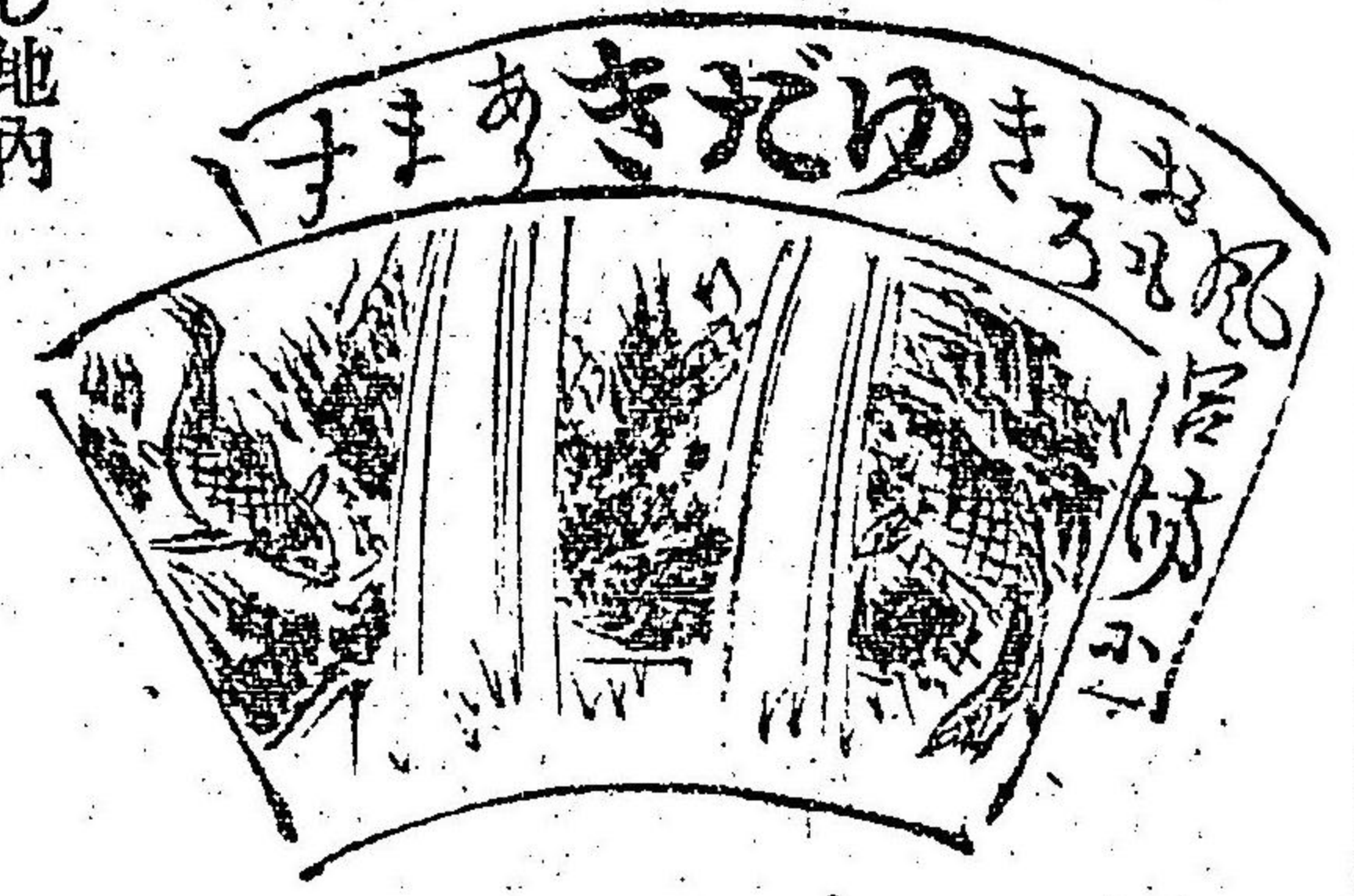
東京大馬場二丁目四百四番地
藤木寫真店
電話七百八十四番



御料理

- 御婚禮
 - 御筵會
 - 御法會
 - 御料理切手
- 右御注文之節は精々勉強仕奉調進候以上

日本橋かやば町やくし地内



電話千貳百六拾三番

草津亭

廣告

○蘆之湯溫泉客舎松坂樓

弊樓當溫泉開設以來數百年來營業繁盛ニ趣キ候ハ單純硫黃泉ノ著名ナル効能ト御來浴諸君ノ御愛顧トニヨリ候ニ付深ク奉鳴謝候隨テ今來ノ客室ニテハ手挾ニ付更ニ營業擴張ノ爲メ隣家吉田屋ヲ買受ケ今ヤ高樓ノ數棟百有餘ヲ加ヘ誠實勉強ヲ旨トシ精々廉價ヲ以テ和洋料理而ノ爾來一層改良ヲ加ヘ誠實勉強ヲ旨トシ精々廉價ヲ以テ和洋料理調進仕候間何卒倍舊ノ御愛顧御來浴ノ程伏而奉懇願候

支店ハ箱根蘆湖沿岸ニ在リ位置ハ開閉空氣清爽ニシテ就中富嶽湖水ノ眺望ハ函嶺中第一ノ佳景ニ御座候且本店全樣勉強致シ和洋料理調進仕候間何卒御眷愛ヲ蒙リ度伏而奉希望候

相州足柄下郡 松坂樓 萬右衛門 白

○箱根湖岸旅亭松坂樓支店

流行病 豫防に 是に 限る

高評を博したる夏向は必用のやまどかほり

●香氣麝香液 大瓶金廿錢 御注文は遞送料は一個に付 小瓶金拾錢 二錢を増し御注文を乞ふ

取次所は全國到處有名の藥舖賣藥店及び和洋小間物店に販賣所あり又近頃類似の品も有之に付本原長生堂製と御尋の上御最寄にて御買求めを乞ふ ●取次御望の諸君は本舖へ御照會を乞ふ

麝香液製造本舖 東京日本橋區濱町一丁目四番地賣藥店 本原長生堂

御料理 喜多川

しんばし 喜多川の三層樓

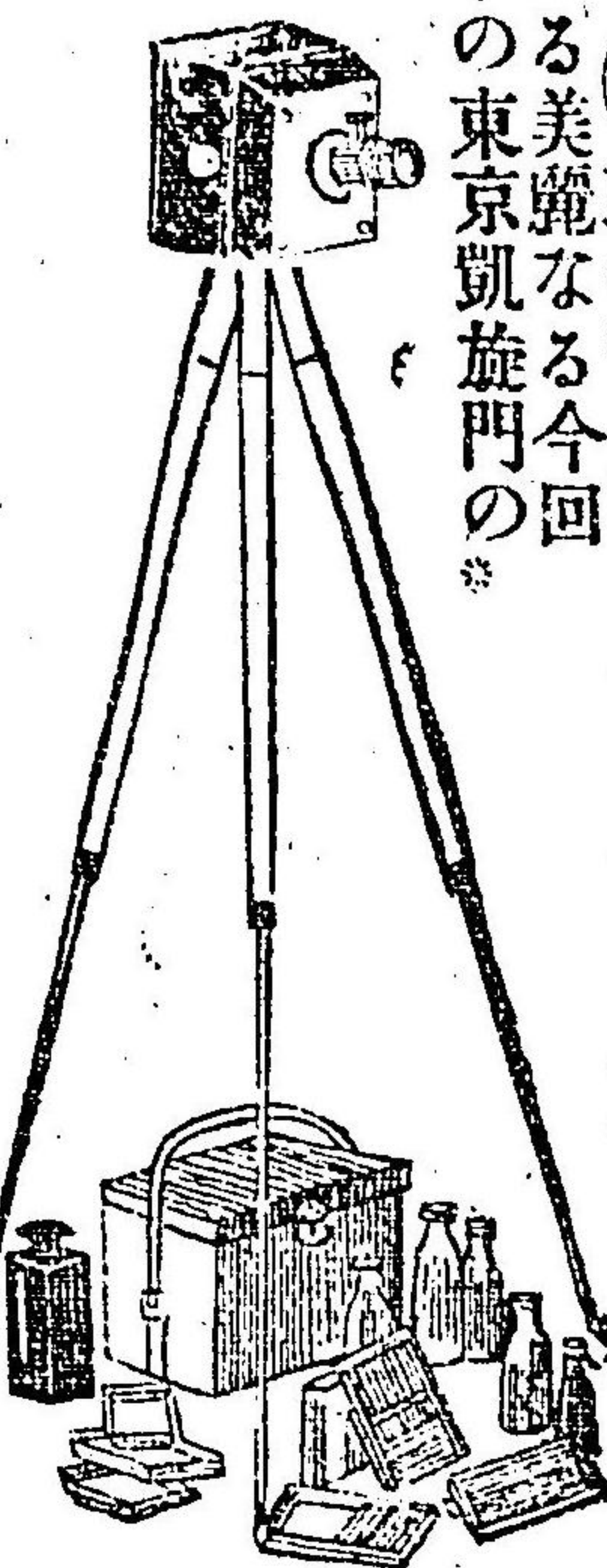
眺望佳絶：日比谷霞か關より愛宕山に對して雲間幽かに富岳を仰ぎ更に一眸を轉ずれば房總の墨黛を望み近く品海の白帆東の長蛇は黒烟を吐て西するの活景を眺めて美味に一酌を試み給は、眞に仙境に遊ぶの趣さあらん

電話 四三五番

北川 は京橋區新橋の出雲町にあり
北川 の料理は渾て衛生に注意專なり
北川 は殊に鰻料理を以て都下に有名なり
北川 の三層樓は眺望佳絶都下の別仙境也
北川 は御多數御集會の廣き宴會席あり

東京に 名高き 新橋北川の らあき 御料理

●早輕便寫真器械
 美觀なる今回
 の東京凱旋門の



●定價表御
 入用の御方
 は郵券四錢
 送付

●

●寫真製造の器械にて撮影した
 *弊店製造の器械にて撮影した
 ●弊店製造の器械にて撮影した
 ●弊店製造の器械にて撮影した

有益無比の精良器械なり。此器械は多くの熟練を要することなく素人方
 容易く撮影し得るものにして、花弁、草木、禽走獸を撮影し、他のあらゆる
 山河の美、古跡の勝を寫し、或は歴史上の参考となりて、自ら渉獵せし實
 の筆紙に及ばざるを寫し、或は美術工藝器械建築其地天地間にありし形
 にあつては、實物教育の資となり、或は藝術上の参考となりて、自ら渉獵せし實
 地を永遠に如何なるものと驚く可き程簡便なる方法によりて瞬間に描出
 の物躰は如何なるものと驚く可き程簡便なる方法によりて瞬間に描出
 せらるゝは實に此器械の特處にして、寧ろ撮影者其人の技術に非ずと云ふも
 敢て誣言ならざるべし。江湖之雅賢、壹器を購ひて、實地に試み給らんとす
 ○本器には圖解挿入の詳細なる撮影法説明書あり

●貴顯紳方の組寫真協會々員 ●東京橋區新富町
 ●織せられたる寫真品評會々員 ●三丁目七番地 内藤政愛店商

饜 空
 グスマネ

品質純良芳香美粉なり

海陸 連勝
 金 鷄

意匠斬新經濟便利品



(●賣捌所は全國到る所藥店、小間物店にあり)

東京日本橋區馬喰町一丁目

小町水本店

平尾贊平

廣告

東海道大磯町

兼海水浴御旅館
御料理

招仙閣

弊閣ハ停車場ニ咫尺ニシテ汽車ニハ庭前ヨ
リ御乗下相成リ而シテ閣ハ青山ヲ負ヒ滄海
ニ臨ミ眺望東南ニ開ク四時ノ景致能ク御旅
況ヲ慰メ且又御入浴ニ海水淡水ノ兩湯ヲ備
ヘ御食餌衾褥等ハ滋養ト衛生ヲ主トシ諸事
御懇切ニ御賄ヒ仕候間勝境名區御遊覽御往
復ノ際何卒御來訪ノ程偏ニ奉願上候以上

鷹印コンデンスミルク廣告

帝國醫科大學
陸軍省 海軍省
御用品



帝國大學其他諸博士證明書附キ

發賣元

東京日本橋區本町二丁目一番地

積茂商會

特約販賣

東京本町三丁目十八番地
松本市左衛門
櫻川町

梶原吉左衛門
御最寄ニテ御購求ナク

京大博覽會賞牌受領

宮中御用 內務省 農商務省 衛生局 醫學博士 余氏 優等 尾上 菊五郎 數氏 有効 證明 衛生局 衛生局 衛生局

●迷ふなかれ 花王水及び天賞散は宮内省御用を辱し京都大博覽會有効賞牌を受けたのは全く元料のよろしきと効顯のたしかなる證據であります故に色を白く好む人は散に限りませ彼奸商輩の粗悪品は衛生に害が有り升から農商務省登錄商標「花王水」「天賞散」加藤商會の名義に御注意御購求願上候……

花王水

色を白くし 改

質 良

●花王水は男女色を白くし、さめをこまかにし、にきび、そばかす、あせも、白粉やけ、日にやけ、を治しふきで物の患なく夏はあせもので防ぎ冬はひやしもやけをの良劑也

天賞散

高等 齒磨 良 改

●天賞散は日本藥局法高等藥品製の優等齒磨なり……

定價六錢四錢二錢 特製廿錢十五錢 遠國へノ一本賣ハ 五十錢以上送料十 錢郵便爲替ハ本局 局振込郵便切手代 取次ハ全國到處藥 店小間物店ニアリ

發賣元 東京本郷 森川町一丁目 加藤商會

診察時間

小生義從軍中之處今般無事歸朝致候ニ付從前之通專ラ診察治療ニ從事可致候此段謹告ス

外來診察

午前七時ヨリ九時迄
午後二時ヨリ四時迄
但シ日曜日ハ午前宅診、午後往診

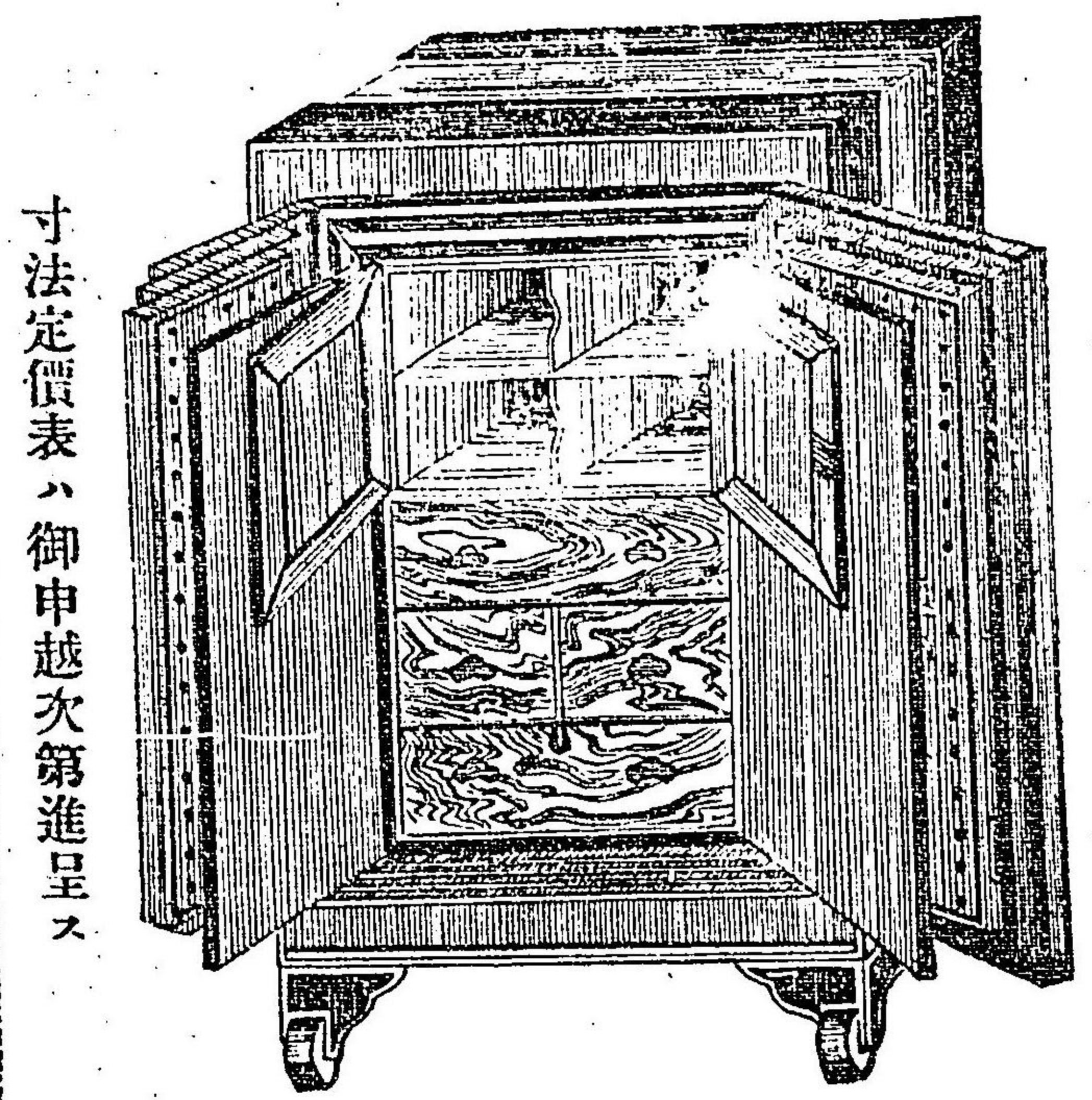
往診 午後五時ヨリ

市外往診ハ其前日迄ニ御申込ヲ乞フ

東京市日本橋區本石町二丁目

醫學士 田村光顯

明治廿八年 八月



寸法定價表ハ御申越次第進呈ス

（番二卅百八話電）目丁四町本京東
吉彌原萩店本庫金倉大
 目丁二町馬傳大京東
店支同

伊豆温泉案内廣告

謹啓御花客様益々御清健御平安被爲御坐遊奉欣賀候隨テ弊屋義無事以御蔭
 日ニ増繁榮ニ趣候段誠ニ以テ難有仕合ニ奉存候今ヤ日清平和ニ際シ聊カ御
 厚恩ニ酬ン爲メ浴室ノ清潔ハ勿論萬事御不都合無之様極々安直御叮嚀ニ御
 取扱可申上候間不相變陸續御來浴ノ程伏テ奉希上候
 追啓京濱ヲ發スル御方様ハ東京一番列車ニテ午前十一時ニ沼津ニ着可致
 候夫レヨリ人車又ハ馬車ニテ當地ニ御來車ニ候得ハ其日午後三時ニハ
 遅クモ御安着ノ事ト奉存候
 壹周間御一人前御賄料金壹圓七拾五錢ヨリ金貳圓マデ
 金貳圓ヨリ三圓マテ其他ハ隨意ニ御取扱可申上候
 沼津ヨリ當地マテ人力車一輛代金五拾錢○馬車同金二拾五錢
 尚々近來車夫馬丁等途中ニ於テ彼是御勸メ申候モ決シテ御信用無之萬一
 御差支等ノ節ハ他ニ御案内御不都合無之様御取扱可申上候也
 伊豆修善寺浴泉旅館（内湯）

明治廿八年八月五日 對 碧樓 淺羽保右衛門 敬白

東京 花王白粉
 本舖 東京橫山町二丁目
 脇田盛眞堂
 全上町小間物店賣店有

本舖 東京橫山町二丁目
脇田盛眞堂
 十七

銘越のふみざり

抑も菓子品の品位を定むるには第一味の好き第二消化易き第三成るべく滋養
 分多き第四見へ麗しき第五腐敗し易からざる以上五項に着意するを要す然
 るに越のみ五五の第四迄は皆適當候へど第五は眞に日時を経ざれば確と定
 め難く故に第五の目的に石黒軍醫西總監益々益々益々益々益々益々益々益々
 にて此の第五の目的に石黒軍醫西總監益々益々益々益々益々益々益々益々
 も良く適せるを賞すといはれは胃弱の人には宜しかるへく甘味輕ければ菓子
 に他の菓子に勝れりされは胃弱の人には宜しかるへく甘味輕ければ菓子
 好まぬ人も食するを得へしと云ふは實に賞すといはれは胃弱の人には宜しかるへく甘味輕ければ菓子
 業博覽會に出出品褒賞を得普く江湖諸君の喝采を博したり爾來
 伏而奉願候

支本 店舖

越後國三條町
 東京市神田區
 表神保町二番地

石田二平治
 石田忠太郎

各位益々御繁榮奉賀候毎々御引立ノ段厚ク御禮申上候從而弊店儀開店
 當初ヨリ流行的ノ保險書ナル巧言ヲ用イズ(弊舖ハ御客様ニ對シ巧言
 玩弄的ノ保險書ヲ差シ上シテ嘗テ無シ)唯々確實ヲ旨トシ品質ノ精良
 ナ撰ミ實直廉價ニ販賣致シ來リ候處幸ヒ各位ノ御意ニ叶ヒ彌増シ御愛
 顧ニ預リ難有御禮申上候何卒此後トモ保險書ノ巧言ニ欺カレ賜事ナク
 精良確實ノ物品ヲ御需要ノ程願上候也
 尚左記ノ販賣品何レモ精良ハ勿論眞正ノ正札附テ以テ篤實ニ販賣可仕
 候間多少ニ不拘御用向御引立之程併而願入候也

販賣品目

- 金側銀側腕時計 白銅側金着側 其他各種
- 白黒石置時計 大小ホソク 目覚時計類
- 金線銀線眼鏡類 陸海軍航海用 旅行用 劇場用
- 兩眼鏡各種 義意用 解剖用 顯微鏡各種
- 金指環各種 其他彫刻ヲ施シタル者
- ダイヤモンド 其他諸寶石入各種
- 金銀鍍銅 金着銀類 磁石寫真入印材各種
- 糸組 時計袋 附屬品一式
- 琴歌 長唄 端歌 流行歌 唱歌 軍歌 新曲 テレコール
- 紙調子 各種空氣呼鐘類 ハロメー トル類 寒暖計類
- 体温計 灌腸器 吸入器 聽診器 義眼
- 醫療用電機器械 大小鏡類 各種

時鏡計 指輪 附屬品 雜品 外療器

東京市日本橋區本町
 三丁目拾壹番地

(電話中)

銀玉屋支店

地球印藥用葡萄酒は

海陸軍御用

天下無比

地球印



滋養飲料

各病院御用

重症後の恢復期等に最も効あり今や販路旭日の勢ひを以て海外に普及せんとす弊店の光榮之れに過ぎず莫くは江湖の君子遊藝漫遊に一杯を掬し其快味を賞せられん事を

發賣元

東京市馬喰町
武丁目壹番地

伊部商店

賣捌處全到る處にあり

衛生無比の飲料なり

農商務省登録商標

凡例

- 一 此書は余が曾て實踐せし東京近傍の温泉、海水浴場其他避暑遊覽の價ある各地の景況を叙し以て旅客の便覽に供せんとするものなり、世間ありふれの案内記には往々虚飾の文字を用ひて其實を失ふとあれども此書は専ら其の實況實情を寫すを旨とし毫も賣藥効能書の如き文字を弄せず是れ此書の特色なり讀者は其文の拙さを責すして記事の眞率なるを採れば可なり
- 一 此書を編むに當り其の考證として引用せし書籍甚からざれども一々其の書目を掲げず是れ其の煩はしきを厭へばなり
- 一 此書の大體を分ちて東海、東山、畿内、山陽の四部に區分せしは唯東京よりの方位に據りしものにして地理上の正しき國分に據りしものは非ず故に東海の部に見えざる地は之を他の部に覓むる等専ら左に記載せる目録に就て其地名を搜索すべし

例

凡

地球印藥用葡萄酒

海陸軍御用

天下無比



普く天下に高評を博したる「地球印藥用葡萄酒」は風に海陸軍隊を始め各病院の御用を蒙り加之内外華客の賞讃せらるる所にして殊に大醫の證明せらるゝ如く衛生上滋用無比の飲料にして能く何人の口にも適し第一腸胃赤痢氣鬱症及び

衛生無比の飲料なり

農商務省登録商標

地球印

滋養飲料

各病院御用

重症後の恢復期等に最も効あり今や服路旭日の勢ひを以て海外に普及せんとす弊店の光榮之れに過ぎず莫くは江湖の君子遊學漫遊に一杯を抽し其快味を賞せられん事を

發賣元

東京市馬喰町
武井日管酒地

伊部商店

賣捌處全到る處にあり

凡例

一此書は余が曾て實踐せし東京近傍の温泉、海水浴場其他避暑遊覽の價ある各地の景況を叙し以て旅客の便覽に供せんとするものなり、世間ありふれの案内記には往々虚飾の文字を用ひて其實を失ふとあれども此書は専ら其の實況實情を寫すを旨とし毫も賣藥効能書の如き文字を弄せず是れ此書の特長なり讀者は其文の拙さを責めずして記事の眞率なるを採れば可なり

一此書を編むに當り其の考證として引用せし書籍尠からざれども一々其の書目を掲げず是れ其の煩はしきを厭へばなり
一此書の大體を分ちて東海、東山、畿内、山陽の四部に區分せしは唯東京よりの方位に據りしものにして地理上の正しき國分に據りしものは非ず故に東海の部に見えざる地は之を他の部に覓むる等専ら左に記載せる目録に就て其地名を搜索すべし

凡例

一此書は去る明治廿五年の夏「東海東山漫遊案内」と題して發兌し翌廿六年は之に山陽五畿の一部を増加し且前版の誤りを訂して再版に附せしに幸ひにして五版六版を賣り盡すに至りしを以て今回更に名所數ヶ所を増補して第七版の印刷に附せり、之を初版に比すれば紙數殆ど百二十頁を増し避暑の地八十餘ヶ所を増せり去れど匆卒の際編纂せしものなれば其中或ひは二三の誤りなしとも保し難し看客若し誤謬を發見せば幸ひに垂教をたまへ

一此書を編むに當り日本鐵道會社其他の私立鐵道會社等は材料蒐集の便利を興へられ且理學博士、醫學博士、鐵道技師、地理専門家及び學士、新聞記者、漫遊家等の諸氏にして懇篤に余が所見の足らざる所を教示せられしも多し是等の教示は此書に無量の光彩を添へたるや論なし、茲に其の厚意を謝す

明治廿八年八月

編者識

序

時方夏、暑既至。滿都將化爲焦土。於是乎暑不可不避焉。避暑之計在先擇其地矣。擇而不精。則又與坐於焦土不異。乃避暑案内之撰曷可苟乎。抑鐵路關而險夷變。昨之崑崙汪洋不可足到者。今則得侶其麋鹿與魚蝦以游息矣。乃避暑案内之書。亦曷可無革新如此著者哉。友人野崎左文翁。頃者著避暑案内而成。其所載皆翁曾遊之地。所謂擇而

精者、余喜其能變焦土爲清涼之境。關秀靈
爲逍遙之區。於是乎序。

壬辰六月

經峯居士識

序
文

本編目次

緒言	一	頁
東海道の部		
金澤八景	一一	
鎌倉	一五	
鶴ヶ岡八幡宮◎鎌倉宮◎賴朝屋敷跡◎荏		
柄大神社◎壽福寺◎英勝寺◎淨妙寺◎建		
長寺◎長壽寺◎禪興寺◎圓忍寺◎妙本寺		
◎光明寺◎長谷觀音◎大佛◎海濱院		
江之島	二三	
逗子海水浴	二七	
横須賀海水浴	二八	
大津海水浴	二九	
鷗ヶ沼海水浴	二九	
大山(雨降神社)	三〇	
大磯海水浴	三三	
國府津海水浴	三五	
酒匂海水浴	三七	
小田原海水浴	三七	
道了權現	三八	
箱根温泉	四〇	
湯本◎塔之澤◎堂ヶ島◎宮ノ下◎底倉◎		
木賀◎芦ノ湯◎小涌谷◎大涌谷◎早川◎		
芦ノ湖◎元箱根◎箱根權現◎箱根驛◎湖		
尻◎乙女峠		

熱海温泉……………六四
大湯◎崎氣館◎熱海八景◎伊豆山温泉
 伊東温泉……………七七
 富士山……………八一
白糸流◎胎内くゞり◎曾我兄弟の墓
 佐野瀑園……………八八
 修善寺温泉……………九〇
修善寺(寺院)◎正覺院◎旭瀧
 湯ヶ島温泉……………九四
 牛臥海水浴……………九五
我入道海水浴◎桃郷の桃林
 戸田海水浴……………九八
 堂ヶ島洞窟……………九九

清見潟海水浴……………一〇二
 久能山(久能神社)……………一〇三
 焼津海水浴……………一〇四
 志太鑛泉……………一〇五
 五和村潮鑛泉……………一〇六
 秋葉山(秋葉神社)……………一〇七
 前芝海水浴……………一一〇
 鳳來寺山(鳳來寺)……………一一〇
 蒲郡海水浴……………一一三
 大野海水浴……………一一三
 師崎海水浴……………一一六
 佐久島海水浴……………一一七
 豊濱海水浴……………一一八

湯ノ山温泉……………一一九
 辛洲海水浴……………一二二
 伊勢大廟……………一二三
 朝熊山(朝熊神社)……………一二六
 二見ヶ浦海水浴……………一二七
 日和山……………一二九
 名古屋市……………一三一
 八事山……………一三二
 長良川鵜飼……………一三三
 虎溪山奇景……………一三七
 養老の瀧……………一四〇
 竹生島……………一四三
 彦根公園……………一四五

比叡山……………一四六
 石山寺……………一四七
 圓山公園……………一四九
 嵐山(附リ保津川)……………一五〇
 堺海水浴……………一五二
 箕面山(箕面瀧)……………一五三
 寶塚温泉……………一五五
 有馬温泉……………一五六
 布引瀑布……………一六三
 諏訪山温泉……………一六五
 和田岬和樂園……………一六六
 ○
 百草園……………一六七

目	次
四	
多摩川鮎狩	一六九
高雄山	一七二
御嶽山(武州)	一七五
御嶽山(甲州)	一七六
差出の磯	一七九
身延山(久遠寺)	一八〇
稻毛海水浴	一八四
成田山(新勝寺)	一八五
宗吾靈堂	一八八
鹿野山	一八九
鋸山日本寺	一九〇
北條海水浴	一九二
東山道の部	

大宮公園	一九六
日光	一九八
東照宮◎二荒山神社◎大猷院殿◎霧降の瀧◎裏見の瀧◎華嚴の瀧◎中禪寺湖◎湯本温泉	
庚申山	二二四
川治温泉	二二六
藤原温泉	二二八
鹽原温泉	二二九
那須温泉	二二六
筑波山	二三一
常磐公園	二三三
大洗海水浴	二三五

目	次
五	
太平山	二三七
岩船山	二三八
唐澤山	二三九
甲子温泉	二四一
湯本温泉	二四三
南湖(附り搦山)	二四五
飯坂温泉	二四五
湯野村温泉	二五〇
高湯温泉	二五二
土湯温泉	二五三
鎌先温泉	二五四
青根温泉	二五六
峨々温泉	二五九

遠刈田温泉	二六〇
小原温泉	二六一
仙臺市	二六二
燕澤蒙古の碑◎多賀城趾◎玉川古跡	
鹽竈浦(鹽竈神社)	二六八
宮浦田海水浴	二七〇
松島	二七一
五大堂◎觀瀾亭◎瑞巖寺◎雄島◎富山	
作並温泉	二七八
鳴子温泉	二八〇
中尊寺	二八二
五串の瀧	二八三

鬼石奇景……………二八五

伊保香温泉……………二八六

物開山◎船尾山◎箕輪城趾◎ガラメキ温泉◎ニッ嶽蒸風呂◎物産

澤渡温泉……………二九八

四萬温泉……………三〇〇

川原湯温泉……………三〇三

草津温泉……………三〇四

白根山◎常布の瀧◎園山◎水谷◎毒水

藪塚鑛泉……………三〇九

長岡鑛泉……………三一〇

高津戸急流……………三一一

赤城山(赤城神社)……………三一二

榛名山(榛名神社)……………三二三

磯部鑛泉……………三一九

佐々木城趾◎盛綱の墓◎大野九郎兵衛の墓◎仙石の碑◎横野

妙義山(妙義神社)……………三二七

霧積温泉……………三二九

輕井澤(碓氷嶺)……………三三二

淺間山……………三三五

淺間温泉……………三三七

姨捨山……………三四一

善光寺……………三四二

戸隠山(戸隠神社)……………三四六

湯田中温泉……………三四七

廣島公園◎縮景園◎佛護寺◎國泰寺◎宇

品港

嚴島(嚴島神社)……………三七四

附録

旅行心得……………三七九

赤倉温泉……………三五二

澁温泉(附り地獄谷)……………三五〇

山陽道の部

須磨の浦……………三五六

舞子の濱……………三五八

明石海水浴……………三五九

書寫山(圓教寺)……………三六〇

鷺ノ湯温泉……………三六三

西大寺……………三六五

後樂園……………三六七

沙美海水浴……………三六九

福禪寺對潮樓……………三七〇

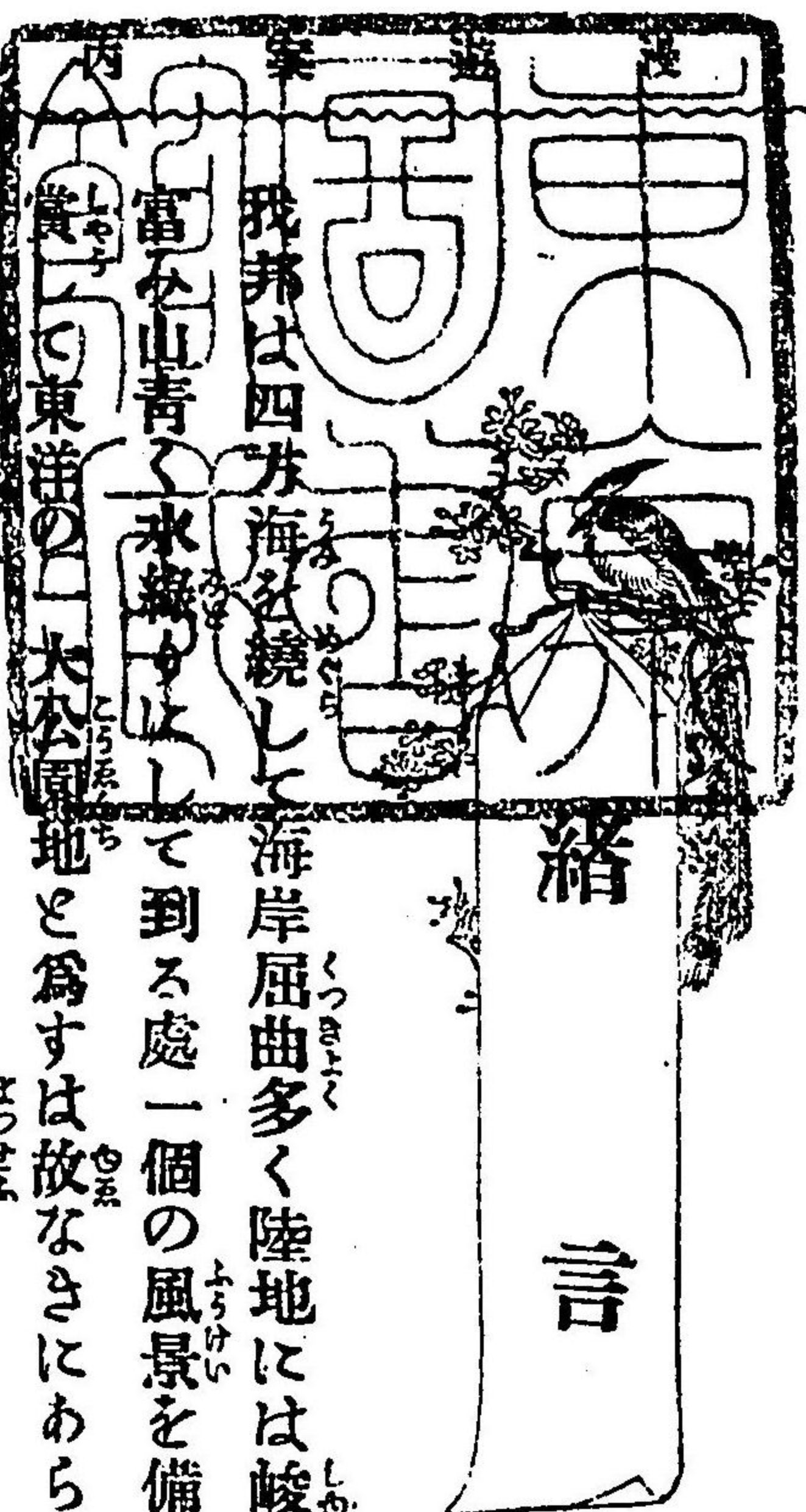
廣島市……………三七一

目次終

増補 東海東山 漫遊案内

畿内山陽

東京 野崎左文著



我邦は四方海を繞して海岸屈曲多く陸地には峻嶺綿亘して而も火山脈に
 富む山青く水綠くはして到る處一個の風景を備へざるはなし、外人の歎
 賞する東洋の一大公園地と爲すは故なきにあらず、此の天然の樂國に棲
 息する者悠々として山川の間を跋渉し以て我邦特有の風景を探るは亦一
 世の大快事ならずや

一 海は渺茫として際涯なく潮流急なるが爲めに汚物の滯はるなく又支那近

海の如く泥土の之を濁すなし故に最も海水冷浴に適す、山は峭率にして樹木鬱茂し其の火山脈に當れる處は幾多の天然温泉を涌出す、毎年日光金を熔かすの候に至れば苦熱を幽邃閑雅の地に避け其の風景を賞するの傍ら各地の海水温泉に浴し以て身体の健全を計らんとするは殆ど衛生家の常なり夏季漫遊者の多きは亦是れが爲めのみ

夫れ温泉并に海水浴療法が人體を健全にするの効あるとは今更喋々するを要せずと雖も空氣療養法の事に至りては漫遊案内者の職分として茲に一言せざる可からず醫學士廣瀨佐太郎氏の説に曰く抑も氣候とは何ぞや氣候とは空氣中に發顯する千種萬態の現象が此の地球の表面及び其上に生活する動植物に及ぼす所の働きを汎稱する者なり而して此の現象を發する所の演劇者は即ち所謂氣候學の元素なる者にして熱、光、電氣、濕、氣壓の五者なり、地球の太陽に於ける位置、地面の經緯度、其の高低の差、海陸山谷、動植物の模様に従つて此の五元素は万般の變化を現はし

地球の表面及び其上に棲息する生活體上に一定の感應影響を致す是れ即ち氣候にして吾人の知覺する所の空氣の寒熱、風雨、陰晴の如きは「マイエル氏は之を名けて氣候の徴候なり」と云ふ亦宜なる哉、他の語を以て之を言へば吾が地球の表面は即ち熱、光、電氣、濕、氣壓の活劇場なり而して吾人は此の活劇場の裡に生活する者なり然らば則ち吾人の健康なる否とは此の演劇の模様は大關係あるや火を觀るよりも明かなり故に其害あるは之を避け利あるは之に就き以て健康を保ち以て疾病を除き氣候を以て醫療の版圖に屬せしめ寒暄、燥濕、雨雪、雷電悉とく收めて以て藥品の一種となす是則ち氣候療法の目的なりとす、凡そ氣候に四種あり高嶽氣候、(亞爾普私氣候)、山陵氣候、(亞爾普私下氣候)沿海氣候、及び低地氣候即ち是なり

「高嶽氣候」とは海面より高きと三千乃至三千五百尺以上の高山氣候を云ふ空氣稀薄透明にして壓力少なく溫度極めて低し然れども太陽の照輝熾

んなるが故に晝夜寒暖の差甚だしく風力并に風向暫時に轉變して而して
 濕氣の量は僅少なりと雖も空氣の稀薄なるが故に輻射飽和し易く又乾燥
 し易く陰晴瞬時に轉換す而して此の氣候は肺臟及び皮膚より水分を排泄
 するを盛んならしめ新陳代謝を亢進し隨つて身體に衝動強壯の効を
 致す然れども虛弱家、衰憊患者にして神經過敏なる者及び老幼等は
 之に堪ふる能はざるものとす

「沿海氣候」とは大洋若くは海灣に瀕接する土地の氣候にして高嶽氣候の
 反對なり空氣稠濃にして濕氣多く寒暖の差甚だしからず強壯保攝鎮靜安
 慰の効あり

「山陵氣候」とは海面上千尺乃至三千尺の地にある氣候を云ふなり此の氣
 候を有する場所は多くは山間の溪澗若くは陵坡にあり周圍は高峯環繞
 して劇風を防ぎ草木繁茂して鬱蒼たる森林を爲し所謂「森林氣候」を併有
 する者なり森林は樹木の「新陳代謝」に由て炭酸を吸ひ酸素を吐き阿巽を形

成し水蒸氣を集積し樹葉は日光を掩遮して清爽なる樹陰を作り土地は水
 分に富みて苔蒸し草茂り空氣は清冷にして皮膚及び呼吸器粘膜に緩和爽
 快の感覺を致す是れ即ち夏日散步の際圖らず森林に入るや各自の身體に
 忽ち感觸するを以ても知るべきなり、凡そ山陵氣候は多少高嶽氣候の性
 質を帯び空氣は稀薄なりと雖も樹木の爲めに雨露多く且高峯峻嶽より溪
 泉流下するに由りて土地は水分に富み従つて其の蒸發盛んなるが故に空
 氣の水分は高嶽よりも遙かに許多なり太陽の照輝は一は雨露、一は樹木、
 一は土地の滋潤なるに由りて其の熾熱の力を及ぼすと高嶽に於けるが如
 く劇烈ならず従つて温度低くして且晝夜寒暖の差甚だしからず、之を要
 するに山陵氣候は爽涼清淨にして高嶽の如く酷烈ならず沿海の如く緩
 和ならず神經系統呼吸器及び皮膚を輕易に刺戟して其の機能を催進し酸
 化燃焼及び物質交換を亢進し以て身體を強壯にするものなり故に總て神
 經系統を鼓舞し精神を快暢し全身の新陳代謝を作興するを要するもの

にして高嶽氣候劇烈の衝動に堪へざる人に偉効あり呼吸器の疾患已に著るしく發現せる患者にして高嶽氣候に堪へざる者と雖も此の氣候には能く堪へ得るものとす、山陵氣候は夏日避暑に最も適當なるものにして時期は六月上旬より十月下旬迄を佳しとす

「低地氣候」一に中和氣候とは海面上千尺以下の地に在る氣候にして海濱若くは島嶼に非ず内地に在る溪谷平原若くは山麓にして海面上千尺に達せざるもの皆此の氣候に屬す、而して此の氣候を中和と名くるは彼の氣候の原素たる光、熱、濕、電氣、氣壓等能く其の中和を得て偏頗なきの謂なりと雖も凡そ此に屬するの地は其數實に無限にして其の地形も亦甚だ同じからず其の地勢の丘岡なるや澗谷なるや若くは平原なるやに従ひ又近傍水流の模様及び山の向背等に従つて氣候甚だ異なり而して低地の溪間に在る處は四方の連山能く暴烈なる風を禦ぎ寒熱風濕の變動急劇ならず温度は山陵氣候より遙かに高く晝夜寒暖の差も亦大に僅少なり之を

「溪間氣候」といふ、斯の如き氣候は總て人體經濟の需用を減少し諸器の官能を休憩するが故に山陵氣候に堪へざる神經過敏の人若くは薄弱衰憊の者最も此の氣候に適し又山陵氣候を喫するの前暫く茲に滯留して所謂豫備療法を爲すに最も適當なりとす

以上は廣瀨醫學士が氣候療法に就て論述せし所の大意なり以て轉地養療が病なき人に向つても猶ほ身體精神を安慰するの効あることを知るべし故に都人士が温泉海水浴の有無を問はず毎歲夏季に至れば先を争ふて暑を山明水媚の地に避くるは又た此理に外ならず、然れども避暑湯治の催しは重に紳士豪商若くは貴婦人の間にのみ行はれ温泉宿海水浴舎は勢ひ豪遊を競ふの場所と化せし傾きあるを以て終には避暑の舉を目して驕奢の遊びなりと認る者あるに至れり去れば炎熱に苦しむ中等以下の人々は縦令避暑の望みあるも其の費用の非常に多からんとを恐れ終に其志ざしを果さずして止む者も多しとか、是れ併しながら其の土地の實況を知らざ

るが爲め唯だ世間の評判にのみ感はされ徒らに逡巡する者にして箱根熱海の名區と雖も節儉以て病を養ふの法無きにあらず若し其の土地に馴れ其の實況に通じたらんには勉めて冗費を省き奢らず惰ならず所謂身分相應の保養を爲し得ると亦自由なるべし、故に唯だ世間の評判にのみ聞怖して避暑を以て贅澤の遊びなりとし僅かの費用を惜みて炎熱を避くるの方法を求めざるが如きは衛生家の取らざる所なるべし、余は醫師にも非ず又衛生家にも非ずと雖も曾て近縣避暑の地を實踐し親しく其の情況を探り得たるが故に嗚呼がましくも自ら避暑通を以て任じ茲に其の實況實情を寫して廣く初遊の人々の爲めに其道を爲し併せて諸子の益と健全無病ならんとを祈るものなり、時恰も盛夏の候に際す避暑の企てる諸子は先づ此の一冊子を懐にし豫め宿引に強誘され惡車夫に惑はさるるの難を避け以て轉ばぬ先の杖とも爲し玉へかし

著者は一方に向つては避暑の遊びを勸むると共に亦一方に向つては大に

旅舎の戒心を請ひたきものあり开を如何にといふに近來商賣競争の結果として各温泉海水浴舎の内には唯だ一時の利にのみ迷ひて往々客を欺くの悪計を運らす者あり例へば豫て車夫と内約を結び客一人を誘ひ來れば若干の禮金を與ふるが如き是なり其の禮金は果して旅舎の自辨なるかと云ふに其實は皆客の會計中に附掛を爲すものなれば結局客の懐中より出すに異ならず、此の如くにして其家永く繁昌すべき乎、一家の不評判は即ち其土地の衰微を來すの基なれば旅舎を營む者は唯だ誠實の二字を以て客に接する事こそ望ましけれ

東海道の一部

東京近傍避暑の地多し然れども其の旅行は汽車汽船の安全迅速なるに如かざるを以て茲には先づ汽車の便ある東海道の方に案内すべし、而して茲に東海道の部と記せしは悉く東海道十五國を包含するものには非ずして所謂東海鐵道線路の通ずる所即ち武藏、相模、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、山城、攝津の九ヶ國又鐵道線路は國中を横ぎらざれども其近傍なるを以て之に伊豆、甲斐の二ヶ國を加へ又東山道之美濃、近江の二國は東海鐵道線路の通ずる所なるが故に特に此部に加へ都合十三ヶ國中の避暑地を選び東京より遠近の順序を以て記載するものと知るべし、偕東海鐵道は東京新橋を起點として兵庫縣神戸市に終る其長さ三百七十六

哩三十一鎖毎日數回の發車あり、旅客は今新橋より汽車に乗り西に向ひて旅行するものとせんに第一着に池上温泉あり大森停車場を距る西の方僅に廿五町に位し其鐵泉は多量の鹽分を含み晝夜沸して入浴に便す去れど此地は東京に接近し看客の既に熟知する所なれば其の勝景等は茲に贅せず夫より神奈川停車場に到れば右に神奈川臺を望む此地温泉海水浴の設けなしと雖も夏日來りて涼を納るゝ者多し、汽車已に横濱に着すれば去て本牧の海水浴場に遊ぶも可なれど茲より往て一覽すべきは

●金澤八景

なりとす、金澤は横濱を距る西南四里餘武藏國久良岐郡の南端にあり此地は東南に海を擁して夏島、鳥帽子島は灣の入口に點在し後には連峯を遶して山水の眺め雨つながら備はり其の風色杭の西湖に似たりとて大明の心越禪師曾て八勝を撰びて詩賦を残し吉田の兼好法師も亦此地に住ひ

て景色よきを賞したるの地なれば遠く望めば宛然箱庭の如く絶景云はん
方なし所謂八景とは洲先の清嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜雨、乙艦の歸帆、
稱名寺の晚鐘、平瀉の落鴈、内川の暮雪、野島の夕照等にして心越禪師
の詩賦は左の如し

○洲崎晴嵐

滔々驟浪歛餘暉。滾々狂波遶竹扉。市後日斜人靜悄。行雲流水自依々。

○瀬戸秋月

清瀨涓々不繫舟。風傳虛籟正中秋。廣寒桂子香颺處。共看氷輪島際浮。

○小泉夜雨

暮雨淒涼夢亦驚。甘泉洞々聽分明。蓬窓淹蹇無相識。腸斷君山鐵笛聲。

○乙艦歸帆

朝宗萬派遠連天。無恙輕帆掛日邊。欸乃高歌落雲外。依稀數艇到洲前。

○稱名晚鐘

夙昔名藍成覺地。華鐘晚扣若鯨音。幽明聞者咸生悟。一片迷離祇樹木。

○平瀉落鴈

列陣冲冥堪入塞。荻蘆蕭瑟幾成隊。飛鳴宿食恁棲遲。千里傳書誰不愛。

○内川暮雪

廣陌長堤竟沒潛。奇花六出以鋪練。渾然玉砌山河色。遍覆危峰露些尖。

○野島夕照

獨羨漁翁是作家。持竿盪槳日西斜。網得魚來沾酒飲。披簑高臥任堪誇。

武州金澤擲筆山能見堂。有瀟相八景之風味。因觀鎌倉志甚詳。一夕

寥々對青燈。漫賦八景之陋句。以識斯勝境云。歲執徐夏日。東皐越

杜。

此八景の眺めを一眸の中に收むるの地は能見堂を以て第一とす、能見堂
は稱名寺より西北に當れる山上にありて禪宗の草庵なり其の本尊は惠心
僧都の作にして丈一寸八分なりしを後世二尺五寸ばかりの地藏菩薩を作

り靈像を其胎中に籠めたりと云ふ又昔し巨勢の金岡茲に來りて景色を寫さんとせしも畫圖の及ばざるを知り筆を投じて止みし事ありとて此山を今猶は擲筆山とも云ふとぞ、此地より望めば名にし負ふ八景は陣中に集まり來りて寸人豆馬は云ふも更なり沖もく舟は宛然木の葉を泛べたるが如く夏島は龜の背を干すにやと誤たれ其の絶景筆の及ぶ所にあらず、山を下ると數町にして稱名寺に到る此寺は八景の一にして昔しは龜山帝の勅願所、金澤顯時の建つる所と云ふ境内阿彌陀院の後の山に顯時及び其子貞顯の墓あり、茲より町屋村を過ぎて洲先に至り行くと數十歩にして瀬戸の斷橋を渡れば左に料理店東屋、千代本の二軒あり東屋は樓號を四時總宜樓と呼び庭は入江に臨み小舟を其岸に泛べて客の乗るに任するなと頗る眺めよき地なり千代本も亦敢て東屋に劣らず兩家とも魚肉の鮮けさに誇り客ある毎に生洲の魚を捕り活ながら料理するを常とす、瀬戸明神社は東屋より西の方凡そ一町餘瀬戸辨財天は同じく社前の道を隔て、

南の入海に斗出せる小島にあり、又同所より西南凡そ六七町の處に昇天山金龍院といふ寺あり世俗飛石山とも呼び禪宗にして鎌倉建長寺に屬せり境内に九覽亭なるものありて此處の眺望も亦敢て能見堂に譲らず其の八景の外に能見堂をも併せ覽るの意にて九覽亭とは名けたるものとぞ、楮横濱より此地に到るには根岸、杉田、富岡等を経て洲崎に出る順序なれども旅客の都合に依りては汽車にて鎌倉に到り同所より朝比奈の切通しを経て此地に出る方便利ならん、鎌倉より金澤までの里程二里十町其の途中切通しの嶺凡そ二十町の間を徒歩すれば其他は車を驅ると自由なり、鎌倉より此地に至る人力車賃一人乗廿五錢、横濱は車賃の高き處なれば同所より金澤に到らんとするには賃金六七十錢を費やさるを得ず又野島より横須賀まで水夫二人乗の舟賃は四十錢なり

● 鎌倉

鎌倉とは廣袤東西二里南北一里餘、雪ノ下、大町、小町、扇ヶ谷等十三ヶ村に亘れる一郷の總稱にして町村制實施の後には東鎌倉、西鎌倉の二村に分る、其東は糟峯秀で、武藏相摸の兩國を界し南は相摸の海に臨みて遙かに伊豆の大島と相對す鎌倉は中古源氏の覇を起し次で北條氏の占據せし古への大都會にして名祠靈剎固より多し故に遊客は消夏の餘名所を探り古跡を尋ね以て考古の材料となすも亦面白かるべし今其の重なる勝地を擧れば

●鶴ヶ岡八幡宮 ●は國幣中社にして應神天皇、神功皇后、大仲媛の神を祭る東京より此地に遊ばんとするには新橋より汽車に乗り大船にて更に横須賀行の列車に乗換れば第一着の停車場は即ち鎌倉にして同停車場は八幡宮二三鳥居の間に在るを以て徒歩三四町にして八幡宮本社に到るを得べし(新橋より鎌倉まで汽車賃下等三十三錢)相傳ふ八幡宮は康平六年伊豫守頼義の建立する所にして永保元年陸奥守義家之を修葺す其後治承四年

源の頼朝小林郷に之を再建し建久二年更に今の地に遷宮して大に寶殿を造營せしと云ふ、停車場より二の鳥居、一の鳥居を潛り赤橋を渡りて境内に入れば正面に神樂殿、右には仁徳天皇を祀れる若宮、朝頼公を祭れる白旗の宮あり昔し義經の妾靜が頼朝の命に依り相夫戀の唱歌を謠ひて一曲の舞を奏せしは此の若宮の社殿なりとぞ、石階の西側に椰の木あり承久元年當宮の別當公曉が實朝を斬殺したるは即ち此處なりと云傳ふ、石階を登れば直ちに本社に拜殿に達す本社は應神天皇を齋まつり本殿は豎九間、横三間にして拜殿は四間に二間なり又本社に寶物あまたあり頼朝の木像を始めとして武器數百點を陳列す拜覽料を納むれば誰にても縦覽し得べし

●鎌倉宮 ●は官幣中社にして大塔宮護良親王を齋祀し八幡宮より東北凡そ六町二階堂ヶ谷の山麓に在りて親王の籠らせ給ひし土牢は即ち本社の後に在り社は明治二年創設せられしものにて境内櫻樹紅葉多し一たび此社

に詣して彼の土牢を見れば誰か暗涙を催さるる者あらんや
 頼朝屋敷跡 八幡宮の東金澤道の傍らに在り治承四年頼朝公大庭景義
 をして邸を大藏の郷に新築せしめ同年十二月上總介廣常が宅より新築の
 邸に移り玉ふとあるは此地の事なり今は一の法華堂を残すのみにて其地
 は茫々たる田圃と化し去りて榮枯盛衰の理り目のあたりにより一見自か
 ら懐古の情に堪へず
 荏柄天神社 は頼朝屋敷の東北に在りて鶴ヶ岡八幡宮の一ノ鳥居を距る
 と凡そ七町、本社に菅丞相束帯の像を安置す本社創建并に木像の作者
 共に詳らかならず、一説に和田胤長の邸地は即ち此社境内の西南隅今の
 茂林中にありしならんと云ふ者あり猶ほ考ふべし
 壽福寺 は山號を龜谷山と云ひ八幡宮の東龜ヶ谷に在りて鎌倉五山の第
 三なり開山塔、壽窟、政子塔、實朝塔、望夫石等は皆此の寺内にあり
 英勝寺 は福壽寺の北隣にありて東光山と號す太田氏英勝院禪尼自から

菩提の爲めに念佛道場を創立し水戸中納言頼房卿の息女をして薙髮せし
 め以て此寺の開山住持と爲せしと云ふ、此地は太田道灌が舊宅なり
 淨妙寺 は稻荷山と號し五山の第五なり開山塔を光明院と云ひ開山の像
 源の直義の像あり又光明院殿本覺大姉と書したる位牌あり足利義氏を法
 樂寺殿正義と號し其女を光明院と號す光明院は權大納言隆親の室にして
 隆顯の母なり
 建長寺 は巨福山と號し鎌倉五山の第一にして建長元年相模守北條時頼
 の創建に係り宋僧道隆(大覺禪師)を以て開祖とす總門の額は寧一山の書
 する所にして其の巨の字に一畫を加へて書きたるを以て世人之を百貫點
 といふ山門は其の構造を宋の寺門に摸擬せしものにして結構の宏大なる
 は鎌倉數十の靈刹中敢て其比を見ず又佛殿には丈六の地藏菩薩を中尊と
 し其他同像千體を安置す
 長壽寺 は寶龜山と號す源の基氏其父尊氏の爲めに建立する所と云ふ會

氏を長壽寺殿妙義仁山大居士と號し延文三年四月薨す尊氏の塔今猶は客殿の後なる山際さんさいにあり昔しは此あたりこゝに尊氏の屋敷有しとも云へり
 禪興寺ぜんこうじは福源山ふくげんざんと號す淨智寺じやうちじの筋向すぢむかひに在りて本殿ほんでんには釋迦しやくかを祭り別に蜀しやくの大帝たいてい、韋駄天わいたてん、北條時宗きたじょうときむね、同時貞どうじてい、上杉重房かみすぎしげふさの像各さうぞう一軀いくあり又祖師そし堂だうには大覺禪師たいかくぜんじ、北條時頼きたじょうときよりの像あんちを安置あんちす其の東隣とうりんにある寺を明月院めいげつゐんと云ふ亦觀るべきの靈刹れいさつなり
 圓覺寺えんかくじは瑞鹿山ずいろうざんと號す鎌倉五山の第二だいににして建長寺けんぢやうじの西北二三町字山ノ内にあり弘安五年こうあんごね相模守北條時宗さかのみかみきたじょうときむねの創建そんけんにして宋僧祖元そうそうげん(佛光禪師ぶつこうぜんじ)を開祖かいそとす總門そうもんは建長寺けんぢやうじの如く宋の寺門じもんに摸擬もぎしたるものにして其額そのがくは後光嚴帝こうげんていの宸筆しんぴつなり佛殿ぶつでんの額がく亦後光嚴帝こうげんていの宸筆しんぴつにして祖師堂そしだうには達磨だつま、百丈ひやくぢやう、臨濟りんざい、開山かいざんの像さうぞうを安置あんちし土地堂どちだうには伽藍神がらんじん及び代々將軍だいだいじやうぐんの位牌ゐはいを藏ざうす其他岩窟觀音いはくわんくわん、開山塔かいざんたふ、佛日庵ぶつじつあん、坐禪窟ざぜんくつ、虎頭岩ことうがん等皆みなな寺内に在り其の寺域じやくは凡そ五千二百坪なり

妙本寺めうほんじは長興山ちやうきやうざんと號す停車場ていじやうばの東南僅かに數町、大町比企ヶ谷おほまちひきヶやに在り文永十一年ぶんえいじゅういちねん日蓮にっれんの俗弟子比企大學三郎ひきだいがくさんじやうの創建そんけんする所にして寺内に比企氏一門ひきしやうもんの墓はかあり、本堂ほんだうには陳和卿ちんわけいが作りし釋迦しやくかの立像りつざうを安し御影堂みえいだうには祖師そしの像さうぞうを安す又佛舍利一粒ぶつしやうりりゅう、水晶塔すゐしやうたふの中なかにあり高さ一尺五寸許いちぢやくごすんこほにして平ノ重時しげときが所持しよじせしものと言傳いひつたふ
 光明寺くわうめいじは天照山てんせうざんと號す僧良忠そうりやうちゆう(記主禪師きしゆぜんじ)の開山かいざんにして仁治元年にんぢごねん北條經時きたじやうきやうとき佐介さけヶ谷やに創建そんけんし後のち寛元元年かんげんごねん今の亂橋材木座みだればしさいもくざに移す始めは蓮華寺れんげじと號せしが後のち光明寺くわうめいじと改め方丈はうぢやうを蓮華院れんげゐんと名く山門さんもん天照山てんせうざん三字さんじの額がくは後花園帝はなぞのていの宸筆しんぴつにして二尊堂にそんだうには辨財天べんさいてんの像さうぞう及び善導ぜんだうの像さうぞうを安置あんちす
 長谷觀音ちやうこくわんおんは海光山かいこくわんざんと號す鶴ヶ岡八幡宮つるがおかやつかみみやう一ノ鳥居とりいより西凡十八町にしひやくはちぢやうの處に在りて阪東巡禮ばんとうじゆんれい第四だいよの札所ふだしょなり本堂ほんだうには十一面觀音じゆんいちめんくわんおんの像さうぞうを安置あんちせり
 大佛だいつつは長谷觀音ちやうこくわんおんの北きた、御輿みこし嶽たけの麓ふもとにあり、像さうぞうは唐銅たうかぬの盧遮那佛ろしやなぶつにして長さ三丈五尺さんぢやうごぢやく、膝ひざの廣ひろさ五間半ごかんぱん、袖口そでぐちより指先ゆびさきまで二尺七寸餘にぢやくしちすんじゆ、掌中しやうちゆうに

二三人を立たしむると易し奈良の大佛と共に日本の二大銅像となす、傳へて言ふ昔し寛元年間茲に一字の精舎を營み高さ八丈餘の阿彌陀の佛像を安置せしものなりと然れども此像は何時の頃にか滅亡し現存のものは建長四年に鑄造せしものなりと、此外神社佛閣、名所舊跡の類枚舉するに遑わらず故に多くは省略せり

●海濱院 は鎌倉海水温浴場の名にして停車場の南凡そ十町餘、由井ヶ濱の松林中にあり元と横濱の豪商某々等相謀りて新築せしものにして機械を以て海水を館内に引き常に之を温ためて浴を取らしむるの仕掛なり又夏は海水の塵埃なき處を擇びて冷浴せしむ此地南面は海濱に接して江ノ島富嶽と相對し近傍に貴顯紳士の別荘多く眺望快豁にして頗る風色に富めり、館は純然たる外國ホテルの仕組にして飲食臥具の類皆備はり且重に外國人を客とし其宿料は一日二圓五十錢の定めなり、普通の旅店は長谷の三橋樓を第一とし之に次では雪ノ下にては角正樓、丸屋、三橋支

店等を善しとす借右にて略ぼ鎌倉の案内を終りたれば是より旅客を

●江ノ島

に導くべし、江ノ島は鎌倉八幡前停車場より七里ヶ濱を経て西凡そ二里、鎌倉郡南端の海中に點在す、鎌倉より人力車に乗りて極樂寺切通しを過行けば左に稻村ヶ崎を望む稻村ヶ崎は前に由井ヶ濱、七里ヶ濱の海濱を擁し西南は江ノ島及び遠く富嶽と相對し後は松山を負ひて風景佳絶の地元弘三年新田義貞黄金作りの太刀を海に投じて勝軍を龍神に祈りしは即ち此處なり、茲より腰越までの間を七里ヶ濱と云ふ其長さ關東道の七里(六町一里)なるが故に名く、七里ヶ濱を過ぐれば直ちに腰越村に到る往古源の義經平族を平げて鎌倉に入らんとせし時梶原景時の讒に依り兄頼朝の爲めに拒まれ終に入るとを得ざりしかば其臣辨慶に命じて書を作らしめ以て其冤を訴へたるは即ち此地の事にして満福寺は當時の旅館なり

しと云ふ、満福寺は龍護山と號し硯ノ池、辨慶腰掛石など云へるもの寺中にあり茲より江ノ島まで十五町なり

江ノ島は金龜山と號す此島は欽明天皇の御宇壬申の年四月十二日より廿三日まで打續きたる大地震の時突然海上に噴起し終に一孤島を爲したるものにて又の名を鷗鷺來島とも云ふ、此地東は七里ヶ濱、由井ヶ濱等の鎌倉海濱に面し西に富嶽、箱根山より大磯、小田原の海を望み南は渺茫たる大平洋に連なり四顧皆な豆相房總の風景を占めて眺望飽くことを知らざるの地なり、片瀬の洲鼻より島の入口まで十四町四十間、島ノ入口より龍穴まで十四町餘、退潮の時には砂洲を歩みて島に渡るを常とす、江之島神社は多紀津姫命、市杵島姫命、多紀理姫命三神を祭り本社は島の西南小高き處にあり去れど昔しより本宮と稱するは島の南端龍穴中にあるものにして今の本社は其の御旅所なりと本宮は窟の内院にありて弘法大師の作れる辨天の神像を安す窟辨天即ち是なり窟の口は南に向ひ常に海

水を湛へて甚だ危し左傍に設けたる棧を歩みて窟中に入れば行くに隨つて四面愈々暗く夏日と雖も冷氣猶ほ肌を襲ふ、行くに數歩にして洞窟左下に岐れ一を胎藏界一を金剛界といふ其奥に兩部の大日如來を安す又東の窟に無熱池あり西の窟に日蓮上人の趺座石あり傳へて云ふ日蓮此窟の中に籠り石上に坐して冥感を祈り自ら法華經を寫して窟の院内に藏むと、此外島中に上ノ宮下ノ宮あり上ノ宮は文徳帝の仁壽三年慈覺大師の創造する所にして辨財天女の像を祭る下ノ宮は建永元年良真上人の開基にして源實朝之を創建す本尊辨財天女の像は弘法大師の作にして其他慈悲上人(良真)慶仁禪師源ノ實朝等の像を安置す、偕此二社を過ぎて前記の龍穴に下らんとする島の南端に見ヶ淵といふ處あり昔し相承院の白菊と呼べる兒自休藏主といふ庵主に戀慕せられ其心の切なるに絆されければ其處を見ヶ淵とは呼ぶとぞ今は夏日に至れば此邊に蜨の子等打つとひ

旅客に銅貨を投させ先を争ひつゝ、中水に潜り入り之を拾ひて我が所得とす、江ノ島にて名ある宿屋料理屋は恵比壽屋、岩本樓、讚岐屋、金龜樓、江戸屋、塚屋、北村屋、立花屋等とす就中恵比壽屋茂八は其構へ手廣にして崖には別荘を設け眺望も亦佳なり同家の宿料は一等一日八十錢、二等七十錢、三等六十錢、四等五十錢、五等四十錢にして料理は客の好みに應じて鹽梅し金龜樓其他一二軒にては西洋料理をも調進す魚類の鮮けきは殊に此地の誇る所なり又前には鎌倉よりの道順を記せしが若し東京より直ちに江ノ島に來らんとするには藤澤停車場（新橋よりの瀧車下等三十二錢）にて下車し島ノ入口まで一里餘の處人力車を驅れば僅かに四十分間にして達す、途中片瀬と腰越との間に龍口寺あり文永八年九月十日二日蓮上人難に遭ふの舊跡にして寺内にある敷草石といふは上人此上に坐したるものとて一名首ノ坐石とも云ふ是を龍口の御難と云ひ毎歲九月十二日には宗徒打寄りて法會を營み法華經題目を誦し是日遠近より來り詣づる者多し又此處より江ノ島まで十二町なり

● 逗子海水浴

鎌倉より瀧車に乗りて西行するに先だち看客に案内すべき二三の海水浴場は猶ほ横須賀支線近傍に在り逗子海水浴場も亦其一なり、逗子は横須賀支線に於る鎌倉より第二の停車場にして新橋より下等瀧車賃三十五錢停車場より西に向ひ行くと數町にして其の海濱に出れば前面に近く江ノ島を望み伊豆の陸地は大島と連なりて一大灣形を爲し其の風色をさくく江ノ島鎌倉に劣らず、海水浴旅店は養神亭、日影ノ茶屋等にして孰れも海岸眺望の宜しき地を擇びて建築し傍ら割烹を業として客を待つ養神亭一日の宿料は二十五錢以上五十錢までにして之を他の海水浴場に比すれば其價ひも亦稍や廉なり此外近傍に貴顯の別業多く又停車場を距る南の方一里餘字長者ヶ崎と云ふ處に長者園なるものあり前に白砂を擁し後に

翠松を遶らし風景は逗子と伯仲の間にあれども幽雅の點に至りては優る所あるが如し逗子停車場より人力車賃十二錢夏季に至れば孰れも浴客充満して其の繁昌云ふばかりなし

●横須賀海水浴

逗子より瀛車に乗りて横須賀に到れば同地の海岸に海水浴場三富館あり此地は逗子とは全く反對の海岸にあるを以て其の眺望も亦大に異なりて頗る目新しさ心地す、三富館は横須賀町若松海岸内の東京灣に突出せる閑地に在りて後には米溪山松岸寺の勝地を扣へ前には房、總、常の諸山殊に鋸山、鹿野山、筑波山近くは富津第一第二砲臺及び猿島夏島の砲臺を望み涼氣脈々人の骨に沁し清風颯々人の袂を拂ふなど亦一個の好避暑地なり、停車場より三富館まで人力車賃八錢、同館宿料は上等六十錢、中等四十五錢にして館内別に潮風呂、真水風呂の設けあり

●大津海水浴

横須賀より南一里餘(人力車賃十八錢)三浦郡浦賀町字大津の海濱には海水浴旅館大津館あり其の風致は稍や三富館に優るもの、如し同館の構造は建坪四百餘坪の總二階建にして其の眺望は三富館に加ふるに右に觀音崎の砲臺左に本牧富岡の諸灣雙眸の中にあり同館宿泊料は一週間上等三圓五十錢より特別五圓迄、中等二圓五十錢より三圓まで、並二圓、又横須賀より海上此地に到る仕立船賃は三十錢より五十錢までにして一艘十名以内の客を容るゝと云ふ(以下再び東海鐵道の順路に戻る)

●鵜ヶ沼海水浴

鵜ヶ沼は藤澤停車場を距る南二十餘町、江ノ島を距る西北凡そ十二町の處にあり此地は一の灣形を爲し前面には江ノ島を近きと手に取るが如く

に望み東は片瀬腰越を隔て、相房の遠山を眺め南は大島及び伊豆の小島等を水天髣髴の間に認め西南は伊豆の陸地と相對し西には富嶽、後には大山連きの巒峰を遶らして其の眺望をさく江ノ島に劣らざれど此地は近年に開けたる處なれば世間未だ其名を知る人多ららず況んや實地に遊びたる者に於ては其數甚だ稀なりしが先年大隈伯の此地に滞在せられしより以來都人漸く鵠ヶ沼あることを知るに至れり、地は一面の砂濱にして處々に松樹雜茂し其の水浴場に充つる處は海面十餘町の遠淺にして浪高からず潮水も亦清潔なれば老人婦女と雖も決して危険の恐れなし、料理屋にして宿屋を兼ねるもの四戸曰く鵠沼館、曰く待潮館、曰く東樓、曰く三升樓、皆新築に係るものにして物價は他の浴場に較べて稍や低廉なれば轉地療養等には頗る適當の地なるべし其他蜂須賀侯爵、藤浪侍従、高崎五六、田中平八、諸氏の別荘あり、藤澤停車場より此地への人力車賃は晴天十錢の定めなれども鵠ヶ沼に近づくに隨ひ車輪は深く砂地に入りて車の進むと遅ければ婦女病者を除くの外は徒歩する方増しなるべし

● 大山(雨降神社)

鵠ヶ沼より西北を望めば甲武の連山南に延びて漸く低くなりし處に鬱蒼として那波翁帽形の山天表に聳ゆるを見るべし是れを相摸に名高き大山とす、新橋より平塚停車場まで汽車賃下等四十錢茲より人力車に乗換へ中原、豊田等を経て上粕屋村に至る此の里程二里、人力車賃二十八錢、同處子易明神前より二十町の間は峻阪にして車を通せず(駕籠賃二十錢)此阪を登り詰れば即ち大山町にして人家凡そ三百軒ばかり、道の兩側に商家櫛比し就中舊御師の家、宿屋、茶店及び名物の挽物細工を鬻ぐ家多く且道の右傍に良辨の瀧と呼ぶ小瀑布あり其他山上に新瀧、大瀧等の瀑布多し、町の盡處より阪路二つに分れ右を男阪と云ひ左を女阪と云ふ登ると八町にして奥の不動堂に至り茲より猶は登ると十八町にして雨降神社の

本殿に達す祭る所大山祇命にして神體は巖石なり故に石尊大權現とも云へり傳へて云ふ日本武尊東夷征伐の時此の岩上に腰を掛けて憩ひ給ひしなりと云ふ又親鸞上人七ヶ年間相州を經歷の時茲に登山して石面に歸命盡十方無碍光如來の十字を鐫刻し後ち本願寺第八代達如上人之を拜して其主旨を書せりと、毎歲舊曆六月廿七日より七月十七日までの間本社に於て祭事を執行し此の日限中は東京其他近郷より白衣を纏ひて參詣する者頗る多く之を山參りとは云ふなり、大山町の旅館は翠浪閣を以て最とし一日の宿料は廿五錢を以て定めとす其他伊豆屋(小川忠兵衛)駒屋(原菊次郎)玉本(武喜代馬)の旅店ありて夏日此地に來りて暑を避くる者多し去れど大山町は大山、櫻山兩山の間に挾まれ眼界廣からずして眺望に乏しければ景色を愛する人は雨降神社に登るか又は櫻山に攀るを善しとす櫻山は町の右方にある峻嶺にして僅かに一二町を登れば眼界忽ち開け一碧の相模灘寸眸に入り來りて蒼嵐翠雲亦脚下より起る誠に一世の奇觀なりとす

●大磯海水浴

大磯海水浴場は大磯停車場を距る南の方僅かに四五町の海濱に在り地は南に面して渺茫たる大平洋を望み右に伊豆の眞鶴ヶ崎、左に相摸の長鶴ヶ崎を擁して長汀之に連なり西に富嶽あり東に江ノ島あり、鐵道線路を隔て、北には高麗山、千疊敷山、泡多羅山などを稱する高丘連亘す、海濱は即ち古歌に小もるぎの磯と詠みたる名所にして奇岩汀に起伏し磯吹く風は青松を鳴らし岸打つ波は白砂を洗ひて蕭々また颯々たり、海水浴旅館は禰龍館、松林館、招仙閣、愛松園、太田樓等にして別に角屋、宮代屋、石井、青柳等の普通旅籠屋あり旅館は皆潮水を館内に導き一大温浴場を設けて客を浴せしめ又海濱には各々休息所を設け下帯、湯卷、麥藁帽子等を貸與し婦女童幼には附添人を出して水浴せしむ、禰龍館は去る明治九

年元の軍醫總監松本順翁が潮水の清良なるを見て此地群礁の間に水浴場を開きしと同時に有志と謀りて新築し浴客の宿泊に便ならしめたる高樓にして館内に客室數十を備へ別に數棟の離れ座敷を有し洋食和食共に容の好みに應じて調理す其の席料は室に依りて高下あり宿泊料は日本賄ひにて一日五十五錢(晝食共)但し毎歲十月一日より六月三十日迄の間は席料等に特別割引を爲すと云ふ、松林館は長者林の中にあり庭前松林の中を運動場となし二階あり離れ座敷ありて頗る廣潤、且幾百本の磯馴松は館を圍繞して一碧海と連なり冬寒からず夏暑からずして眺望亦絶佳なり同館定めて宿料は上等一日五十錢、並四十錢なり抑も大磯町は東海道五十三次の一にして古へより繁華を極めしが海水浴の設けありしより以來年を逐ふて一層繁昌に赴き今は戸數一千餘戸、貴顯紳士の別荘のみにても猶は三四十軒の多きに及べり、驛内に郡役所、警察署、區裁判所出張所、郵便電信局を始めしとし料理店、呉服屋、小間物屋、書肆、新聞雜誌店、

玉突、大弓店等ありて一として不自由を感せず且東京への交通汽車片道二時間の上に出ざるを以て夏季に至れば都人士先を争ひて此地に遊び爲めに頗る雑沓を極む、又驛の西端(停車場より七八町)に嶋立澤あり西行法師が「心なき身にもあはれは知られけり嶋立澤の秋の夕暮」と詠みたる舊跡にして西行堂には西行の像、虎子堂には遊君虎御前の像を安し其傍らなる休憩所嶋立庵にては客の望みに應じて西行の筆跡古杖其他の古物を一覽せしむ

●國府津海水浴

國府津は大磯より第二の停車場所在地にして東海道の國道に方り南は海に接し北は山を負ひ眺望もまた鴻ヶ沼、酒匂等に劣らず(新橋より下等汽車賃四十九錢)古しへは漁家のみ軒を並べし一寒村に過ぎりしも停車場設置以來箱根、熱海若くは小田原に赴く旅客は必ず此地にて下車する

事となりしを以て俄かに土地の繁昌を増し大に其の舊觀を改むるに至れり、此地に唐津と稱する小高き丘陵あり古へ親鸞上人唐土より一切經を携へ歸り船より上陸して暫く足を止めたる舊地なりと言傳へ茲に登臨すれば馳望快濶真に活畫に對するの思あるべし此地の海水浴旅店は鷲屋別莊及び國府津館等にして皆近年の新築に係り其の海岸を以て直ちに冷水浴場に充て館内別に内風呂の備へあり鷲屋方一日の宿泊料は一日三十五錢以上、五十錢迄にして又其座敷は一週間乃至一ヶ月の約束を以て浴客に貸渡す事もあり故に家族を携へて永く逗留せんとする者は第二の法に據るを善しとす、村の西北一里を隔て、曾我村あり曾我兄弟の木像、其他縁故ある古物を存すと云ふ又此地より箱根湯本に通ふ馬車鐵道あり汽車の着後十分間を隔て、發車し其の賃金は下等一人十三錢、中等三十錢上等五十錢、一輛借切は小の中等四圓、大の中等五圓五十錢、小田原まで下等七錢、上中等は總て湯本行の半額なり

● 酒 旬 海 水 浴

國府津より小田原に至る途中に酒旬村あり(國府津より人力車賃五錢)其國道より左へ入込たる處にある旅館を松濤園と云ふ青松そこ此處に生茂れる濱地七千餘坪を圍ひ込みて茲に十四五軒の別莊を建て價を定めて夏日逗留の客に貸渡す、其家は室數多きあり少きありて大小異なりと雖も一軒毎に臺所、湯殿、厩等の設けあれば家を擧げて出養生に赴むく人には適當の別莊なり又母屋には一大浴槽をえつらへ晝夜海水を沸して入浴に便し又料理の業をも兼ね客の好みに應じて調進す別莊の賃賃は其室の大 小等に依りて異なれども小なるものは一ヶ月七八圓、大なるものは同じく三十圓乃至五十圓なりと云ふ其の海岸の風景に至りては小田原、國府津等と敢て大差なきを以て故らに茲に贅せず

● 小 田 原 海 水 浴

馭者一鞭を加へて鐵道馬車を國府津より奔らすれば旅客は僅かに半時間にして坐ながら小田原驛に達す此地は大久保氏の舊城市にして戸數二千一百戸驛内に郡役所、警察署、郵便電信局等あり又舊城の北に小峯梅林あり驛の西端に松原神社あり、海濱なる伊藤伯の別莊滄浪閣に隣れる海水浴旅館を鷗盟館と稱し今は箱根塔之澤環翠樓の支店となれり、地は後に森林を負ひ前に大海を見晴し樓は頗る廣寬にして數十組の客を容るゝに足る同館の宿料は一日三十五錢以上七十五錢以下の定めなれども客の好みに依りては座敷のみを貸して自賄ひを許すと云ふ、此地の名物は虎屋の外郎、漬物、鹽辛等にして又通常の旅籠屋は中松屋專助、小伊勢屋佐兵衛、片岡永左兵衛門など最も名高し

● 道了權現

相模國足柄上郡關本の最乗寺境内に在り世に小田原の道了と稱し毎年一

月、五月、九月の廿八廿九兩日の縁日には近縣より參詣人群集し沿道各驛どもに頗る殷賑を極む、汽車の便に據らんとする者は松田停車場にて下車(松田より關本まで二里八町の間人力車を通ず)するも善けれども小田原より賽せんとする者は途を北に取り井細田、府川、塚原諸村落を経て關本まで三里の間人力車を驅り同所にて車を乗棄て立登り廿八町の阪路を攀づれば最乗寺の寺門に達す、當寺は曹洞宗にして應永元年の草創に係り本堂、開山堂等は其の結構頗る壯麗なり、其の左方觀音堂の結果門を入り右手の石階を躋りし處に道了薩埵殿あり佛體は古木の立像にして別に大天狗、小天狗を祭る、傳へて言ふ最乗寺開山了庵禪師の徒弟に道了なる者あり無雙の大力にして且神通あり最乗寺草創の時自ら大木巨石を運びて其工事を助け應永十八年三月廿七日了庵の歿する日に當り忽ち身を天狗に變じ永く山門を鎮護すべきことを誓ひ雲中に飛び去れり、境内には千餘年を経たりと覺しき老杉亭々として枝を重ね風致深遠にし

て頗る避暑に適す又山麓關本より明星ヶ嶽を踰え宮城野を経て箱根の宮ノ下温泉に出る徑路あれども嶮しくして車腕を通せず

●箱根温泉

前に記載せし如く旅客は國府津より鐵道馬車に乗り小田原を経て板橋、風祭、入生田諸村落の左を過ぎ行けば國府津より一時間にして湯本に達し朝日橋の左方に早くも温泉宿福住の西洋館を望むを待べし、箱根は古へ七湯の名ありしも今は涌口四五ヶ所を増して其數十餘湯となり又近傍に靈地勝區多し今麓の方より順を追ふて其案内を爲せば
●湯本温泉 は箱根群山の東麓早川の西岸に在り小田原よりの官道は茲より左に岐れ三枚橋を経て箱根驛に達し七湯路は早川の左の岸に沿ひ右の方に登り行くものなり温泉は湯坂山の麓岩石の間より湧出し其色透適りて水昌の如く唯だ少しく鹹味を帶るのみ温泉宿福住九藏、小川萬右衛門

の兩家にては内湯の設けあれども他の宿屋にては小川の家の後に在る總湯を用ふ其質は少量の鹽分を含むのみにして化學上の成分甚だ少なく殆ど通常の眞水に異ならねば病を養ふには効驗多からねど温泉は浴槽を溢れて清潔なると云はん方なく且之に伴ふに山明水媚の眺めあり凡そ箱根七湯の内蘆の湯を除くの外は孰れも單純泉なれども山を登り行くに隨ひて其の含有物多さを加へ底倉に至れば純然たる鹽類泉とはなれり福住は名ある舊家にして家の構へも亦廣く小川は日本造りにて其の構造は稍や福住に劣れり概して言へば福住は紳士貴婦人の宿泊するに適し小川は中等以下の人々の逗留するに宜し、今や兩家の宿料を較ぶれば福住は之を紫紅雪月花の五等に分ち一等(紫)は一日三食及び夜具雜費とも一人一圓、二等八十五錢、三等六十五錢、最下等と雖も一日卅五錢の外に猶ほ相當の座敷料を要すれども小川は一日五十錢を以て上等の賄ひとなすど聞けり個は重に其食類の如何に依りて等級あると勿論なれども兩家品格

の上より又幾分か此差を生ずる事もあらんか又先年此地に湯本電燈會社なるものを設立し早川の水力を利用して機械を運轉し以て電燈を點する事とし箱根山中に一小不夜城を現出せしは亦た偉觀なり、湯本より總湯の傍らを過ぎ少しく阪道を登りたる湯阪山の麓に瀧ありて名を玉垂と云ふ岩角に觸れて水は幾重にも折れ段々に落ち來るさま最と面白し彼の七湯志に故正兄翁が渾々の名を負はしたるは此瀧の事にや又湯本臺に正眼寺といふ寺ありて曾我兄弟の位牌を安置すと言傳ふ、之を道中雙六に比すれば湯本は振出しの地に當るをもて今ま各地への里程並に人力車賃等を掲げて讀者の便覽に供ふ

塔之澤迄	五丁	人力車一人挽	金五錢
堂ヶ島迄	一里半	同	金二十五錢
宮ノ下迄	一里半	同	金二十五錢
底倉迄	一里廿二丁	同	金二十八錢
木賀迄	一里卅二丁	同	金三十三錢

小涌谷迄	二里	駕籠賃	金六十錢
蘆ノ湯迄(新道)	三里二十丁	同	金八十五錢
箱根驛迄(國道)	二里廿八丁	同	金七十錢
姥子迄	四里廿二丁	同	金………
大涌谷迄	三里卅二丁	同	金………
乙女峠迄	四里二十丁	同	金………
小田原迄	一里廿二丁	人力車一人挽	金十五錢
國府津迄	三里	同	金三十錢

●塔之澤温泉 湯本より早川に沿ひて登ると僅かに五丁にして此地に出づ塔之澤は元と東之澤と呼びしものによ七湯志には東之澤今は塔之澤と書すと見えたり早川は地の中央を貫きて玉ノ緒橋は其の上に横たはり四面には岩山聳えて宛然巖の屏風を立て廻したるが如し塔之峯の麓萬緑叢中に一點の白壁あるは耶穌教會堂にして玉ノ緒橋の傍らに在る小丘は即ち勝驪山なり個は其の景色唐の山驪に勝れりといふ者のありければ舜水やがて筆を採りて勝驪山三字の額を書したる事ありと言傳ふ温泉は執

れも湯阪山の麓又は勝驪山の傍らより湧出し其泉質は少量の鹽分を含む
 と猶は湯本の湯の如し温泉宿は玉泉樓(堀貞藏)玉、湯(福原遠藏)環翠樓
 (鈴木善左衛門)一ノ湯(小川鎌太郎)藤屋(安藤徳治)福住樓(長谷川まつ)
 の六軒にして各々内湯の設けあり玉ノ湯は元と子安なにかしの所有なり
 しが今は福原の持となり平山某其店を預かり旅館は半ば西洋風の建築に
 して重に外國人を客とす、一の湯は其名の如く此地の舊家にして玉ノ緒
 橋を渡りて右に在り其左にあるものは鈴木にて伊藤春畝翁去る明治廿三
 年此家に宿りし時環翠樓の三字を書して主人に與へしより終に樓號とは
 なせしとぞ其他藤屋、福住樓は皆な七湯路の右側に在り此地近來客多く
 常に繁昌を極むるは温泉宿孰れも業を競ひて旅客の費用を低廉にするが
 故にして湯本に泊らんとする者も多くは茲に來り宮ノ下に赴く者も亦態
 々下りて茲に宿りを求むるとありと聞けり去れど开は只だ費用の一點に
 のみ拘はる事にして若し景色眺望の上より云へば塔之澤は堂ヶ島と伯仲

の間であり殊に外國人の如きは早川の水音響として枕に響くを厭ふ事
 あり今また塔之澤温泉の由來を聞くに一説には慶長年間阿彌陀寺開山彈
 誓師秋山道伯なるものと謀りて茲に温泉浴場を開きしと云ひ又寛永七年
 今の一ノ湯の元祖小川宗益熊野權現の靈夢に感じて始めて温泉場を設け
 しとも言傳ふ後の説は貞享元年金湯山端巖和尚小川宗泉の需めにまかせ
 自ら筆を染めたりと聞えし塔之澤温泉の記と云ふ卷物の文に依りしもの
 にて宗益は元と北條家に仕へて弓箭を携ふる身なりしが聊かの事より浪
 々の身となり年久しく湯本の里に住ひぬ寛永の庚午十月八日不思議に靈
 夢を感じ來つて此處を見るに老樹翁鬱として猪猿の類處得顔に遊び一朝
 にして村を爲し難さを知り歸りて石川了江に謀り木を伐り石を運びて地
 を拓き一の茅宇を造りて居る程に温泉其後ろに湯出たり即ち最初なる故
 に一ノ湯と名づく十三日を経て了江も亦來りて此處に住む云々此の卷物
 は今猶は一ノ湯小川鎌太郎の家に秘藏すと云ふ昔は兎もあれ今は家數三

も鹽類泉なり今ま三日月の湯の分析表を掲ぐれば左の如し

宮ノ下三日月の一リートル中の成分

硫酸那篤留母	〇、〇六五六	格魯兒那篤留母	一、五八八八
格魯兒加留母	〇、〇〇五二	格魯兒麻留母	痕 跡
硅 酸	〇、一二六二	炭酸亞酸化鐵	同
炭酸加爾叟母	〇、一八二八	炭酸麻留留叟母	〇、〇六二二
硫酸加爾叟母	〇、〇二五二	硫化水素	〇、〇〇一七
燐 酸	痕 跡	礬 土	痕 跡
固形分合計	二、〇五六八五		

温泉宿の浴室に引けるは重に此の三日月の湯と明治の湯にして浴槽は微熱、温度、微冷の三個に分ち奈良屋には別に湯瀧水瀧の設けあり、此地より近傍への里程を云はゞ堂ヶ島へ五町、底倉へ三町、木賀へ十町、小涌谷へ十六町蘆の湯へ一里二十六町其他上の方への分は概ね湯本の部に記載せる里程の内より一里半を引去りたるものと知るべし、又人足賃は小涌谷へ八錢、蘆の湯へ廿五錢、乙女峠へ往復五十錢、箱根驛へ卅七錢、

同じく大地獄廻り五十錢、駕輿賃は人足賃のおよそ二倍なり
 ●底倉温泉 底倉は宮ノ下の町續きにして東北は狭く東西は稍や廣く北は早川を隔て、明星ヶ嶽を望み南は蛇骨野小地獄に連なり西は蛇骨川の崖に接し宮ノ下堂ヶ島は共に底倉村の一郷なりとす蛇骨川は萬年橋の上の方より瀑布の形ちを爲して流れ來り其末は早川に合す温泉は其の上流なる岩石の間より滾々として湧き出し神靈湯、萬壽湯、靈仙湯等の區別あれども其成分は何れも硫酸の二質より成りて略ぼ宮ノ下の湯に同じ温泉宿は梅屋牧太郎、仙石屋丈助、萬屋さくの三軒にして宿泊料は一日一人に付二十五錢より五六十錢までの間に在り、蛇骨川の上流の地僅かに二三尺を穿てば白色にして蛇の骨に似たる奇石を得るとありとて何時しか之を蛇骨川と稱ふ此川に架したる萬年橋を渡り木賀への舊道に至れば右に白鷺の瀧を望み其傍らは大崗風呂あり傳へて言ふ昔し豊臣秀吉此の温泉の奇効あるを聞き石風呂を設けて朝夕に浴し以て戰勞を慰めたりと故に

今猶は大岡の石風呂と稱す又底倉記を按ずるに往昔新田義隆義兵を奥州に擧げしも相馬の爲に破られて戦ひ利あらざりければ僅かに二三の郎黨と共に一方を切抜け辛じて箱根に來り身を木賀に潜めて時の到るを俟けるに創傷の痛み再發して殆ど難儀に覺ければ底倉の温泉奇効あるを幸ひに日々此地に通ひて湯治を怠らず漸くにして痛みも癒えける折しも密告者の爲めに撃手を差向られ義隆は郎黨と諸共に終に討死せしとなん今人公の忠死を憐み近ごろ公の履歴を著はして其功を頌し又底倉に一基の記念碑を建て、其靈魂を慰さむ、此地は去る明治廿六年の春出火して温泉宿其他の民家悉く焼失し今あるものは爾來新築せしものなり、又此地より小涌谷及び蘆の湯に赴くべき道あり又木賀への新道は早川の西岸に在り舊道よりすれば途少しく遠くして且嶮惡なれども其の途中見晴しの茶屋に出て巒峯の伏せる様溪流の蟠まれる趣きを眼下に下瞰すとを得べく風景また絶佳なり

木賀温泉 底倉を距ると八町ばかりにして木賀に出づ木賀は海面を抽くと一千七十尺早川の西岸早雲山二ノ平の東の麓にあり早川は宮城野村より來り此地の前を過ぎて南に流れ屈曲して東に下る、不動の瀧は二ノ平村の道に迷しり辟邪泉は温泉場の横手に流れ其水合して早川に入る温泉宿は龜屋新太郎(神代樓)伊勢屋増右衛門の二軒にして別に底倉梅屋の支店われど個は盛夏の時のみ店を開きて客を迎へ其他の時季には戸を銷して家人は皆な底倉の本店に移り住ふといふ此地も亦先年祝融に罹りて温泉宿は皆新築なり、龜屋の宿泊料は一日七十五錢より四十錢までなりとぞ、茲より蘆ノ湯まで里程一里半、駕輿賃は三十錢往復五十錢なり
蘆ノ湯温泉 は七湯中最高處にあるものにして海面より高さ凡そ二千七百六十尺其の位置も亦大に他の六湯と違へり地は駒ヶ嶽神山の東の麓二子山の北に在りて東北は稍や開けたれども西南には峯巒集まり來りて硫黄山、死出の山、火ともし山等其裾に起伏す硫黄山は蘆ノ湯を距ると

十二町ばかりの處に横はり土塊多く硫黄の氣を含み岩の間に於て自然と燃え上り硫氣は再び地中に入る蓋し蘆ノ湯の泉源なるべし又湯の花澤は硫黄山を距ると北四五町に在り小さき溪の流れの中諸處にぬるき温泉湧出す里人之を水流の稍や平かなる處に堪へ藁を入れて之に硫黄を澱着せしめ搾りて硫黄土を取り又乾かして樽に詰め四方に運びて之を鬻ぐ所謂湯の花是なり木賀より蘆ノ湯までの山道は登るに随つて峻しく殊に七曲りと稱ふる處は屈曲七八回登るに苦しむ程の難處なるが此阪を登り詰れば漸く廣き高丘に出づ其南は二子山にして北は宮城野二の平及び小地獄の平原を見晴し東は鷹巢山、火どもし山の餘脈箱根官道の峯に連なり小田原の海岸を隔て、江ノ島、三浦岬等を雲烟模糊の間に認め其の景色さながら一幅のパノラマに似たり、茲より西に折れて行くと四五町即ち蘆ノ湯なり温泉宿は紀伊國屋儀三郎、松阪屋萬右衛門の兩家を以て最とし客室各々三四十を備へ和洋二様の割烹を調のへて客を待つ其宿料は洋食

賄ひの方一日凡そ二圓五十錢、日本風の旅籠は凡そ三十錢以上一圓以下なれども客の好みに應じ何品にても別に料理して其膳に上すと甚だ自由なり其他の温泉宿には吉田屋國三外二三軒ありし様に覺ゆれど其の屋號等を記憶せず、鑛泉は多量の硫黄を含むものにして泉質は他の六湯と同じからず蘆ノ湯に近づけば早く已に硫黄の匂ひ鼻に入り道にて入浴者の歸るに出で逢へば又硫黄の匂ひを感ずる程なり故に病症に依りては蘆ノ湯こそ特に効驗あれとて求めて此地に赴く者も多けれど所謂通り一遍の避暑客は土地の僻なると硫氣の強さを嫌ひて茲に足を留むる者少なし今文紀伊國屋に引ける蘆ノ湯鑛泉の分析表を掲ぐれば

蘆ノ湯温泉一リートル中の成分

硫酸那篤個母	〇、一、一、三	硫酸加爾叟母	〇、二、一、九、五
硫酸加個母	〇、〇、一、八、〇	重碳酸加爾叟母	〇、〇、一、五、〇
重碳酸麻個叟母	〇、一、二、五、五	硫化安謨紐母	〇、〇、一、九、二
硅 酸	〇、一、六、〇、〇	游離硫化水素	〇、〇、三、一、八

游離炭酸	〇、一〇八八	格魯兒	痕跡
次亞硫酸	少	攀土	少量
鐵	痕跡	有機物	稍多量

固形物合計 〇、六一二〇瓦

其の効能は僂麻質斯、皮膚病、經久頑固の汎發微毒、全身多血、鉛水銀等の慢性中毒、子宮及び卵巢の慢性加答兒、萎黃病、依卜昆侄里、喜斯底里等に宜しく咽喉及び氣管支加答兒等には吸入法を用ふるも亦可なりと、蘆ノ湯より國道畑宿を経て湯本まで里程一里廿八町途嶮しく殊に瀧阪は頗る嶮阻なれども下りは歩行くともさのみ疲勞を覺えず又箱根驛に至る一里二町、途は駒ヶ嶽と二子山との間を行く其の勾配湯本道は終には嶮しからず途中に曾我兄弟及び遊女虎の碑あり右手に多田滿仲の墓あり又行くと數町にして右に精進池、左に慈池を望む此邊昔しは賽の河原と稱へ路の傍らに二十五菩薩の地藏を安置せしが今は唯だ其一を遺すのみ進んで慈池の邊に至れば俄然として右に一面の綠水を見る即ち箱根の

湖水なり塔ヶ島の離宮は綠樹の間より影を漏らして眺望亦頗る佳なり
 ●小涌谷温泉 ●七湯の外箱根に新温泉場三四ヶ所ありて小涌谷も亦其一なり小涌谷は宮ノ下より十五町蘆ノ湯道の途中小地獄山の麓に在りて鑛泉は蒸氣の沸騰する如く小地獄山の半腹より湧揚るものを取り樋にて之を浴槽に導き其の湧口には屋根を蓋ひて人を近づけず泉質は多量の硫氣と鐵分を含み僂麻質斯、貧血症等に効ありと云ふ温泉宿は開化亭星野常次郎及び三河屋恭三の二軒にして開化亭には西洋室もあり外國人の來り泊するに差支なし○其他仙石湯、姥子、新湯等もあれど途嶮しく地僻なる上に温泉宿も亦多くは狹隘にして且つ清潔ならざれば都人士の杖を曳くものは至つて少なく唯だ近郷の農民等耕しのいとま來りて浴するのみ、右の内仙石湯は大地獄の山中に在り浴場二ヶ所之を上湯下湯と云ふ、姥子温泉は冠ヶ嶽の西北大地獄山の西端にありて海面を抽くこと二千八百二十尺其の道順は木賀より宮城野に出で仙石原を経て姥子に至る凡そ一里

二十町、底倉宮ノ下よりは二ノ平より大涌谷(大地獄)を経て此地に到る凡そ一里半兩道とも孰れも嶮惡にして尋常浴客の到ると甚だ困難なるべし又姥子より湖尻の新湯まで凡そ十二町新湯は箱根湖の岸にあるをもて茲より小蒸氣船に乗り湖水を横ぎりて箱根驛に到るもよし汽船賃は一人に付三十七錢五厘なり、借例に依り箱根近傍の名勝を擧ぐれば

●大涌谷 昔しは大地獄といふ冠ヶ嶽北の崖の中腹より起り東南は劍ヶ峯早雲山、西北は大地獄山の間を通り北に流れて早川に入る所の大なる澗谷の總稱なり谷の中央より頂上に至る凡そ十二三町ばかり處々に硫氣燃え熱泉迸しりて所謂「ソルフアメラ」なるもの多く溪の流れは皆な温泉となり其近傍は悉く赭土色の焦石にして草木は枯れ萎み地皮はグザクとして軟かく試みに杖もて地を突くときは容易く二三尺の深さに入り地下の焼土鎔解して突穴より蒸氣を噴出す蓋し吾が地球の尙ほ鎔融の状態なりし時表面のみ纒かに凝固して地面に薄皮を結べる有様を目前爰に見

るかど疑はる殊に降雨の後には地皮更に脆くなりて若し過つて之を踏破る時は半身焦十の中に埋められ焼け死する者時々あり牛ながら焦熱地獄の苦みを見る事あるをもて借は大地獄とは呼做しけんいとく危ふき地なり、其間にある狭き山道は底倉より二ノ平を経て姥子に至る通路なりまた大地獄谷の頂水を閻魔の臺といひ之に登れば一の眼界を遮るものなく眺望頗る快豁なり

●早川 此川は水源を箱根の湖に發し仙石原の平原を北に向ひて流れ次で東に折れ左は金時山、明星ヶ嶽、明神ヶ嶽、塔ヶ峰、右は冠ヶ嶽、早雲山、小地獄山、鷹巢山、城山、湯坂山等の間を潜り水路凡そ五里許り早川村に至りて小田原の海に入る早川の兩岸は懸崖絶壁屏風の如く立ち連なり水勢は石に觸れて其音淙々たり故に早川といふ又一に荒川といふ新選六帖に「早川の瀬ぎり危ふき船渡りそがひに向へ道遠くとも」と詠みしも亦此川の事なるべし而して箱根の温泉は蘆ノ湯の外は皆な此川の南岸

にありて湯本の朝日橋、塔之澤の千歳橋、玉の緒橋等は皆な早川に架け渡せるなり又浴客徒然なる儘に絲を垂れて此川の小鱼を釣るに香魚ハヤなんどの獲物最と多き時もありとぞ

蘆湖 一に鑲字池と云ふ箱根湖水の事なり、日本地誌提要に據れば蘆湖は相州足柄下郡箱根山頂に在り東西二十町十五間南北一里二十三町、周圍四里三十町五十九間半、深さ四十六仞其の下流を早川と云ひ東流凡そ五里小田原に至り海に入る云々、其形ち瓢の若くは底は南に向ひ帯の方は北に向ふ冠ヶ嶽、駒ヶ嶽は東の岸に峙たち西は遙かに芙蓉の峯に對し北は近く金時山に接す東南の隅に少許の平地を遺し茲に箱根驛及び元箱根村あり又箱根離宮は湖面に突出せる塔ヶ島の丘の頂上を闢き茲に西洋風の御殿を建築せられしものにて湖邊に一つの景色を添へぬ

元箱根村 是權現阪の西蘆湖の東の岸にありて人家凡そ三十戸ばかり藁屋根は雨に朽ち板庇は月を漏らして其様いたく衰へたれども天然の景色

は其めぐりを粧ひて古雅愛すべき所あり夏に至れば脚氣患者此村に來りて療養する者多けれと食類自由ならず且清らかなる座敷に乏しとて永くは留まらずと云ふ此地に取りて誠に遺憾き事にこそ

箱根權現 蘆湖の東の岸駒ヶ嶽の南の麓にあり元箱根村より湖岸に沿ふて行くと六町許の處より更に石階を踐みて上る社は瓊々杵尊、彥火々出見尊、木花開耶姬尊三體を祭り天平寶字元年萬卷上人靈夢に依りて勸請する所なり代々の天皇屢々幣帛を奉つり英雄豪傑の士多く表矢を獻じ往昔は甚だ壯嚴の社なりしが今は大に神さびて社も亦頽敗せり是より湖涯に沿ひて湖尻に至る凡そ五十町道路は駒ヶ嶽神山冠ヶ嶽の東麓をよぎるものにして狭けれども峻しからず又湖に舟をやりて湖尻に至る水路一里半、岸には奇巖苔蒸し葛纏ひ老樹の水に臨んで將に倒れんとするもの巨石の落ちんとして漸く木の根に支へらるゝもの等看來り看去れば眸も爲めに忙はしく宛然景色の走馬燈に對ふの思ありては其の實況一々口の

よく言ひ筆のよく盡す所に非ず
 箱根驛 権現阪を下り塔ヶ島離宮の前を過ぎて此驛に至る驛は蘆湖の東
 南にありて戸數凡そ二百戸古へは人馬絡繹として織るが如く東海道中繁
 華を極めたる驛路なりしも今は大に衰へて古杉森々時を得顔にはびこる
 ものゝ如し去れど風色は猶ほ昔しの趣きを棄てず風靜かに波穩やかなる
 の日は富士の嶺遙かに湖南に映じ宛も湖中逆しまに立つが如き事あり之
 を箱根の倒富士といふ宿屋は土生屋四郎右衛門、石内彌平太最も大きく
 就中土生屋は園内湖に枕みたる處へ近頃高樓を新築し景色を簷のうちに
 集めて之を三景樓と名づく若し一々其勝をかぞへなば眸に入り來る風物
 は僅かに三景に止まらざるべし土生屋の宿泊料は一日卅錢より五六十錢
 までにして別に西洋料理をも鹽梅す
 湖尻 蘆湖の北端にあり東は仙石原の平原に連なり東南に冠ヶ嶽屹立
 し西北に金時山雲間に聳ゆ金時山の南峯少しく平かなる處を乙女峠とい

ひ駿河國駿東郡御殿場に通ずる道路は即ち此時をよぎる(乙女峠より御
 殿場まで里程一里二十町)又湖尻より姥子温泉に至る十八町湖尻にある
 一小温泉場を新湯といふ此處より箱根驛に通ふ小蒸氣船の賃金は前に記
 せしが日本の渡船を雇ふも亦自由なり
 乙女峠 仙石原より西の方二里の處に在り仙石原より一里半の處より嶮
 しき九折の山路を攀ち上り十七八町にして峠の頂上に出づ西には駿河駿
 東郡の平原を眺め其前に富嶽の元として雲間に聳ゆるを看る風景頗る宜
 し箱根より富士山に登るは此時を越ゆるを常とす
 箱根の名産は挽物細工及び寄木細工なり世に湯本細工といふは往昔東海
 道の往來盛んなりしころ里人之を湯本の茶屋に持て行きて鬻ぎしよりさ
 では湯本細工とは呼ばれしが今は此店却て宮ノ下に多く且近來外國人の
 此地に遊ぶ者多ければ其好みに投じ緻密の寄木もて食卓、書棚、衝立な
 どを製するに皆な極めて精巧なり

●熱海温泉

箱根七湯を巡りたる後ち更に一遊を試むべき温泉場は熱海なり箱根驛より十國峠を経て此地に出るの山道もあれど茲には先づ其の地理より説出すべし、熱海町は元と湯元村又は磯山の里と稱し伊豆の國賀茂郡伊豆山の南日金山の東の麓に在りて即ち静岡縣の管下に屬す三方には山を環して北風の寒さを防ぎ東南には海を扣へ濱風そよくと吹て心地爽なれば熱海のみは夏冬共に湯治に宜し彼の秋風木の葉を散らす頃となれば湯戸孰れも戸を鎖して空家となるが如き山奥の温泉場とは自から異なり今ま熱海温泉記を按ずるに仁賢天皇の四年蚊島穗弁君罪ありて獄死す然れども逆鱗猶未だ止まず其屍を豆州熱海の海底に沈めしめ給ふ此時始めて海中に熱湯湧出して魚鱗介甲皆な爛死す其後ち天平勝寶元年己丑箱根山金剛王院の第四祖萬卷上人斯る靈湯の空しく海中に流散することを惜み

且鱗介の之れが爲に爛死するを憐れみ其の泉脈を尋ねて之を山腹に移し其傍らに少彦名神を祭り薬師佛を本地として湯前権現と稱す此泉は即ち今の大湯にして権現の社猶は存せり云々、凡そ里俗に傳ふる神社佛閣等の由來には怪しき事のみ多ければ此説も亦信するに足らねど兎に角其起原は古きものに相違なし然はあれ今の熱海は昔の熱海に似ずして昔の繁昌は今の繁昌に及ぶべくもあらず開けゆく世の様は碧海桑田も物かは今は三層四層の高樓建ち續き耕地九十町餘、宅地十二町餘、戸數は實に五百戸以上に及び其町を本町、中町、濱町、新宿、荒宿、横町、新横町、坂町、小澤、崎見町、上宿、野中、横磯など、稱へ村内に離宮あり郵便電信局あり警察署あり銀行支店あり其他西洋料理、蒲焼屋、蕎麥屋、汁粉屋、大弓、楊弓、玉突場、借馬、貸本屋、新聞縦覽所等もありて旅客消閑の具には差支なき有様なり、或人の曰く熱海は避暑よりも避暑に宜し故に遊山半分の湯治客は夏日熱海に赴く者甚しと夫れ或は然らん併し

ながら此説は冬季此地の意外に暖かなるを見て此の割合ならば夏季は定めて暑からんどの想像に過ぎずして實際は三伏の日と雖も猶ほ東京より寒暖計は二三度の下にあり盛夏の候と雖も常に此地に浴客の絶えざるを以て其證とすべし、此地への道順を記せば國府津停車場より里程凡そ八里二十町此内小田原迄の間は鐵道馬車の設けあり夫より人力車を僦ひて小田原を發し早川、石橋、米神等を過ぎ凡そ四里にして吉濱に達す（二人曳人力車賃凡そ七十錢）其の途中は阪路曲折して山の腰を繞り東に海を望み風景稍や佳なり吉濱より熱海まで三里の間は本年開設せる人車鐵道なるものあり一時間にして達すべし尙ほ此鐵道小田原まで全通するに至らば旅客に取りては此上なき便利ならん、偕熱海の景色を云へば東南海を隔て、房總の遠山雲と聯なり海上三里の處に初島ありて其形小龜の脊を池の面に浮べたるが如し左に伊豆山横磯を望み右には魚見岬を隔て大島火山の煙を吐くを認め後には日金山高く聳えて北風を防ぎ山海の

眺め共に見るべきものあり且土地は濱邊より爪先上りにして客舎は層一層より高きを以て此の景色は孰れの温泉宿に到るも其の樓上より眺め得べし熱海温泉宿は

- 一等温泉宿 石渡喜一(富士屋) 石渡要作(相模屋) 世古六之助(眞誠社)
- 二等温泉宿 樋口忠助(氣象萬千樓) 須田藤次郎(大光館)
- 三等温泉宿 鈴木良三(鈴木屋) 杉崎富八(阪口屋) 露木準三
- 野村新兵衛(小松屋)
- 野村庄左衛門(尾張屋)
- 内田市郎左衛門(古屋)
- 大木圓藏(高砂屋)
- 野田總八(隱居玉屋)
- 野田敬助(鱗屋)
- 野田總八(隱居玉屋)
- 藤井文次郎
- 山田發朗(新鈴木屋)
- 浦井龜吉(新玉屋)
- 野村峯太郎
- 加藤半七(登倉屋)
- 松尾宗兵衛(福島屋)
- 野田宗助(中玉屋)
- 山田藤吉(升屋)
- 二見半右衛門(釜鳴屋)
- 芥川九右衛門(伊勢屋)
- 鶴澤莊吉(東屋)
- 野田久七(角玉屋)
- 鶴澤たい
- 六等温泉宿 渡邊徳右衛門(松屋) 米倉三右衛門 水谷佐助(坂本屋)
- 上杉鐵次郎(永樂屋) 福井善四郎 根本總右衛門
- 小倉清助(丸屋) 秋田松次郎 岩木吉五郎

の三十七軒にして富士屋は本町を隔て、左右に本家別荘あり、相模屋は上町大湯の傍らを温泉寺の方へ曲りたる處にあり、眞誠社は本町より小澤町の方へ曲りたる處にありて共に二層三層の樓を備へ客室皆な清潔にして紳士貴婦人以下の宿泊に適す、樋口は西洋風日本風兩様の建築にして半は外國人の宿泊に便す温泉は孰れも温、熱の二槽を備へ樋口の如きは別に蒸風呂の設けあり、浴客逗留の費用は座敷食物等の如何に依りて固より一定し難けれども其の食物の詭へ方に凡そ三ツの方法あることを知らざる可からず其の第一を自賄ひと云ふ客人自ら食物を調へ又は下婢を雇ひて調へしむるなり、第二を伺ひと云ふ客舎より三度々々調理すべき食物を客人に問合せ其好みに應じて調ふるが故の名なり食物に好嫌ある人又は毒立ある人は面倒と入費の嵩む憂はあれど先づ此二ツの中を擇まざる可からず、第三を宿賄ひと云ふ一日の賄料何程と定め客舎の見計ひを以て適宜の食物を調ふると猶は通常の旅籠屋の如くするものは是なり

故に通り一遍の避暑客は此方法に據るを常とす、第一の方法に據りて下婢を雇ふ時は之に食物を與へて一週間三四拾錢の給料を取らすれば毎朝來りて夕刻まで親切に諸事を辨ず又第一第二の仕方なれば食料の外に座敷料、炭油料、湯錢等を客舎に拂ふものどす座敷料は其席の大小陋美等に依りて差異あれども一週間凡そ五十錢より三圓迄を限りとし夜具損料は一組一夜四錢より十錢まで絹夜具は十五錢以上廿五錢迄を限りとす

●大湯 熱海には昔し七湯と稱へて湯口は大湯、清左衛門湯、小澤湯、河原湯、左治郎の湯、風呂の湯、中野の湯等の七ヶ所なりしが海岸田園いづこにても少し深く地を堀れば温泉忽ち湧出づる所なれば其後追々温泉の數を増し今は二十餘ヶ所となりしと云ふ其中にて珍らしく且面白きは

大湯にて晝夜三たび時を違へず湧き折々長湧する事もあり長湧の時間は概ね十二時間にて例へば午前五時に湧出れば午後五時に止み是より又十二時間の長休ありて一滴も湯を出さず翌日より湧出すると稍々平日の通

りとなれども湯の量は多からず漸く四五日を経て始めて常に復すとぞ其湯の湧出る時の有様を云へば始めは墨石の間に蟹などの泡を吹くが如くブツ／＼と温湯滴り出で遂に沸騰する時となれば宛然數臺の大唧筒にて灑ぎ出すが如く蒸氣と共に熱湯迸しり出で、近邊には熱き雨を降らすなぞ其勢ひのすさまじく其響の物凄きと云はん方なく近づきて見る事も出来ぬ程なり故に人の近寄りて怪我する事のなき様湧口の四方には鐵柵を結ひ廻らして用心となせり又温泉宿は多く此の大湯を樋にて風呂場に導き之にぬる湯を加へて浴を取らしむるやうに爲したり其中には尾張屋の湯、榊屋の湯、玉屋の湯、伊勢屋の湯など、稱へて内湯のみを用ふる温泉宿もあれど其の成分は大湯と似たるものなれば茲には大湯の分析表のみを掲げんに

熱海大湯温泉一リートル中の含有成分

格魯兒那篤母

三、七九〇〇

格魯兒那篤母

二、三三三〇

格魯兒那篤母	一、八一〇〇	格魯兒那篤母	一、七六七〇
硫酸石炭	〇、一九三〇	重炭酸石灰	〇、〇〇四二
重炭酸化鐵	〇、〇〇三一	硅酸	〇、〇〇一〇〇
第一格魯兒那篤母	痕跡	有機物	痕跡
第二格魯兒那篤母	同上		

固形分合計 一〇、〇二〇三瓦

右は所謂食鹽泉と稱ふるものにして其の効能は胃病、腸加答兒、肝臟病、腺病、氣管支加答兒、子宮病、脚氣水腫等に宜しく其内にては胃病、咽喉及び氣管支加答兒、子宮、傷風、鬱憂の症等には浴用の傍ら此の温泉を飲用して効ありと云ふ

● 噲氣館 大湯の傍らに噲氣館なるものあり故大相國岩倉公噲氣の患者に効あるを察し官僚と謀りて建設せしものにして元の衛生局長長與專齋、故御料局長肥田濱五郎の諸氏専ら事に從ひ明治十八年二月始めて此館を開く噲氣場は其の建築最も壯麗にして場の中央に機關を設け大湯

授翁宗弼和尚即ち萬里小路藤房卿の開基にして寺内に卿の手づから植ゑたりと言傳ふる古松あり其枝四方に廣がり幽翠人を襲ふ庭前に開祖の碑あり、横磯は市街の東北端に斗出せる海濱の名にして此地夏季に至れば海水浴を爲すに宜し其濱邊に一軒の海水浴場ありて客に浴衣下帯等を貸與す、初島は海上三里を隔てたる一孤島にして人家四十二戸を有す島民は皆な質朴にして重に漁業と農業とに従事す古來の制規にて島中の家數之より増すとを許さず故に人口割合に多し鎌倉右大臣が「管根路を我越え來れば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ」と詠せしは則ち此島の事なり、錦浦は念佛山の麓を廻れる海岸の總稱にして魚見崎より錦巖まで海上半里舟にて到るべし絶壁の下奇巖突兀として連なり俗に兜岩、烏帽子岩、碁磐石、霞石、五色石、胎内寶、狗寶等の名あり殊に奇觀なるは窟の觀音にして潮干の時内に入れば窟廣くして中に白色の蝙蝠棲み其の盡處に觀音の石像を安す又其隣の洞を錦巖といふ早朝此洞に入れば旭光岩

壁に映じ海水に反射して其色錦の如し故に採りて以て此岸の總稱とはなせりと、魚見崎は錦浦に到る途中海上に斗出せる岬の名にして横磯と相對して灣形を爲せり岸頭に一茅屋ありて茲に番人を置き魚の集まり來る毎に之を漁船に報せしむ故に此名あり、和田山は熱海の南方に蟠まれる兀山の名にして其麓に和田村あり山中秋は初茸を産し冬は其頂さに登りて雪中の景を賞する者多し

伊豆山 伊豆神社の在る處にして熱海の北十八町小田原道の傍らより左に登るなり伊豆神社は元と走湯山東明寺と稱し上下の二宮及び三千の支坊を領せし關東の總鎮守なりしが中古より漸く衰頽して今は僅かに上ノ宮のみを存す其邊老樹蒼鬱甚だ幽靜の境にして古へ古々井の森の名あり又石階を下りて海濱に到れば此地所謂伊豆山温泉場にして相模屋、江島屋、中田屋等の温泉宿あり温泉は明礬と硫黄とを含み高さ處より落ちて湯瀧となる走湯即ち是なり此地は東に總房相の峯巒を望み南に大島以

下伊豆の諸島を水天鬚鬚の間に眺め其の景色をさく熱海に譲らず且其の距離も亦遠からざるを以て熱海に逗留する浴客も亦散步かたど必ず此地に來りて一浴を試むるを常とす、以上凡そ熱海の實況を述べ盡したれば是より三島、箱根等に赴く里程を記さんに熱海より日金山の絶頂十國峠を経て箱根驛に到る里程五里（駕籠賃壹圓廿錢）道險しくして其幅も亦三四尺に過ぎず夏は茅萱いやが上に生茂りて歩行頗る困難なれども十國峠の絶頂に到れば眼界忽ち開け馳望千里眼中に一の遮蔽あるを見ず真に十國の名に背かずして海内の絶觀なり去れど夏は毒虫多く雨中は山蛭多くして往々人を害す宜しく心を用ふべきなり、熱海より十國峠の嶺續き宇熱海峠を越え輕井澤、鬢ノ澤、平井を経て三島驛まで里程凡そ五里（駕籠賃一圓二十錢）輕井澤より向ふは下り道なるを以て人力車を通ず其の街道より南へ十町程も入込みたる田方郡丹那村に鷓鴣石あり音聲此石に響くと宛然鷓鴣の人語を真似るに似たるが故に名とす此街道は縣道

なるを以て道幅の廣きと十國峠道の比にあらす絶頂よりの遠望も亦敢て十國峠に譲らず其景色真に畫圖の如し、又修善寺へ赴くには平井より岐れて南に入る其の里程熱海より八里餘なり其他の里程を記せば伊東まで五里、網代港まで二里、湯川原まで三里十七町、吉濱まで三里にして伊東、網代へは舟にて到るべし

● 伊 東 温 泉

伊東村は熱海より南五里伊豆郡の東岸に在る一聚落にして其大字を松原、湯川、岡、鎌田、新井、竹内、和田の七村とす、熱海より陸路此地に赴くには和田、多賀、新浦、和田木、宇佐美等を経るの順序なれども其道路は海岸の山腹を開きしものにて高低均しからず且途中一二峻阪の横はるありて人力車を通せざれば寧ろ最初より下田港通ひの汽船に便乗するか又は和船を僦ふ方便なるべし、此地は南西北の三方山を繞らし

東方一帶海に瀕す一体の風景は伊豆山温泉に似たるも人家の稠密なる市街の繁盛なる彼と較ぶれば数十倍の上に在り、温泉は村内數ヶ所より涌出し大字松原猪戸なる温泉宿猪戸の背後より出るものを猪戸人湯、猪戸人新湯と云ひ松原前田屋の前より涌くを出來湯と云ひ大字和田にては地を穿てば何處を問はず温泉を得べきを以て泉源二三にして足らざれども上ノ湯、野田湯等を最も著名とす、泉質は鹽類泉にして日本鑛泉誌に掲げたる猪戸人湯の分析表は左の如し

無色透明無臭無味にして少しく浮游物あり其反應は亞兒加里性にして「リートル」中含有する所の各成分及び其量左の如し

格魯兒	多量	硫	酸	多量	燐	酸	痕跡
矽	少量	鐵		痕跡	礬	土	痕跡
加爾基	多量	麻風涅失亞		痕跡	安謨尼亞		微量
那篤倫	著明	加里		著明	(固形分合計〇、七四五)		

今又た各温泉の由來を聞くに猪戸人湯は往古此地に蘆荻の繁茂せる間より涌出せしを誰ありて知る人なかりしに偶々手負猪の之に浴して創所を

り涌出せしを誰ありて知る人なかりしに偶々手負猪の之に浴して創所を洗ふを見、里人等初めて温泉の疾ひに効あるを知り傍らに浴場を設けしも幾ばくならずして中絶し數百年の後ち即ち天保十一年に至り今の本猪戸の主人再び温泉場を新築するに至れりと、出來湯は寛永年中の發見に係り和田の温泉は慶長三年初めて浴場を造れり而して慶安年間には此上ノ湯を採酌し樽詰となして江戸城に送り將軍家の澡浴に供したりと云ふ温泉にはかく由緒あるのみならず地は東伊祐親に縁故ありて舊蹟も甚からざる處なるに何故にや其名世に著はれず、近年に至り漸く人の知る所となり熱海の雜沓を厭ふ者追々來浴するやうになりしは伊東村の爲めには幸福と謂ふべし唯だ恐る今より數年の後に至らば此地にも亦ペンキ塗の温泉宿漸く増加し折角の開地も終に一大俗境と變じ來らんとを、現在の温泉宿は松原猪戸に山田屋、旭屋、山本屋、芹澤、本猪戸、いろは屋、福住屋、升屋の八軒にして芹澤は元の柏東館と合併して一大巨館となれ

り、同じく出来湯に在るものは前田屋、寶來屋、新井屋、鍋屋の四戸、和田上ノ湯に在るものは大阪屋、櫻屋、東屋、扇屋、新湯の五戸とす、儲前には熱海よりの順路を記載せしが東京より直接に此地に来らんとする人は京橋區本湊町伊豆屋太郎兵衛方取扱ひの汽船に搭じて直航するも善し、同汽船は隔日午前六時に解纜し十二時間にして伊東に達すべく其の賃金は下等七十銭なり

蓮着寺 伊東近傍には名所舊蹟多けれども其最も名高きは日蓮上人竄流の舊地なる海岸山蓮着寺なり、同寺は伊東村の南對島村大字篠海浦に在り、寺傳を按ずるに此浦は日蓮上人の伊豆へ流されし時初めて此地へ着す上人歿して後ち小田原北條氏の臣今村若狭守此地を領せし時深く上人の徳を追慕して堂宇を建立す爾來稍や頽廢に傾きしを萬治年中日靈上人之を再興して海岸山蓮着寺と號せり、其の海岸海中に斗出せる處を日蓮ヶ崎と云ひ阜頭の巨岩を廻岩といふ是れ船守彌三郎が上人の將に海中に

沈まんとするを救ひたる舊跡なりとぞ

●富士山

此の日本第一の高山は海面を抽くと壹萬二千四百尺四時雪を戴き絶頂に到れば盛夏も猶は嚴冬の如し故に此靈山に遊ばんとする者は毎年舊曆六月一日の山開きより向ふ四五十日間即ち雪の稍や解たる時を見て登山するを常とす、其登り口は大宮口(表口)須山口(南口)須走口(東口)吉田口(北口)の外に猶は東表口、人穴口の二ヶ所あり關西より來る者は重に大宮口より登り甲斐より來る者は吉田口より登り關東より赴むく者は須走口、東表口の二ヶ所よりす茲には先づ東表口新道の案内を爲さんに新橋より汽車にて御殿場停車場に到れば同村に旅店近江屋、富士屋あり又富士山本宮出張所野木三平治氏に就て登山の案内を請へば氏は懇切に登山一切の事を周旋す東表口新道は即ち野木三平治、伴野佐吉外數名の有

志が去る明治十六年自費を以て新たに開鑿せしものにして御殿場より一合目まで三里八町の間一直線を爲し而も傾斜急ならず其面平坦にして自由馬車人力車を通ず、御殿場を離るゝ道の左傍に五社淺間神社あり是を表口神社と稱す御殿場より車を驅りて往くと二里弱にして八大龍王の瀧あり登山者は此水を以て身體を洗滌するを常とす夫より瀧河原、馬返しを経て中宮淺間神社に達し往くと數町にして本山の一合目に到る、此間の道路は前にも記す如く道嶮しからず樹木蒼鬱として通常の山道を迎るに異ならざれども一合目より上は草木稀疎にして砂愈々深く往て六合目以上に到れば終に一本の樹木をも見ず地は焦石と小砂とを混じて足動すれば迂り易く歩行稍や困難なり一合目より頂上まで凡そ五里、途中十町乃至二十町毎に休泊所ありて之を麓の方より一合目二合目と算へ十合目に到りて頂上に達す四合目以上の休泊所は皆石にて疊み以て暴風強雨を禦ぐ故に石室の名あり又七合八合の處に登りて遙かに山麓を望めば

雲は脚下より起りて冷氣肌を襲ひ麓の方に驟雨等ある時は雷鳴を足下に聽き雨は下より上に降るとあり是は麓より吹起る風力に依りて雨のシブキを受くるに過ぎずして雨の逆まに降るにはあらず、登山者に依りては七八合目より登るに隨ひ俗に山中りと稱して酒に酔ひたるが如くなりて物皆な黄色に見える事あり或は呼吸せはしくして二三分間毎に溜息を吐くとあり是れ空氣の稀薄なるが故なり、既にして頂上に達すれば茲に國幣中社富士山本宮の奥ノ宮ありて傍らに講中信徒の籠所二軒建てり皆な石造なり又傍らに良香朝臣の撰める富士山記の碑あり、本宮より絶頂の外輪を一周する五十町、同く内輪を一周する三十六町之を俗に八千れう廻りと云ふ其の中央に舊噴火坑あり深さ數丈時として其底に水を湛へ周圍は皆突兀たる岩石より成り其最も高さものを劍ヶ峯と云ふ劍ヶ峯は頂上の平地より高さ四十丈其の岩質堅剛以て劍の刀に代ふべし故に此名あり其他獅子岩、雷鳴嶽、鋸嶽、馬ノ脊山の小峯東西に起伏し又金明

水、銀明水等の井戸あり、絶頂白山より遠望すれば凡そ近隣十三州の高山は皆な眼下に瞰望し甲斐の八湖、相模の蘆、湖等は宛然小池に異ならず晴天には遙かに近江の琵琶湖をも望み得べしと雖も雲烟常に糢糊として眼界數百里の遠きに達するの日は甚だ稀れなり降りば草鞋を三重に穿ち譬に臺を結付けて七合目より一合目まで一直線に下り下るを常とし此道を走道といふ頂上より一合目まで僅かに二時間にして達し別に危険の恐れなし、今登山者の便利を謀り先づ東京出發の時刻より記さんに汽車にて午後九時五十三分新橋を發すれば翌午前一時二十五分御殿場停車場に着す（下等瀛車賃七十一錢）是より先同所の宿屋又は野木氏へ宛て先觸れの端書を出し豫て停車場へ出迎への者を出させ置くやうに爲さば着後直ちに人力車或は案内者等を雇ふに便利なるべし茲にて辨當などを用意し二時より人力車にて御殿場を發すれば四時には一合目に着し二合目に差掛る頃は旭日の東海より昇るを拜し遅くも午後二時には頂上に達する

を得、茲にて一時間休息し三時より絶頂を降るとすれば歸途は僅かに二時間にして一合目に着し七時半にて御殿場に歸り得るを以て八時十三分の汽車にて同所を發すれば夜の十一時三十五分新橋に着し即ち前後より廿六時間にして一回の旅行を終るものとす去れど婦人等にして長途の疲れを厭ふものは午後四時十分新橋を發して其夜は御殿場に二泊し翌朝未明に登山して日中に御殿場へ歸り復た同所に宿泊せし後ち翌朝八時十二分の汽車に乗りて正午新橋に着するも可なり、御殿場旅店の宿泊料は一上等二十五錢、中等二十錢、辨當六錢より十錢迄、剛力案内料は日歸り四十錢、泊掛け五十錢、御殿場より馬返しまで人力車四十錢、乗馬二十五錢、山駕籠は頂上までの往復八圓、一合目宿泊料は二十錢夫より登るに隨ひ一合目毎に一錢を増し九合目に至れば二十九錢拂ふを常とす箱根より富士山に登らんとするには宮ノ下より木賀、宮城野、仙石原を経て乙女峠を越え御殿場に出るの道あり大山よりは山道三里を歩みて松

田停車場に出るを便利とす、又關西より登山する者の爲めに表口の案内を爲さば鈴川停車場より大宮まで里程三里の間は鐵道馬車の便あり(賃金十錢)大宮町には國幣中社淺間神社の本社あり祭る所木花開耶姫命にして合殿に邇々杵命、大山祇命鎮座せり傳へて云ふ此宮神代より此地にありしを垂仁天皇の三月社殿を富士郡山宮村に創建し平城天皇の大同三年坂上田村麿勅を奉じて復た本社を現今の地に移すと、其の社殿は古雅にして頗る清洒なり、大宮には四五軒の旅店ありて剛力を雇ひ辨當を整ふる等萬事登山者の周旋を爲すと猶ほ御殿場の旅舎に於るが如し茲より本宮の後を右折し二股、粟倉を経て行くと一里餘にして村山に到る是より草野二里、木立二里、砂山二里にして絶頂に達し其途中一合目毎に休泊所あり村山より絶頂まで五里二十六町、九合目より絶頂に至る十町の間を胸突と云ひ道頗る峻峻漸く匍匐して登ると云ふ其の途中の景色は概ね東表口に異ならざるを以て茲には贅せず

●白絲の瀧 富嶽の周回名所古跡少からず今其の一二を擧ぐれば白絲の瀧は富士郡上村出村と白絲村との間にありて直下八丈幅四十二丈雌瀧、雄瀧の名ありて水の迷しり落ると宛然管より噴出するが如く一見數十條の白絲を懸けたるかと思はる故に此名あり瀧の近傍に藤花、躑躅、楓葉ありて春より秋の間眺望殊に佳なり、源の頼朝が「白絲をわわ緒によりて結べども瀧つ流は手にもたまらず」と詠みしは即ち此瀑布の事なり

●胎内竇 は吉田口の途中甲斐國都留郡福地村字鈴原といふ處にあり此穴に入る者は膝頭に草鞋を着け燭を照して匍匐しつゝ、入るを常とす入口二間の間は助と稱し其岩の形肋骨に似たり漸く進みて臍石の邊りに到れば窟愈々狭く腹帯に到りて全く手足を前後に長く延ばしに僅かに潜り抜けざるを得るなり其の盡處に達すれば穴漸く廣く茲より復た元の道を順次にいで來る間一挺の蠟燭を點じ盡すに至らず又富士道者は此窟を無戸室と稱し此の穴に入りたる者の禱を以て懷胎婦人の腹帯に用ふれば安産する

と疑ひなしと言傳ふ

●會我兄弟の墓 富士郡鷹岡村大字久澤なる福泉寺地内にあり墓は二基と
もに五輪の塔にして高さ各々三尺五寸、幅一尺四寸、文字は磨滅して讀
易からず、本院藏する所の位碑には「高崇院殿峯巖良雪大禪定門、會
我十郎祐成、五月廿八日卒、行年二十二歳」「鷹巖院殿士山良富大居士、
會我五郎時致、同月廿九日卒、行年二十歳」とあり又其の近傍に會我八
幡の社、虎御前の社あり

●佐野瀑園

佐野瀑園は佐野停車場を距る僅かに十二町、湯山某氏の所有にして園内
五條の瀑布あり雪解の瀧は高さ四十尺、幅十五尺、富士見瀧は高さ同上
幅十二尺、月見瀧は高さ四十尺幅八尺、銚子の瀧は高さ三十三尺幅七尺、
挾衣の瀧は高さ同上幅十五尺皆山崖より相並びて落下す、瀑布の傍らに

藁葺の旅館を設く之を五龍館と名づけ近年其傍らに西洋館を新築し客を
して随意に宿泊せしむ其他園内に小亭を設け瀧の水は溢れて池となり一
碧鏡の如く池中鯉あり鮒あり以て釣を垂るゝに宜しく又小舟を泛ぶるに
宜し、園より凡そ二十町にして景ヶ島あり土地小高くして眺望頗る快潤
なるを以て此名あり茲に小堂あり景島山の三字の額は佐文山の書する所
なれども堂中祭る所未だ詳らかならず又園主は此邊二千町歩の山林即ち
富士の裾野を圍ひ込みて特別遊獵地となしたれば銃を肩にして古松老杉
の間を逍遙し兔、小鳥の類を獵するも亦自由なり、館内別に一大浴室の
設けあり栓を捻れば湯瀧混々として飛下するの仕掛もありて夏季暑を此
地に避くる者年々多さを加ふと云ふ又館の近傍に佐野八景あり即ち景ヶ
島の秋月、屏風岩の鴛鴦、千福の青田、榮橋の流螢、桃園の櫻花、平松
の夜雨、定輪寺の晚鐘、古城の暮雪等にして朝夕散策を試むるに宜し、
同館の宿泊料は一日四十錢以上、七十五錢以下にして佐野停車場よりの

人力車賃は八錢の定めなり。

●修善寺温泉

修善寺温泉は伊豆國君澤郡修善寺村にあり土地稍や偏鄙なるが爲めにや其の繁昌は熱海なほに及ぶべくもあらず謂はゞ田舎の村落に過ぎざれども其の閑静なる處に直打あり諸物價宿賃等も亦随つて高からねば數日間逗留して静かに病ひを養ひ且暑さを避るには修善寺も亦適當の地なるべし楮修善寺には泉源八ツあり之を獨針の湯、河原湯、眞湯、杉の湯、箱湯、石湯、珍の湯(又兒の湯とも云)瀧の湯と云ひて孰れも共同浴室なり此外猶は日本鑛泉誌に載る所の温泉には花の湯(柏屋亭内にあり)龍の湯(淺羽亭内)岩の湯(中田屋亭内)菖蒲の湯(新井亭内)保生湯(野田屋亭内)菊園靈泉(菊屋亭内)明治靈泉(衛生館内)等ありて孰れも温泉宿の内湯となり居れり今々當所への道順を記せば沼津停車場(新橋より沼津停車場

まで下等汽車賃八十六錢)より里程六里馬車人力車を通ず沼津よりの人力賃は片道四十錢、馬車なれば三十錢以内なれども乗合なき時は待合すの不便あり又佐野停車場よりも里程六里餘にて矢張車を通ずれども沼津道の方平坦にて人力車の走り方も輕ければ東京より赴く人も沼津にて下車する方便利なるべし、修善寺の地形を云へば此村は三面山を環らし東の方のみ稍や平坦なり土地は海面より高きと五十餘尺、村の中央を流るる小川を桂川といひ温泉は多く川の中央又は其岸より湧出せり獨針湯の如きも矢張り此川のたゞ中より湧出するものなれど温度頗る熱くして其儘にては浴し難ければ浴槽を分ちて之によき程の水を注入し適宜の加減と爲して浴を取らしむ其の成分左の如し

格魯兒那篤留母	〇、五一〇八	格魯兒加留母	〇、〇一九五
硫酸那篤留母	〇、四一五一	炭酸那篤留母	〇、〇二八三
炭酸加爾叟母	〇、〇八七七	硅酸	〇、〇五六五
磷酸謀加留母	痕跡	炭酸亞酸化滿俺	痕跡

固形分合計

一一一八〇瓦

此他の各温泉も其成分は孰れも大同小異なれば大方は此表に依りて推し給へ又主治効能は胃加答兒、腸加答兒、肺炎、子宮病、痛風、疝氣、寸白、疥癬、瘡毒等に宜しと云へり、又温泉宿屋の重なるものは

- 一等温泉宿 野田修治(菊屋) 相原平八(養氣館) 淺羽保右衛門(對碧樓)
- 二等温泉宿 大川彦八郎(衛生館) 湯川廣吉(柳屋) 後藤龜之助(江戸屋)
- 三等温泉宿 野田八郎平(野田屋) 三須重吉(柏屋) 野田重嗣(水月樓)
- 柳田いせ(四方樓)

の十軒外に中田屋、橋本屋、宇佐美屋等の宿屋都合二十五軒あり宿泊料は菊屋、養氣館等にて一日上等五十錢、中等三十五錢、下等二十錢を定めとす然れど客の望みに依りては何品にても取寄て其膳に上すなど田舎には似合しからぬ便利あり、温泉は別に入浴料を要せず唯だ浴室より一日一厘より六厘までの錢を集め置き之を浴室の修繕費に充るまでなり、郵便は毎日二回の集配あれども電信は三島(五里)まで行かざれば通せず

例の通り此地より近村への里程を擧ぐれば三津へ三里、粟島へ三里七町、吉奈温泉へ三里、蛭ヶ小島へ三里、堀越御所へ三里なり其他修善寺村近傍に名所舊跡少なからず即ち左の如し

●修善寺 當村内にありて大同年間僧空海の開基なりと云ひ傳ふ建久三年梶原景時の爲に襲はれて範頼茲に自殺し其後ち北條時政も亦頼家を此寺に幽閉し終に浴室に於て頼家を暗殺せり其地に至りて歴史を按ずるも亦一興なるべし此寺に什物夥多あり就中尼將軍の跋、高麗版の法華經一卷、北條早雲、豊太閤の御教書等は一覽の價あり

●正覺院 修善寺を距る一里強りの山間に在り嶮しき崖を削りて洞窟となし茲に一字を建立せしものにして昔し大同年間弘法大師の降魔場なりしと云へり三伏の日にも寺に登れば涼風軽く袂を動かし午睡には蒲團を被はざれば風を引く程なりとて夏時修善寺に遊ぶ者は必ず此寺に登りて汗を入るゝを常とするど云ふ

旭瀧 田方郡大平村に在り水源を池の洞に發し狩野川に入る高さ三十餘丈幅一丈五尺、淨廉寺瀧といへるも亦同郡湯ヶ島村にあり幅は旭瀧に一倍なれども高さは其の三分一にだも及ばず其他月見ヶ岡、頼家の墓、範頼の碑、御庵洞、日枝の社、蝦蟇ヶ淵、稚兒の瀧、虎溪橋、大白山、桂谷等枚舉するに遑わらず

●湯ヶ島温泉

湯ヶ島は伊豆國田方郡上狩野村に屬し修善寺温泉の南三里にして沼津停車場よりは凡そ九里を隔つ、地は南に天城山を負ひ其餘脈蜿蜒として北に馳す湯ヶ島は實に此一大溪澗中に位し狩野川の急湍淙々として村内を貫流し土地の幽邃なる修善寺に優れり、温泉は鹽類泉にして狩野川の岸岩石の間より涌出し其の湧口を西平、世古、木立の三ヶ所とす木立温泉は昔し源頼朝此地に遊び木刀を以て穿ちしものなりと云ふ狩野川の溪

流に枕みて温泉宿二三百あり落合樓といふは最も手廣にして且清潔に見ゆ、此地は山嶽を以て圍まれ眺望には乏しけれども氣候は大暑八十度、大寒四十五度にして夏暑からず冬寒からず殊に夏は蠅を用ふるに及ばず最も避暑に適す、此地の南鉢窪山の東麓に淨蓮寺瀧あり高さ八十尺餘にして水は岩角に激し飛沫雪の如し又大字太平に旭瀧あり高さ三十丈幅一丈五尺淨蓮寺瀧の三倍餘にして頗る壯觀なり、

●牛臥山麓海水浴

沼津にて瀛車を降り停車場より南行して更に右に折れ湊橋(狩野川に架す)を渡り行くと十餘町にして牛臥山麓の海水浴場に到る(沼津停車場より二十五町人力車賃十一錢)海水浴旅館は三島驛なる世古六太夫の支店にして三島館と云ひ牛臥山麓數町歩の間を拓きて茲に數棟の旅館を建築せしものにして館毎に浴室、厨の設けあり此地は前に内浦を擁し伊豆

の大瀬崎と駿河の三保ヶ崎とは左右より斗出して内海を包み宛然一小湖水の觀を爲すのみならず岸頭には高島岩其他の奇巖突兀として起伏し東には御料林の松幾百本となく生茂り起ちて舞ふが如きもの伏して眠るが如きものありて其様稍や舞子ノ濱の趣きを存し後には牛臥山の岸頭に蟠まれるありて浴後散步逍遙するに宜し既に斯の如く眺望に富みたる上に其の海邊は浪靜かにして水清ければ夏日水浴を取るには最も適當の地なり、宜なる哉近來此地に貴顯の別莊を設くると年一年より多く御料林より志下の間には川村、西郷兩伯の別莊あり牛臥山の切通しを経て其北麓に下れば茲には大山伯の別業あり其他華族某々の諸氏等既に此邊に敷地を購ひたる者一二にして足らず夏日浴客の雜沓するも亦此地の風景他に勝りたるが故なるべし、三島館一日の宿泊料は凡そ五十錢を通常とし魚肉は毎日此の内浦にて獲たるものを料理するを以て最も新鮮にして味ひ殊に佳なり借例に依り近傍一二の遊覽地を擧ぐれば

我入道海水浴 は牛臥山の北三町の海濱にありて此地の海水浴旅館を松風館と云ふ館の一方は狩野川に瀕し其の一方は駿河の内海を見晴し前には不動岩屹然として峙ち後には小高き山を負ひて山上には八幡神社其中腹に不動堂あり手を翳して濱邊より望めば西北に當りて近く田子の浦千本濱あり遠くは三保の松原、久能山稍や北に當りて富士山あり更に南に向へば海上三里餘を隔て、大瀬崎、眞城山は一眸の中に集まり來り其の風色眞に愛すべし松風館の宿料は並一日廿五錢、中等、上等は客の好みに應ず又沼津停車場より此地まで人力車賃九錢、沼津本町裏より小舟にて下るも亦可なり

桃郷の桃林 は三島館の東南四五町の處にあり村内民家五六十戸皆農と漁とを以て業とし每家其庭前又は麥隴の中に數十株の桃樹を培ひ夏日其實を採りて之を齎ぎ以て半年の生計に充つと云ふ民家は皆一樣に竹垣を結回らし宛がら東京根岸の舊景を觀るが如し、花候に至れば紅雲十里眞

に桃郷の名に背かず遠近より來りて花を賞する者亦多し、桃林中割烹店ありて桃中軒といふ固より田舎の小料理屋に過ぎれども春季は花の爲めに客群集し稍や繁昌を極むと云ふ

●戸田海水浴

伊豆國君澤郡戸田港は沼津を距る南の方凡そ四里半、灣は入口狭くして灘の如く潮水清くして最も海水浴に適す同港御濱と稱する所に海水浴旅店保養館あり御濱は戸田の港灣に斗出せる一少半島にして松柏林を爲し砂濱には怪石連なり保養館の樓上に登れば一時に灣の内外を望み得べくして其の絶景言はん方なく殊に富嶽は眞北に方りて其裾は遠く三保の松原に聯なり東には伊豆の連峯を仰ぎ西南には御前崎を水天髣髴の間に望むなご山海の眺め雨ながら備はり畫圖も猶ほ及ばざる趣味あり、保養館は二三年前の開業にして昨春更に客室を増築し宏壯にして且清潔其の宿

料の如きも亦極めて廉なり内海に向へる方には大なる生洲を設け鯛、鯉其他の魚族を游泳せしめ外海の方には常の二三艘に漁舟を備へ浴客をして随意に漕がしめ又船頭を附けて釣魚の慰みを爲さしむ沼津より下田通ひの汽船は日々二三回兩處の間を往復し其の都度戸田へ寄港するを以て東京より赴かんとする人は沼津より汽車を下り同所より汽船の便に據るを順序とす汽船賃は下等十二錢なり

●堂ヶ島洞窟

旅客を伊豆の西海岸に導き來りし序を以て編者は茲に未だ世に顯はれざる一個の仙境を紹介すべし、堂ヶ島是れなり、堂ヶ島は伊豆那賀郡の西南海濱にして仁科村大字濱村に屬す、濱村より西北に赴くと數町にして由流木橋あり長さ三間に過ぎざる小橋なれども白槇を以て之を造り崇神天皇の御宇初めて此處に架せしものと云ふ傍らに一字の草堂あり元は走

島山長平寺と號し伊豆山に屬せしが今は大に頽廢して僅かに此小堂を存するのみ其の本尊は行基作の薬師如來にして今は單に薬師堂と呼ぶ、此堂より望めば前面一帯の海水は灣を爲し南方には青松白砂と連なり東には康申山の屹立するあり海中には小出地、比叡、飛龍、龜嶽の諸巖島基石を散せしが如く點在して灣口を扼し灣内殆ど湖水の觀あり、若し舟を穢して灣外に出れば眺望更に濶大にして南に龜ノ子崎、雲見ヶ嶽を觀、西に高島の二島嶼を眺む高島と陸地との間に三四町の積洲ありて海水を劃し海湖の干満に隨ひ其洲自から出沒す之を瀨濱と云ふ北に三足島、失立島、俵島等の奇巖あり其傍ら天窓山の絶壁に一大洞窟を開く是れを堂洞の南口とす洞口高さ二丈幅六間許り入ること七八十間にして洞上に天然の窓を穿つ長方形にして殆ど厨の引窓のごとく日光此より注射して能く洞中を照らし水中魚介の遊泳するを數へ得べし、洞道稍や折れて北東に行くと二三十間にして小濱あり由流木橋の水此所に瀉ぎて潮水に

會す、又洞口より十四五間の所に第一の岐洞あり西に向つて馳せ終に西岸を貫きて海に通ず其入口を西口と云ふ、又本洞窓下の北に第二の岐洞あり西に走ると二十歩許にして漸く窄く茲に至て又闇黒なる二洞を分つ其深さ極まりなく里人も其奥を知らずと云ふ偶、波浪の此中に進突するとあれば反響を呈すると宛かも大砲の轟然として耳を掠むるが如しと右の洞中に白沙の濱あり蝙蝠此内に棲み東西に飛びめぐりて往々人の面を撲つ又此洞口より迂回して直ちに南方に走り遂に西洞と相會するものを副洞といふ本洞は廣くして副洞は稍や狭く且水淺きが故に滿潮の時ならでは舟を行き難しと雖も干潮の時には紅蝦多く此洞中に棲み手を以て自由に獲へ得べしと云ふ、若し夫れ盛夏の候此洞中に入れば清涼の氣人を襲ひ肌粟を生じ身の人間に在らずして忽然仙に化したるかの感を起さしむ是れを伊豆第一の絶勝と爲す誠に宜なりと謂ふべし而して斯かる勝區にして都人士の之を知らざるもの多きは何ぞや唯だ土地の稍や僻なるが

爲めのみ然れども此地に遊ぶは決して至難のわざに非ず沼津より下田通
 ひの汽船に搭じ其途中松崎に上陸すれば陸路三十町にして濱村に達すべ
 く同所にて洞廻りの小舟を僦ふと自在なるべし、日光箱根に遊び飽きた
 る人々は必ず一たびは此仙境に杖を曳きて景致の絶奇なるを賞したまへ

●清見瀉海水浴

興津停車場より西へ七町(人力車賃五錢)清見寺前に海水浴場あり清見寺
 は開基創建ともに詳らかならざれども足利尊氏之を再建し嘉吉二年今川
 氏親僧明元を招きて中興開山と爲せしと言傳へ此地にては有名の寺院な
 り、旅館には海水樓、一碧樓、身延樓、佐野屋等あり海濱には家康公の御
 座岩、疊岩など稱ふる種々の岩石横はり其岩のはざま波穏かなる處を水
 浴場に宛てたり、海邊の景色は各所とも稍や同じ趣きを存し長き逗留の
 間には眺めに飽くものなれども此地は南に三保の松原を望み東には海を

隔て、伊豆の諸山突出し三保と相對して海を包み西には江尻、清水港、
 龍華寺、久能山、賤機山を觀るべく北には富士、愛鷹の二峯雲の間に聳
 るるありて日々其の風色を新にするの思ひあり海水樓の敷地は清見關の
 古跡、今は御料地の隣りにして樓上樓下數十の客室を備ふるも近頃浴客
 の數を増し夏の盛りには客室皆な塞がる事ありといふ、同樓の宿料は一
 週間一等七圓、二等五圓、三等三圓五十錢、四等二圓五十錢、料理は好
 みに應じて週進するが中にも名物の興津鯛味ひ殊に旨し

●久能山 (久能神社)

久能山は静岡縣有渡郡の海濱にあり山甚だ高からざれがも眺望快豁土
 地幽靜なるを以て夏季此山に登りて暑を避くる者多し、山は東海鐵道の
 江尻停車場を距る西南一里餘、東海道の上原より左折すれば直ちに上り
 坂に差掛り馬走を経て十數町にして頂さに達す、山上に久能神社あり縣

社にして徳川家康を祭る元和三年二月の創建にして社殿は壯嚴ならずと雖も其の結構見るべきもの多し手を翳して山上より遠望すれば南は渺々たる太平洋に面し東北には駿河灣を隔て、富嶽の屹然雲端に聳ゆるを望み清見瀉、清水港及び三保の松原は其眼下にありて自から遠近の景を補ひ汽車の烟を吐いて駈る様、和船の帆を揚げて駛る狀、縮視するに違わらず眞に山海風光の勝地たり、山上旅亭なし唯二三の茶亭あるのみ又山を下りて清水に出づれば茲より三保村に到る便船あり海上僅かに十八町、岬に御保神社ありて三保津姫を祭る此邊松樹枝を交へて翠碧瀉らんとし風景殊に宜し所謂三保の松原是なり

● 燒津海水浴

静岡縣益津郡燒津の地たる東駿河灣に面して遙かに伊豆と相對し東北には愛鷹山、高草山を望みて富士の嶺は其上に聳え南には渺茫たる遠江洋

を擁し四望皆佳景ならざるは無し燒津は静岡を距る西南三里餘、東京よりは實に五十一里半を隔つ（新橋より燒津停車場までの下等汽車賃壹圓廿八錢）此地に近年新築せし海水浴旅店秋月樓あり樓は停車場を距る僅かに五町にして館内冷浴温浴の設けあり同家宿泊料は一夜上等三十五錢中等二十五錢、下等十六錢なりと云ふ又村内に燒津神社あり郷社にして日本武尊を祭る古へ景行天皇の四拾年日本武尊東征の際賊欺いて原野に火を放ち尊を害せんと謀りしに尊は叢雲の劔を以て火を拂ひ終に賊を爰除し給ふ、燒津は其の舊跡にして今猶は近傍に草薙村の名を存す

● 志太鑛泉

藤枝停車場を距る二十餘町の處に此鑛泉場あり停車場内に旅亭潮生館の出張店あるを以て茲より同店の案内者に誘はれて本店に至るを善しとす、其道は藤枝驛を離るれば直ちに爪先き上りの阪道となれども新道は

して其間も遠からねば緩歩するには適當の運動なり若し人力車を雇ふも其賃錢は九錢の上に出でず旅店潮牛館即ち鑛泉の湧出る處は駿州志太郡青島村に屬し小名を鹽湯ヶ谷と云ふ新開地なるが故に潮牛館の外に人家僅々十戸ばかり多くは農を以て業とす土地は四面綠樹翠草を環らし田子ノ浦、三保の松原等は樹木の間に隠見し樓上よりは富嶽を簷下に望みて風光亦た愛すべき所あり、鑛泉は多少の硫氣を含み其味少しく鹹し其の効能は腺病、瘰癧、皮膚病、佝僂質斯、胃病、子宮病、脚氣等に宜し又同館庭内には二三小亭の外に大弓店あり楊弓店あり夜に至れば庭園は素より客室浴場等へ悉く天然瓦斯を點火するなど頗る奇觀なり潮牛館定めの宿料は一日二十五錢以上、入浴料は一日三錢とす又此地より南へ七八町にして神代の塚、人穴、烏帽子岩等の名所あり

●五和村潮鑛泉

東海鐵道の金谷停車場より北二十五六町(人力車賃十五錢)遠州榛原郡五和村に潮鑛泉あり土地は後に丘陵を負ひ前に田圃を見晴し眺望稍や爽快鑛泉は寶藏寺の傍らより湧出するものを樋にて浴槽に導き火を焚きて煖むるものにして多量の鹽酸那篤留母(食鹽)と炭酸曹達とを含み腺病、瘰癧、脚氣、佝僂質斯、腸痛、胃弱等に効能ありとて近來浴客多きを加へ稍や繁昌の模様あり旅館は潮月館一軒、外に湯元の寺にて營業する者一軒あれども潮月館の手廣なるには及ばず同館宿泊料は一日並二十錢以上入浴料は一日三錢同じく一週間分二十錢なりと

●秋葉山 (秋葉神社)

秋葉山は遠州周智郡の北部天龍川の東に位し不動、龍頭等の山脈に連なれる峻嶺にして山頂に秋葉神社あり軻遇突智の神を祭る、東京より此地に到らんとする者は掛川停車場にて瀛車を下り夫より人力車を驅りて森

町に至るべし(人力車賃二十五錢)其の里程は掛川より森町まで三里、森町より三倉まで二里、三倉より阪下まで三里半、阪下より秋葉神社まで立登り五十町、都合九里廿四町なれども森町以北は一人曳人力車を通せざれば登山者は駕籠を雇ふか若くは徒歩せざる可からず、其の途中屢々溪流を渡り又峻阪を攀ぢるなど道嶮しくして登り易からず氣田川を渡り行くと數町犬居宿に達し茲より右折して阪下村の人家を過ぐれば道の中央に大華表あり之を一の鳥居といふ、秋葉神社は元と大登山秋葉寺と號し養老年中行基大師の創建、天正年間光幡和尚の中興せし禪宗の巨刹にして秋葉の三尺坊とて世に名高かりしが明治六年寺を廢して三尺坊を可睡齋に移し今は縣社に列せらる、舊記を按ずるに當山鎮守の神は延喜式内小國神社と號し後ち之を秋葉權現と稱す一山護神として三尺坊を同社に祀る享祿天文の頃甲州の武田勢此地に押寄せ來りし時寺は兵燹の爲めに燒失したるも秋葉神社と觀音堂とは棟上より白水迸しり出で、火災を

免がれたるは是れ偏へに神威の顯著なるが爲めなりと言傳へ今に火伏せの神と崇め目下猶は秋葉講と稱ふる者諸國に多く毎歲十二月十五日の大祭には賽人蟻の如く集まり來り境内頗る雜沓を極む、社地廣濶にして老杉其圍りに繁茂し社殿には權殿、拜殿、神饌所、本社、幣殿、社務所及び櫻門、大華表等ありて皆頗る壯麗を極め賽路の兩側には數百基の燈籠あり、秋葉より鳳來寺に廻るには戸倉の岸より天龍川の舟渡を渡り石打、熊、巢山、大野等を経て寒狹川を越えて同寺に達す其の里程八里半、途中大森山の峠ありて其の前後峻阪打續き嶮阻にして人力車を通せず僅かに駕輿と小荷駄馬とを通ず、森町より阪下までの駕輿賃一圓五十錢、同所より鳳來寺までの駕輿賃も亦一圓六七十錢なり又秋葉神社前には葉倉屋、三河屋、阪下には高木屋、椀屋、萬屋等數軒の旅店ありて宿料は一泊廿五錢なり

● 前芝海水浴

豊川停車場より西一里半(人力車賃十錢)前芝村大字前芝に在りて豊川河口の北岸に位す(關西地方より來る者は御油停車場にて汽車を降るべし)海濱の砂積を開鑿して浴場と爲し傍らに數戸の海水浴旅館あり皆割烹の業を兼ね、海水浴場設置の地たる處として眺望の佳絶ならざるは無く此地亦頗る風景に富み右には端田ヶ鼻の遙かに海中に突起し翠巒媚ぶるに似たるあり左には渥美郡大洲岬の遠く對岸に斗出し砂濼浮ぶが如きあり顧みれば西北の峰嶺は或は低く或は高く淡濃畫圖に入り四邊の好景變幻多くして實に風色飽くことを知らざるの地なり、旅館の名は之を逸す其宿泊料の如きは左記の蒲郡と大差なかる可し

● 鳳來寺山 (鳳來寺)

鳳來寺山は豊橋停車場の東北九里拾五町ばかり設樂郡門谷村に在り、先づ豊橋停車場より北一里半豊川に至れば同處に豊川稻荷あり元は妙嚴寺に屬せしが今は叱積尼天と稱す、又同地より北一里弱一ノ宮村に至れば砥鹿神社あり國幣中社にして大己貴尊を祭れり、皆鳳來寺道の途中に方るを以て參詣する者多し一の宮より道は豊川の左岸に沿ひ長山、新城を経て瀧川の流れを涉り追分を過ぎて門谷に達す是れ其の山麓なり茲より橋を渡り樓門に入りて石階を躋ると九町、一町毎に石標あり且道の左右には老杉蒼鬱として日光を遮り僧房其間に點在す、鳳來寺は天台、眞言の二宗に分れ堂宇巍然として聳之其の結構頗る壯麗なり當寺の縁起は拙著「日本名勝地誌」に詳かなり今其一節を轉載せんに鳳來寺は推古天皇の勅願に依り僧利修の開創に係り爾後文武天皇の大寶年間に造立せしめ給ひたる靈場なり昔し三河の國司奏すらく桐生山に桐樹あり神代よりの靈樹にして其高さ四十九丈周回三十九尋虛洞ありて龍其洞に棲み西枝

に異鳥棲めり其長八尺、尾の長さ丈餘、全身五彩金翠にして鳴く聲嘩々たり人未だ其名を知らず一日三尾羽を落す故に之を獻す、聖徳太子時に攝政たり奏を聽きて乃ち曰く是れ鳳なり鳳は文徳を好む今出るは陛下神皇の紀を闢き儒佛の道を弘むるの瑞兆なり惟ふに後代龍去りて其地應に精舎たるべしと是に於て勅を利修に下し其地を開創せしむ利修因て直ちに此に來り七本杉の一樹を伐り一刀三禮して薬師、日光、月光の像を刻す今ま本堂に安置するものは是れなり、寺域一万九千坪餘にして本堂、開基堂、常行堂、三層塔、鏡堂其他の堂宇處々に點在し就中開基堂は飛驒内匠の建營に係り三層塔は源頼朝の發願に依り梶原景時の建立せしものなり云々寺地は前面石垣を以て積上げ後には考杉鬱蒼たる山を負ひ眺望また佳絶其麓門谷村には柏屋、新江戸屋、布袋屋等數軒の旅亭あり又豊橋より此地まで二人曳人力車賃は二圓なりと云ふ（鳳來寺より秋葉山への道案内は前項秋葉山の部に記載せり）

● 蒲郡海水浴

三河國寶飯郡西部の海濱、東海鐵道の蒲郡停車場より行くと僅か數町の處に近來海水浴場の設けあり此地三方は遠く山を遶らし唯だ南の一方のみ開けて前に渥美灣を擁し竹島、大島、小島等は手に取る如く點々海面に散在し水清く浪靜かにして實に三河第一の好避暑地なり旅館は健碧館、海月樓、海老屋、角市等四五軒あるが中に健碧館を最とす去れど閑靜を好む客は近傍寺院の客殿を借受けて逗留するも可なり、健碧館は俱樂部やらの組織なれども別に通常浴客の宿泊を許し其の宿料は一日二十五錢以上五十錢以下とし料理等も亦客の好みに應ずと云ふ

● 大野海水浴

大野海水浴場は尾張國知多郡の西岸大野町に在り汽車の便に由れば大府

にて武豊線に乗替へ半田停車場より汽車を下り人力車に二十錢を賃して三里の道を行れば一時半許にして大野に着す、去れど海路よりせんとする者は熱田より小蒸氣船に乗らば一時間にして大野海濱に着すべし熱田より大野まで海上五里毎日二回汽船の出帆するありて其の賃金は上等三十錢、中等二十錢、下等十三錢なり、大野町は西に伊勢灣を擁して遙に四日市と相對し南は陶器の製造を以て名ある常滑町と相距る僅に一里北は日長、新知、横須賀等を経て縣道は東海鐵道の新高驛に連なり交通便利の一小都邑にして戸數四百餘戸、人口二千餘人を有す、此地の水浴旅館は海濱館、恩波樓の二軒を最とし其他和泉屋、信濃屋、兩角、石川屋、疊屋、加見屋、越後屋の旅亭あり、海濱館は大野川河口の右岸海に斗出せる地をトして三層の高樓を建設し其の海濱を以て水浴場に充て館内別に温浴の設けあり、同館宿料は上等一日五十錢、中等廿五錢、下等十錢にして別荘の貸席料は一室一週間下等廿五錢より上等一圓七十

五錢までの區別あり魚貝は皆新鮮にして其價は殊に廉なるを以て此地宿屋の宿泊料は他の温泉浴場の如くまた甚だ高貴ならず、傳へて言ふ今を距る五百五十餘年前即ち光嚴天皇の御宇此地の海水に浴して病を治したる者あり是れ我邦海水浴の嚆矢なるへし云々(藥師如來緣起の要を摘む)降つて去る明治十四年此地海音寺の住職磯谷某土地の有志と謀りて水浴場を開き爾後醫學士を聘して潮水の試験を請ひしに水質清良にして氣管支病、神経病、皮膚病、胃弱等の患者に効驗あるを證明したるを以て其名俄かに世に著はれ其の繁昌は相州大磯と東西相匹敵するに至れりと云ふ、町内に裁判所出張所、警察署、郵便電信局、學校、汽船問屋、劇場、寄席等あり料理屋には金谷園、茶松あり海濱に至れば眼界忽ち開けて西南に志州鳥羽の岬及び朝熊、布山の山々を望み西北には桑名町を隔て、養老の山脈を仰ぎ前面の伊勢の海浪靜かにして白帆風に漂ひ夜に入れば漁火點々波間に明滅するなど亦一個の好風景なり、此地より汽船は日々

四日市に航海しまた和船は數回熱田と師崎の間を往復す四日市通ひの汽船賃は中等二十五錢、下等十五錢なり

● 師崎海水浴

東海々濱處として海水浴場の設けあらざるは無し唯だ地僻にして復往不便利なるが爲めに其名世に著はれざるも多かるべき乎師崎の如きも亦其一なり、師崎は尾州知多郡南端の一港灣にして前面の海上には無數の小島點綴し三河の伊良湖崎は左より來り志摩の岬角は右より斗出して一海峡を爲し風光明媚の地なれども其地都會を距る遠きが故に名古屋人すら此地に來り浴する者甚だ稀なりと云ふ、海水浴旅館は養春館と云ひ海濱に二層樓を新築し海水浪穩かにして汚物なき處を以て游泳場に充て館内別に温浴の設けあり、此地武豊停車場を距る海陸共に四里半先づ人力車を僦ひて河和村に到り同村より仕立舟にて師崎港に到るを善しとす武

豊より河和迄の人力賃十二錢、河和よりの舟賃は三十錢内外なり又豊橋より此地に渡らんとするには同所より伊勢の湊に往復する汽船に乗らば海上十二里、二時間にして師崎港に着すべし(汽船賃二十錢)又養春館には定めぬ宿泊料なしと雖も凡そ一日二十錢以上五十錢迄を限りとす

● 佐久島海水浴

佐久島は三河國幡豆郡の南端陸地を離るゝ二里餘の沖合にある小島にして周圍一里廿五町戸數三百餘戸、豊橋よりは海路凡そ十一里師崎港を距る甚だ遠からず、海水浴場は島の南面天女島の近傍を最も好しとす此邊の岸には大いなる礁いくつとなく並び此礁の中央に各々數十人を容るべき凹みありて其形ち盟の如く日中に至れば潮水沸き返りて天然の潮湯となる又本島と天女島との間凡そ半町の處に太き綱を引渡し之に浴水を湛へたる浮舟の設けあり浴客は浮舟に乗りて綱にすがり力に任せて引く時

は自在に此方より彼の岸に渡るを得べく其往復する間潮水に浴し傍ら運動を爲すを得、此方法は故の陸軍軍醫監横井信之氏の考案になりし者なりと又旅亭は島中に四五軒あるが中にも先づ龜屋を以て一等とす其の宿料は一日凡そ二十錢島人は多く漁りを以て生業とするが故に鮮魚を得ると望みの儘なりと云ふ此地は斯の如く海水浴に適當の場所と云ひ殊には物價も低廉なれど往復稍や不便なるが爲めにや遠來の客甚はだ慙なく唯だ近傍の人々來り遊ぶを見るのみ

● 豊濱海水浴

豊濱は前記師崎の西三十町の處に在る一小港灣にして武豊停車場を距る陸路五里餘、熱田よりは海上十四里なり陸路よりすれば武豊より布土、河和を経て豊丘に到り同所より師崎街道と岐れ右折して松戸の小山を越れば一里餘にして豊濱に達す此地は人家二百戸ばかり多くは漁りを

以て業とし旅店は大西屋、梅屋の二軒あり大西屋の宿料は一泊二十錢、一ヶ月滞在費は三圓五十錢以上にて海邊の眺望は師崎と異なるとなし、武豊よりの人力車賃は五十錢、熱田より往復する和船の賃金一人前凡そ二十五錢順風ならば半日にして達するを得べし

● 湯ノ山温泉

旅客は武豊線より再び東海鐵道の幹線に立戻り名古屋の方に進まんとするに先だち其の岐道に於て猶ほ二三の好避暑地あるを忘る可からず好避暑地とは何れぞ湯ノ山温泉、二見海水浴等即ち是なり去れば茲より旅客を特に伊勢路の方に導かんに先づ熱田停車場より瀛車を下り海岸の方に歩めば宇神戸町に岡田屋、桔梗屋、紀伊國屋、伊勢屋、大森升屋等數軒の宿屋ありて皆瀛車瀛船乗客の送迎及び荷物回送の業を兼ね、此宿屋によりて辭を頼み一里の遠淺を涉りて四日市通ひの瀛船に乗れば瀛笛一聲

一時半にして四日市に着すべし（熱田四日市間汽船賃は上等四十銭、中等廿五銭、下等十五銭）又關西鐵道の便に據らんとすれば名古屋より此程落成せし前須行の汽車に乗り（名古屋より前須まで下等汽車賃十銭）同所より木曾川河口を通ふ和船に乗りて桑名に到り同所より再び汽車に乗りて四日市に赴くべし（桑名より四日市までの下等汽車賃九銭）更に四日市より西三里十二町菰野村まで人力車を雇ひ（人力車賃二十銭）夫より徒歩一里廿四町の山道（駕籠賃は三十五銭）を登れば即ち左記の湯ノ山温泉場に達すべし

湯ノ山温泉 は伊勢國三重郡の西隅御在所嶽の麓、三岳川の上流に在り海面を抽く三百七十七米突地は三面に山を負ひ東方のみ開て遠く尾參の平原を望み土地高燥空氣清涼、寒暖計は冬季卅度以下に降らず夏季は八十五六度の上に出ず鑛泉は微温泉にして之を沸し用ひ其質は硫酸を含まざる瓦斯狀亞兒加里性のもにして紀州并に伊豆修善寺温泉と質を同らし

慢性胃加答兒、消化不良の諸症、慢性腸加答兒、肝臟充血、氣管支加答兒、子宮病等に効驗あり、温泉宿は壽亭（瀬古さく）旭亭（伊藤傳右衛門）杉屋（武藤吉兵衛）の三軒にして温泉湧口は旭亭の後丘に在り各家とも樋にて之を導き館内皆浴室の設けあり壽亭一日の宿料は晝食、湯錢ともに二十九銭、席料は八疊敷一週間三十七銭、六疊敷二十二銭五厘、四疊半十五銭の定めにて料理は客の好みに應じて調進す、温泉場の南に羅漢石あり人体に似たる巨巖並列し其形ち羅漢の如く見ゆるが故に此名あり、溪流を隔て、北に青瀧ありて水は水晶ヶ嶽より落つ又此地より鮎川越の峠を攀ち鮎川を経て東海道の土山驛に出るの徑路あれども嶮惡にして歩行頗る困難なりとぞ

● 辛洲海水浴

汽車にて四日市を發し龜山より岐れて津市に至り茲より二見ヶ浦に赴く

途上一の海水浴場あり辛洲の浦と云ふ先づ津市より參宮鐵道に據りて高茶屋停車場に抵り同所より東を指して濱邊に向へば廿五町にして矢野村に出づ乃ち辛洲浦の在る處なり(停車場よりの人力車賃六錢)海濱は白沙渺々として際なく松樹鬱々として其間に枝を交へ一帶の森林を爲し就中五百枝の松、龍燈の松、蛭子の松等最も名高く濱邊に出で、四方を眺むれば内海の布帆を始め尾濃の連山及び伊勢の神路、朝熊の峯巒皆な一眸の中に集まり來る春夏の交遊人來りて其景を賞する者多し、其の森林中に香良洲神社あり稚日女命を祀り御歲大神を合祀す欽明天皇の御宇之を創建し寛永年間津の城主藤堂氏社領を寄附して之を崇敬せりと云ふ毎歲七月十五日の祭日には本社より鳥を描ける扇を授くるの古例ありしが今は此事廢れり、又其傍らに海水浴旅館松阪屋あり二層の高樓を築きて此の畫圖の如き風色を檐の中に集め且館内に温浴場を設け客をして隨意に入浴せしむ、其の海濱は波穩かにして水泳に適し少しも危険の恐れ無し、

同館の宿料は一泊廿五錢以上五十錢までにして別に客の望みに依りて座敷のみをも貸與すと云ふ

●伊勢大廟

足を伊勢に入るゝの人にして誰か大廟に參拜せざるものあるべき、此書前版には故ありて大廟の案内を略せしに四方讀者より之を加へよとの督促頻なれば茲に其大略を掲ぐべし、參宮鐵道の汽車は津市を發し阿漕、高茶屋、六軒、松阪、徳和、相可、田丸の各停車場を過ぎ一時廿五分間にして宮川に達す(津より宮川までの下等汽車賃二十錢)宮川は宮川河川の北岸に在り上ノ渡しを度れば直ちに山田町の北端に達す今は宇治山田町と稱し市坊三十、戸數凡そ五千七百を有し商賈を連ね繁昌敢て津市に譲らず大廟は之を内宮外宮の二社とし相距ると三十町にして共に此町に屬す左に先づ二社の案内を掲げん

外宮 山田町の南端山田の原に在りて其地を高倉山と稱す、本社には豊受大神を祀り瓊々杵尊、天兒屋根命、天太玉命を配し雄略天皇の二十二年七月之を創建す皇太神宮(内宮)に後る、と實に四百八十二年なり境内廣寛を極め社殿は素朴にして清洒自から神徳の高さを表し賽人をして知らず識らず其襟を正さしむ、社殿には多賀宮、土宮、月讀宮、風宮あり之を四所の宮と稱し其他攝社十六座、末社八座あり宮域は八十一町の濶さに涉り接續の神苑は一萬五千餘歩にして其内重なる建物は神庫、九丈殿、五丈殿、遙拜所、第四御門、第三御門、蕃垣御門、玉串御門、瑞垣御門、東寶殿、西寶殿、正殿、御裏御門、外幣殿、神饌殿、内宮遙拜所其他數字にして宮域の内外高倉山、豊川、御贄棚等の名所多し

内宮 同町大字宇治町の南端五十鈴川の上流にありて外宮と相距ると凡そ三十町とす、我邦の總廟にして天照大神を祭り手力雄命、萬豊秋津市姫命を配祀す此の大神は崇神天皇の御宇までは宮中に奉祀せしが天皇其

の神威を瀆さんことを恐れて大和の笠縫ノ里に移し後ち垂仁天皇の二十五年倭姫命神誨を請けて今の地に勧請す今年に至るまで實に一千九百年を経たり而して其の御神體は八咫の御鏡にして世々の天皇崇敬淺からざるのみならず日本臣民として其靈徳を仰がざるは無し、宮域は六十七町餘附屬神苑は九千六百三十餘歩にして別宮を荒祭宮、月讀宮、荒御魂宮、伊佐那岐宮、伊佐那彌宮、瀧原宮、瀧原並宮、伊雜宮、風日祈宮と稱し其他攝社二十五座、末社十六座および板垣御門内には參拜所、殿居所、玉垣御門、四丈殿、蕃垣御門、瑞垣御門、御正殿、東寶殿、西寶殿等あり、境地の東南に一丘陵あり神路山と云ふ古杉老檜蔭鬱として天を衝き五十鈴川は其麓を流る、五十鈴川は一名御裳濯川と云ひ其上流には奇巖怪石磊々として起伏し鏡岩と名くる巨巖のごときは殊に奇觀なり其他近傍の勝區は枚擧するに遑あらず委しくは「伊勢參宮名所圖會」其他の書に譲りて茲には省略せり

内宮、外宮を参拜せんとする者は先づ宿屋に投じて案内を爲さしむるを便利とす、旅舎の重なるものは一志久保町に宇仁館（西田奥助）吸霞園（加藤源七）外宮前に北村屋（北村甚造）古市に油屋（白井清榮門）尾上町に十文字舎（黒部かね）藤屋（宮澤利七）内宮前には何々太夫と稱し元の御師にして旅舎を營む者多し

● 朝熊山 （朝熊神社）

伊勢に遊ぶ者は必ず大廟に参詣するを常とし大廟に参詣する者は又必ず朝熊山に登るを常とす、朝熊山は宇治山田町の東二里弱、度會郡の東端伊勢志摩の州界に聳ゆる名山にして海面を抽く一千七百尺、其麓朝熊村まで人力車を通ず（宇治町より朝熊村まで人力車賃十二錢同所より山嶺まで登り三十町）頂上に登れば駿、遠、参、尾の諸山皆雙眸の中に入り其の絶景文す可からず、山頂に金剛證寺あり臨濟宗にして山城南禪寺に屬

し欽明天皇の御宇僧曉臺此山を開き後ち推古天皇の十年聖德太子臨幸ありて佛舍利を納め給ふ聖武天皇も亦行幸ありて堂宇を再建せられ同時に方一里の地を賜ひて勅願所と定められたりと云ふ、堂宇壯麗にして數多の寺寶を藏し境内又名區多く其の山奥にある香海庵及び富士見臺の如き殊に著名なり、山麓朝熊村には旅店角屋久右衛門、豆腐屋幸十郎其他數軒并に名物萬金丹を鬻ぐ家多し、又此地より二見ヶ浦までは里程一里十町ばかり人力車賃十錢なり

● 二見ヶ浦海水浴

二ヶ見浦は伊勢第一の勝區にして山田町の東二里餘（人力車賃十五錢）度會郡立石江村の西北海濱の名なり倭姫命世紀に曰く二見濱御船創坐于時大若子命附此國名何止問給不白久速雨二見浦止白支云々即ち是なり浦頭に立石崎あり眺望絶佳にして遠くは尾、参の翠巒近くは本州北部の諸山を

雲烟縹渺の間に觀、岸邊には奇石怪岩起伏して風光明媚なり其の海岸數間を隔て、著名なる二ツ岩あり二岩の相距ると三間其形ち門闕の如く大なるもの高さ二十九尺周圍百三十尺餘、小なるもの高さ十二尺周圍三十尺俗に稱して注連掛岩と云ふ蓋し二岩に注連を張り其の注連朽れば之を新にし常に絶ゆるとなさうが故なり、岩は色蒼黒にして木理紋を爲し退潮の時には歩いて渡るを得べく又近傍に鯨石、鼻岩、鶏冠岩、屏風岩等あり皆其形ちに依りて名く、其の後山に傘の臺あり樹木鬱蒼たる處を伐開きて休憩所となし傘を開きたるが如き形の家根を設く故に此名あり、參宮の客常に此地に來遊するのみならず旭日を拜する此地を以て最とし毎歳一月一日の如きは未明より庶人群集し爲めに立錐の地をも餘さざる事あり、海濱に賓日館あり去る明治十四年時の縣令石井邦猷氏が有志と謀りて建設せし俱樂部やうの建物にして建坪百二十餘坪ばかり總二階建ちにして其の工費六千圓と云ふ以て構造の尋常ならざるを知るに足るべし、此館今は神園會に屬し普通の旅人を宿泊せしめず曾て 皇太后陛下が神宮御參拜の折御立寄り遊ばされ又昨年 皇太子殿下が御避暑の際御滞在遊ばされしは即ち此館なり、其の隣地に海水浴場清渚亭(若松徳平)あり家居手廣にして前は直ちに海濱浪打ち際に接し眺望快諭、空氣清良、潮水は澄みて玉の如く夏日の冷浴游泳に適す樓主徳平風流の志ざしありて浴客中文學書畫に長じたる者と見れば必ず染筆揮毫を請ひ其の書畫類を貯ふる數百枚に及ぶと云ふ、同家の宿料は一日上等五十錢、中等三十五錢、並二十五錢、魚類は新鮮にして且頗る佳味なり

● 日和山

二見ヶ浦より松下、堅神を経て志州鳥羽町に至る一里半(人力車賃十二錢、鳥羽の西北に一小丘陵あり日和山と云ふ海面より高さこと僅かに百八十尺、麓より頂に至る阪路三町半、船人巔きに登りて天氣を觀測す

るを常とするが故に此名あり山上に古松あり海越の松一名天神松とも云ふまた石造の磁針器あり其近傍に芭蕉翁の碑を建て「鷹ひとつ見つけ嬉し伊良胡崎」の一句を鐫れり、松を海越といふは古歌に「日和山しぐれし跡にはの見わて白雲かゝる海越の松」と云ふに因れるものなりとぞ、此山に登臨すれば東北に安樂島、菅島、手阪島、荅志島、桃取島、舩島其他無数の小島嶼を瞰下し右に鳥羽の舊城趾、左に小濱の岬を望み眼下に岩崎山、大杉山、主水山等を眺め白帆は青松の間に隠見して、其の絶景殆ど奥州の松島に髣髴たり先年 皇太子殿下此の山に登らせ給ひて深く其の景を賞せられしも亦た宜なり、宇佐田ヶ濱の海濱に小島あり島上二株の松樹ありて其の形ち起て舞ふが如し之を愛兒の松と云ふ、旅客此の山に登りて猶ほ風景に飽くことなくんば更に鳥羽町に出で、扁舟を雇ひ此の島嶼を巡覽するも亦一興なるべし、鳥羽町には旅店大阪屋なか、酒井屋善十郎、三河屋寅吉、大島屋卯助及び料理店八百萬（旅店兼業）等ありて島巡りの舟を雇ふの周旋を爲す（是より以下再び東海鐵道の幹線に戻る）

● 名古屋市

名古屋市は三府に次ぐ大都會にして市坊の數二百七十四、戸數凡そ四萬五千を有し街衢縱横、富商翁を連ね物貨日に輻湊し車馬の來往織るが如し、其の北端に舊名古屋城の天主閣あり慶長十五年の創建にして加藤清正其の建築を督せりと云ふ、五層の樓閣高く雲表に聳え閣上の屋の棟に一雙の金鯢を置く汽車の旅客は名古屋に近づく一二里にして金色の日光に映じて燦然たるを認むべし此城内今は離宮となり其二ノ丸跡に第三師團の司令部を置けり、市内には愛知縣廳を始め諸官衙、銀行、各會社等頗る多く又神社佛閣には若宮八幡、朝日神明社、櫻天滿宮、兩本願寺別院、大洲觀音、長福寺等あり、市街の最も熱鬧なる處を本町、鐵砲町、末廣